



(1) 鹿背山瓦窯跡全景（北西から）



(2) 古墓S X 18 遺物出土状況（東から）

2. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡

平成 19 年度発掘調査報告

はじめに

関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡の発掘調査は、独立行政法人都市再生機構の依頼を受けて、昭和 59 年度以来（当時は住宅・都市整備公団）継続して実施しているものである。平成 19 年度は、鹿背山瓦窯跡・馬場南遺跡の 2 遺跡について発掘調査を実施した。

鹿背山瓦窯跡は、京都府木津川市鹿背山須原に所在する。過去、丘陵上で耕作中に焼土が検出され、重圈文軒丸瓦と重郭文軒平瓦も採集されていたことから、瓦窯跡の存在が推定されていた。^(注1) 鹿背山瓦窯跡の発掘調査は平成 18 年度に試掘調査を実施し、丘陵南側斜面から瓦窯跡 2 基、窯跡下の水田部から灰原、丘陵上で柱穴等の遺構を検出した。^(注2)

今年度は、丘陵部平坦面で検出した柱穴等の遺構が、瓦窯に関連した工房跡であることが予想されるため、丘陵上の平坦地を対象として面的な調査を実施した。現地調査は、平成 19 年 4 月 24 日～平成 20 年 2 月 26 日までの期間で実施した。調査面積は約 4,800㎡である。

馬場南遺跡は、京都府木津川市木津糠田に所在する。馬場南遺跡は、過去の分布調査で丘陵斜面と谷部（水田）周辺から奈良時代の須恵器や土師器が採集され、窯跡存在の可能性が考えられていた遺跡である。^(注3) 今回の発掘調査は、遺跡の性格や範囲の確認、遺構や遺物の状況把握を目的として実施したトレンチによる試掘調査である。現地調査は、平成 19 年 10 月 9 日～平成 20 年 2 月 22 日までの期間で実施した。調査面積は約 1,800㎡である。

発掘調査は、当調査研究センター調査第 2 課調査第 3 係長石井清司、同主任調査員引原茂治・竹原一彦・岩松 保・森島康雄、同専門調査員石尾政信、同主査調査員柴 暁彦、調査員村田和弘が担当した。発掘調査および整理作業には多くの調査補助員・整理員の参加・協力^(注4)をいただいた。本報告は、竹原と柴のほか、渡辺理気（奈良大学大学院卒、）大谷博則（奈良大学大学院）が分担して執筆した。なお、報告図面で使用している座標は、世界測地系座標である。

調査期間中は、京都府教育委員会・木津川市教育委員会・京都府立山城郷土資料館・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所などの関係諸機関、網 伸也氏、上原真人氏、大脇 潔氏、奥村茂樹氏、小澤 毅氏、金子裕之氏、高 正龍氏、狭山真一氏、鋤柄俊夫氏、巽淳一郎氏、坪井清足氏、中井 公氏、西崎卓哉氏、林 正憲氏、菱田哲郎氏、藤原 学氏、藪中五百樹氏、山本清一氏からご教示・ご協力をいただいた。

なお、調査にかかる経費は、全額、独立行政法人都市再生機構が負担した。

(竹原一彦)

位置と環境

木津川市は、京都盆地の最南端に位置する。京都盆地は旧巨椋池を境に京都市域を中心とする北山城と南に位置する南山城に区分することができる。南山城地域は南北約14km・東西約2～3kmの狭長な地形で、その中央には木津川が流れている。木津川は、三重県布引山地を源流とし、西流して南山城地域南部の木津川市木津付近で流れを北に転じ、大山崎町で宇治川・桂川と合流し、淀川となり大阪湾に注ぐ。木津平野では井関川・鹿川・山松川・山田川など木津川の支流があり、これらの河川によって沖積平野を形成している。盆地の周囲には、標高100m前後を最高所とする丘陵地形がみられる。

木津平野とその周辺部では古くから人々の活発な生活が営まれ、平野や丘陵上に数多くの遺跡が存在している。

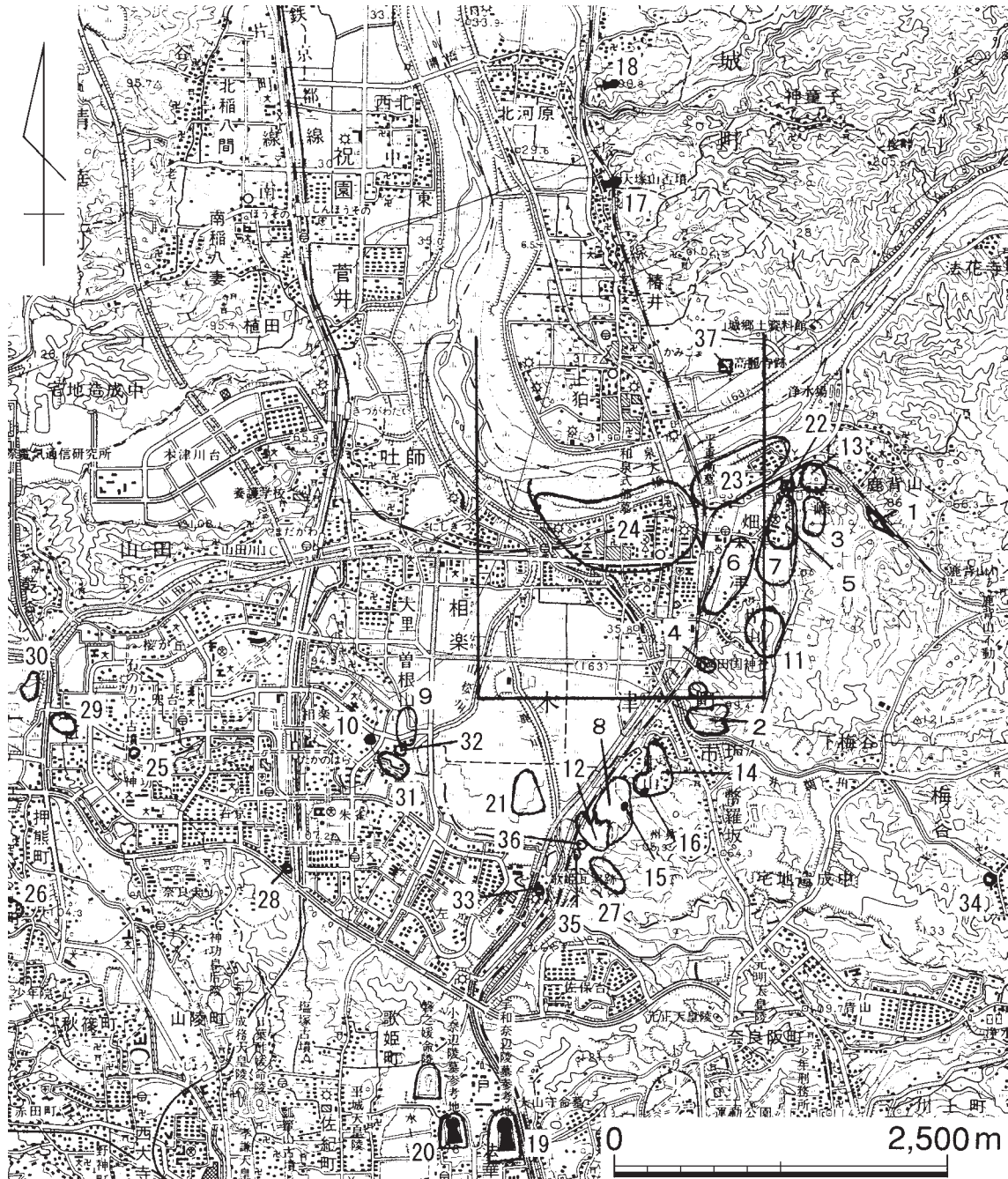
旧石器時代では、東側丘陵に岡田国遺跡の1例が知られる。遺跡はJR木津駅の南方に位置し、木津川市域における最古のサヌカイト製彫器が出土している。

縄文時代では、木津平野の東側丘陵に後期から晩期にかけて遺跡が形成される。同丘陵北部では燈籠寺遺跡・片山遺跡・内田山遺跡が知られ、土器・石器などの遺物が出土している。内田山遺跡では落とし穴遺構が検出されている。晩期では、同丘陵の南方に位置する瓦谷遺跡で土壙墓が検出されている。

弥生時代では、木津平野の西側丘陵に扁平鈕式袈裟文銅鐸出土地として知られる相楽山遺跡と、その母村と考えられる大島遺跡（中期）が存在する。東側丘陵上には赤ヶ平遺跡（前・中期）・燈籠寺遺跡（中・後期）・木津城山遺跡（後期）・内田山遺跡（後期）・上人ヶ平遺跡（後期）・西山遺跡（後期）などが知られる。なお、各遺跡と平野部との比高差はおおむね20m前後であるが、木津城山遺跡のみは比高差約70mを測る。東側丘陵裾から平野部にかけて片山遺跡（後期）・白口遺跡（後期）などの集落遺跡が分布する。

古墳時代では、前期に木津川を挟んだ対岸の木津川市山城町で椿井大塚山古墳（全長約175m）・平尾城山古墳（全長約110m）などの大型前方後円墳が築造される。前期から中期にかけて、奈良山丘陵の南側では佐紀陵山古墳（全長約207m）・ウワナベ古墳（全長約255m）・コナベ古墳（全長約204m）に代表される大型前方後円墳で構成される佐紀盾列古墳群が存在する。木津平野では、前期後半に、前方後円墳である瓦谷1号墳（全長約51m）が築造される。以後、中期から後期にかけて、瓦谷古墳群・内田山古墳群・上人ヶ平古墳群・西山塚古墳などに代表される中小規模の古墳群が順次築造される。この他、同丘陵部に瓦谷埴輪窯跡群・上人ヶ平埴輪窯跡群が築造される。古墳時代の集落はこれまでほとんど確認されていないが、後期の集落跡として弓田遺跡が知られる。

奈良時代では、平城宮・京に近い関係から多くの同時期の遺跡が集中する。また、市域東部の瓶原の地には短期間ではあるが恭仁宮が造営され、木津平野の北東部が京域（右京）に含まれる。木津平野は都と諸国を結ぶ交通の要衝の地でもり、平城京から奈良山を越え、南山城の地を四通八達して北陸・東山・東海・山陰・山陽を結ぶ古道や、水運の要でもある泉津などが知られる。



1. 鹿背山瓦窯 2. 馬場南(文廻池)遺跡 3. 赤ヶ平遺跡 4. 岡田国遺跡 5. 灯籠寺遺跡
6. 片山遺跡 7. 内田山遺跡・内田山古墳群 8. 瓦谷遺跡・古墳群・埴輪群 9. 大島遺跡
10. 相楽山遺跡 11. 木津城山遺跡 12. 上人ヶ平遺跡・古墳群・埴輪窯跡群 13. 白口遺跡
14. 西山遺跡 15. 瓦谷1号墳 16. 西山塚古墳 17. 椿井大塚山古墳 18. 平尾城山古墳
19. ウワナベ古墳 20. コナベ古墳 21. 弓田遺跡 22. 燈籠寺廃寺 23. 上津遺跡 24. 木津遺跡
25. 石のカラト古墳 26. 中山瓦窯跡 27. 瀬後谷瓦窯跡 28. 山稜瓦窯跡 29. 押熊瓦窯跡
30. 乾谷瓦窯跡 31. 歌姫西瓦窯跡 32. 音如ヶ谷瓦窯跡 33. 歌姫瓦窯跡 34. 梅谷瓦窯跡
35. 五領池東瓦窯跡 36. 市坂瓦窯跡 37. 高麗寺

第1図 調査地位置図
(国土地理院『奈良』1/50,000に加筆)

奈良時代の遺跡としては、特に、奈良山丘陵から東側の丘陵にかけて、瓦窯跡や瓦工房跡などが多数分布し、奈良山瓦窯跡群として知られるところである。同瓦窯跡群は、当初、平城京の北側奈良山丘陵に築窯されたようで、中山瓦窯跡・歌姫西瓦窯跡・山陵瓦窯跡などが知られる。以後、時期が下がるにしたがって瓦窯跡は次第に東へと移り、木津平野の東側丘陵部に築窯されていく。東側丘陵では、平城宮・京に供給した瀬後谷瓦窯跡・市坂瓦窯跡、興福寺に供給した梅谷瓦窯跡、法華寺に供給した音如ヶ谷瓦窯跡・五領池東瓦窯跡などが知られる。音如ヶ谷瓦窯跡では、最古の^{ゆうしやう}有床式平窯が検出されている。瓦工房跡では、市坂瓦窯跡の北東側に隣接する上人ヶ平遺跡が知られており、市坂瓦窯跡で焼成される瓦を製作していた。

木津川市域では、白鳳期創建の古代寺院として高麗寺跡・蟹満寺の2寺が知られる。法起寺式の伽藍配置である高麗寺跡は、大きく蛇行する木津川の北岸河岸段丘上に立地する。また、市域北部にやや離れて蟹満寺が所在する。多種多様な遺跡が多数存在する木津平野とその周辺部は、弥生時代から古墳時代にかけては大和と地方を、奈良時代は都と諸国を結ぶ交通路の要衝であり、古代より人々の活動が盛んな地であったことを物語っている。

(大谷博則・竹原一彦)

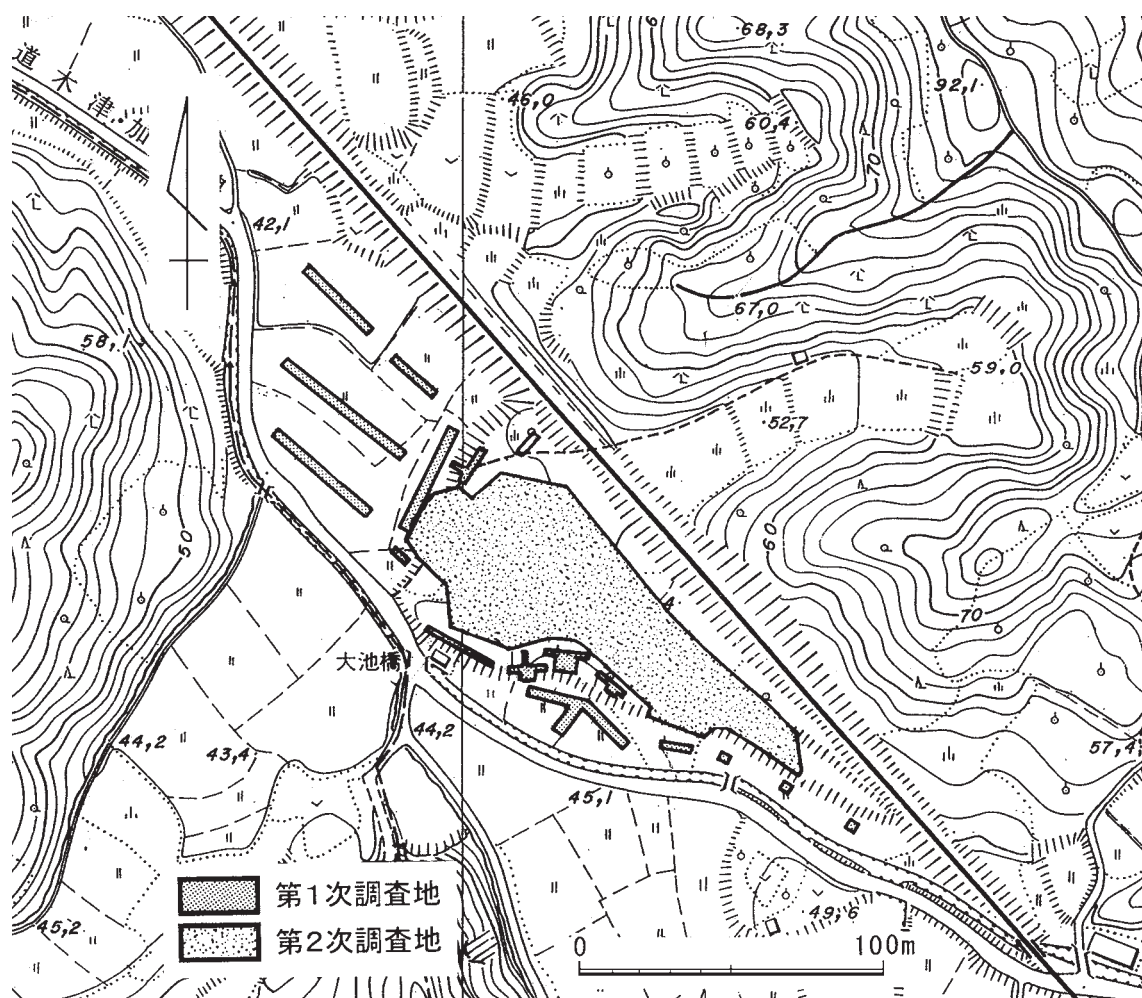
(1) 鹿背山瓦窯跡第2次調査

1. はじめに

鹿背山瓦窯跡は、京都府木津川市鹿背山須原に所在する。瓦窯跡は、木津川の支流である大井手川右岸の合流部から約800m遡った右岸丘陵部にあり、大井手川によって南東から北西方向に開析された狭長な谷筋の低い舌状台地上に存在する。当該地は、平城宮・平城京などの瓦を焼いた官窯が密集する奈良山丘陵のなかでも、最も北東端に位置する。鹿背山瓦窯跡は、過去に丘陵部から重圈文軒丸瓦や焼土塊が採取されたことから、瓦窯跡の存在が推定されていたところである。

鹿背山瓦窯跡の本格的な発掘調査は、当センターが実施した平成18年度試掘調査(第1次調査)に始まる。この試掘調査では、JR西日本軌道敷地以南の丘陵部に11か所、丘陵裾と大井手川間の水田部11か所、合計22か所の試掘トレンチを設けて調査を行った。調査の結果、丘陵南側斜面から1号窯・2号窯の2基の瓦窯を検出したほか、窯跡下部の水田下で多量の瓦が堆積する灰原の存在を確認した。一方、丘陵西裾では、大井手川の氾濫原や湿地堆積を確認したほか、丘陵裾の平坦地では中世土器を含む包含層や溝・柱穴を僅かに検出した。丘陵上のトレンチでは、埋没した谷地形や奈良時代の土器や瓦を含む遺物包含層を検出したほか、小規模な柱穴の存在を確認した。なお、2基の瓦窯は上面での平面輪郭のみの調査にとどめ、窯体内の構造等を確認するための調査は実施していない。

今年度の発掘調査は鹿背山瓦窯跡の第2次調査として、丘陵上で瓦窯関連の遺構の検出を目的に丘陵上を調査の対象とした。発掘調査では、表土層の除去には重機を使用した。その後の遺構



第2図 トレンチ配置図

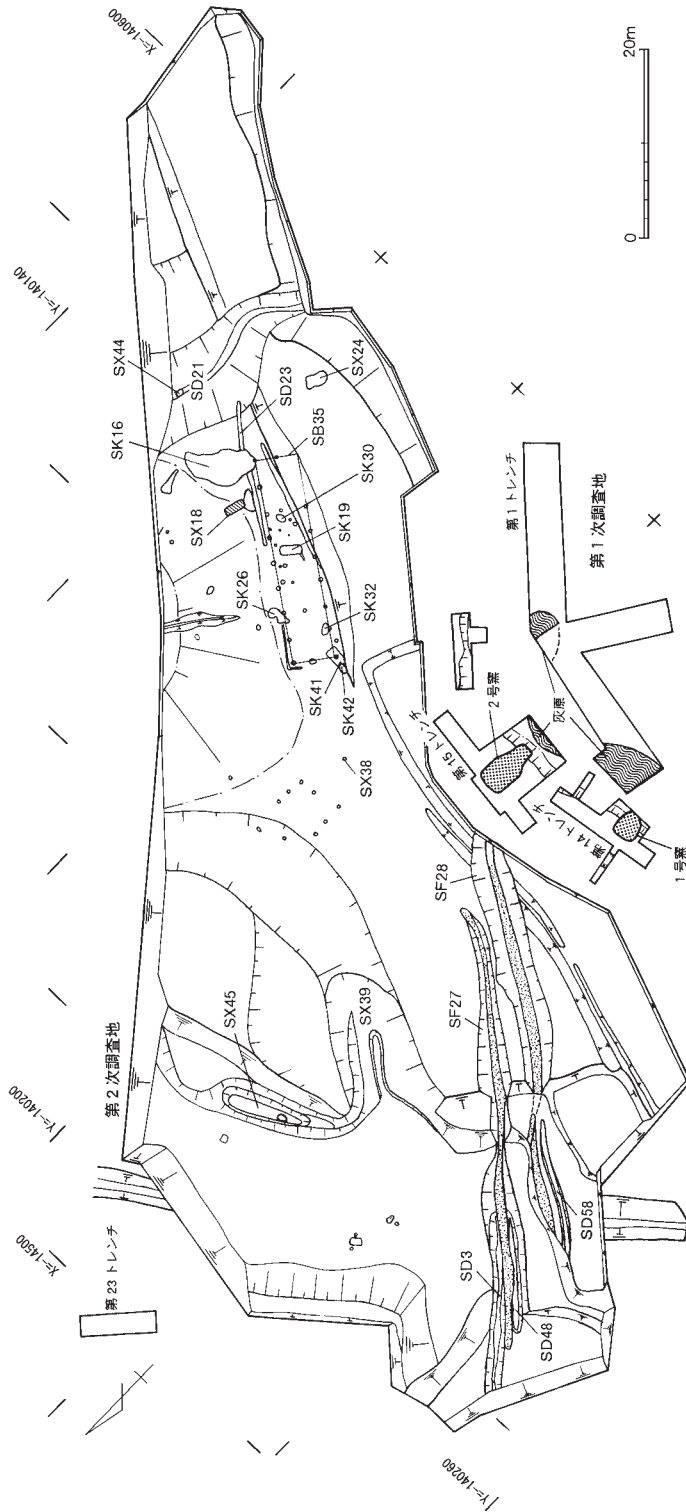
検出と遺構内の調査では、人力による掘削作業を行った。

2. 調査概要

第2次調査の対象地は、北東から南西方向に向かって緩やかに舌状に張り出す2本の丘陵にまたがり、北東側はJR西日本大和路線（関西本線）敷地境界によって区画されている。今回の調査で検出した主要な遺構は、この2本の尾根のうち規模の大きな南側尾根に分布していた。一方の北側尾根は痩せ尾根であり、顕著な遺構は検出できなかった。調査対象地の地山層は、川原石による砂礫や砂・粘土が堆積した大阪層群で、比較的軟弱な地盤である。

今回の調査では、南側尾根の東部から、遺跡の東側を区画する大溝（SD 21）を検出した。また、この大溝の西側から掘立柱建物跡（SB 35）1棟・土坑（SK 16・19・26・30・40・41）・溝（SD 23）の他、平安時代の古墓（SX 18）1基と江戸時代の火葬墓（SX 24）1基を検出した。丘陵の西部では、通路遺構（SF 27・28）や粘土採掘遺構（SX 39・SK 45）などのほか、中世以降に土砂の堆積が進んだ谷地形を検出した。以下、検出した主要遺構・主要遺物について報告する。

(1) 遺構



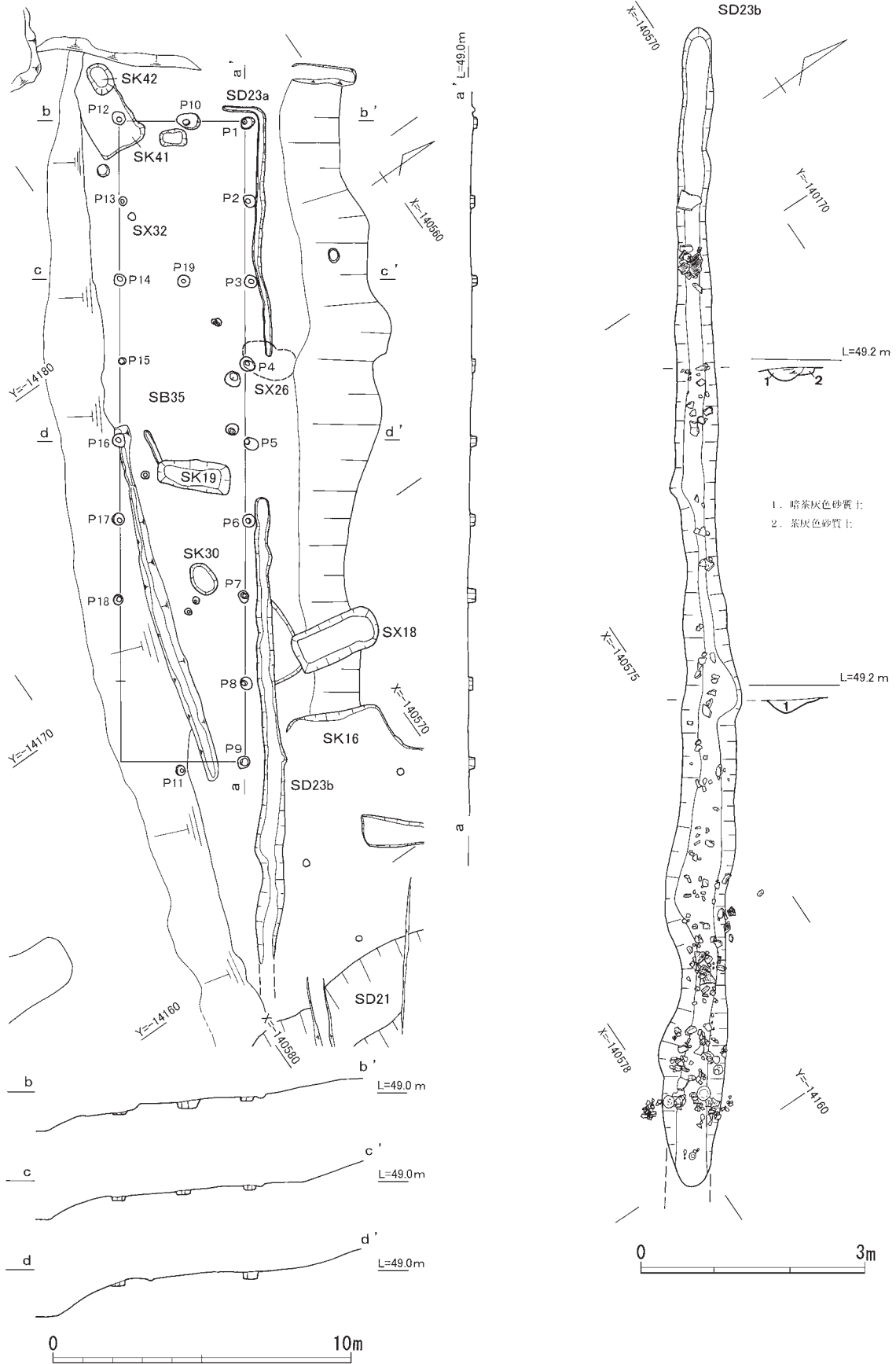
第3図 鹿背山瓦窯跡検出遺構図

①建物関連遺構 掘立柱建物跡1棟と溝を検出した。

掘立柱建物跡S B 35(第4図) 2号窯の東側丘陵上から検出した掘立柱建物跡である。丘陵南側斜面部で検出した2号窯とは、およそ20m離れた位置関係にある。南に緩やかに下がる丘陵尾根の南東斜面は、ほぼ建物跡S B 35が収まる範囲で一回り大きい平地を削り出し、その場にS B 35が建てられている。S B 35は、東西の桁行が8間(全長約21.6m)、南北方向の梁間2間(幅約4.5m)の規模を測り、建物主軸は北から西に約35°振っている。建物跡の南側桁行柱列では、南東隅とその西側の柱穴2か所が既に後世の削平で失われている。柱穴掘形は円形を呈し、直径は0.3~0.5mを測る。柱穴掘形の深さは、多くの柱穴が検出面から0.25m前後と浅い。柱穴掘形の底面は、全体的に北東側桁行柱穴が南西側より標高が高い位置に

ある。各柱穴掘形の深さに極端な差が認められないことから、建物の立地する平地は水平ではなく、もともと南側に下がる傾斜があったと推測される。

S B 35における柱穴の心々間は、桁行がほぼ9尺(2.7m)の等間隔を測るが、梁間は4.2~4.3mを測るもので、片流れの屋根であったとも考えられる。建物内部では、柱穴P 3とP 14を



第4図 掘立柱建物跡 S B 35、S D 23 実測図

結ぶ中間地点に柱穴P 19が存在する。また、柱穴P 7とP 18を結ぶ中間付近にも、P 25とP 26の2基の柱穴が存在する。柱穴のP 19とP 25・26は、ともに東西の妻側から2間目の柱筋と、棟柱であるP 10とP 11を結ぶ交差点に位置している。S B 35は桁行の長い建物でもあり、P 19とP 25・P 26は建物内の棟柱と考えられるが、建物内の区画を意図した柱の可能性も残る。柱穴P 25とP 26は、近接する位置関係や規模が同じ状況から、建物の改修に伴う柱の建替えとみられるが、柱穴の先後関係は不明である。

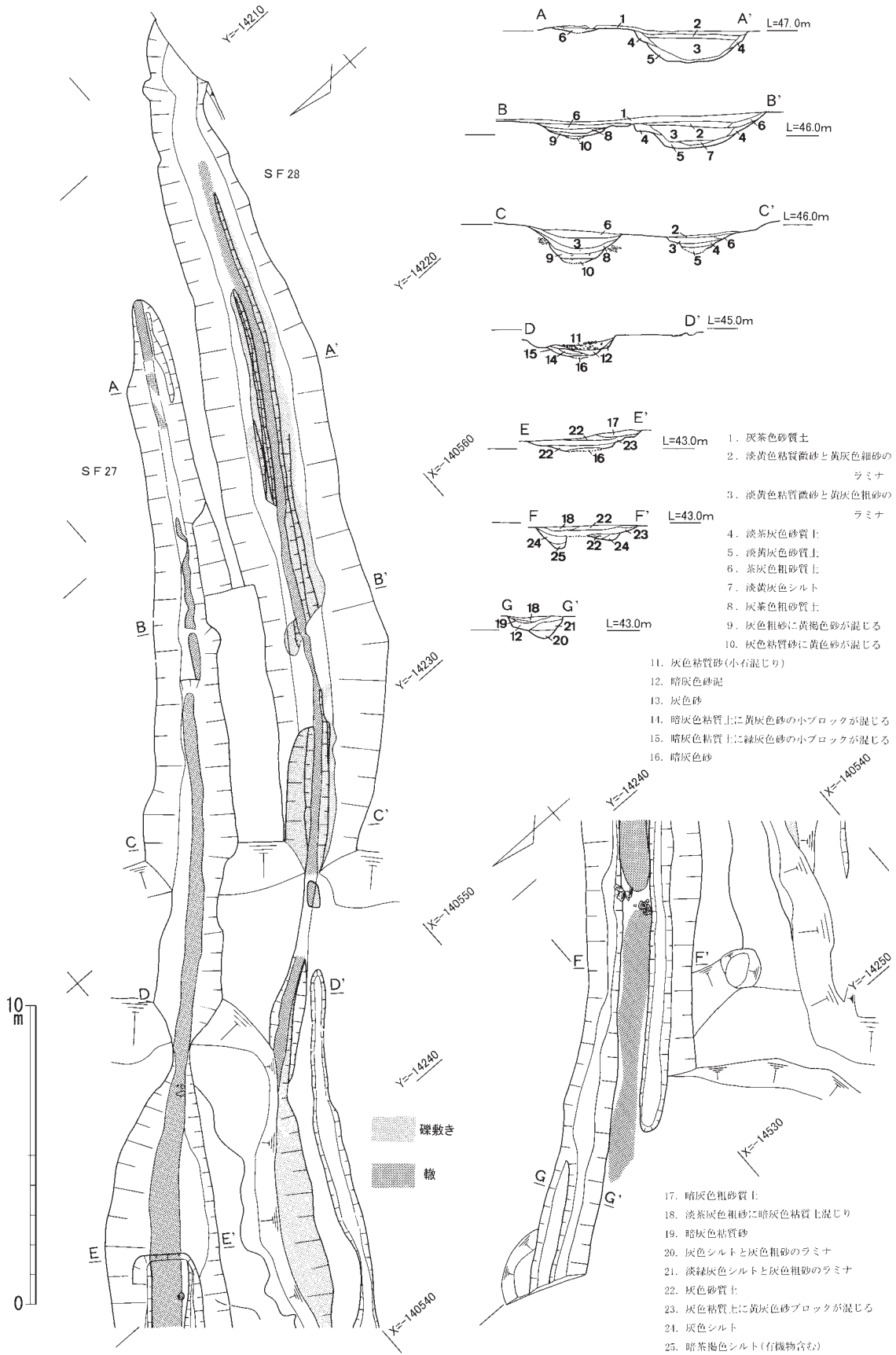
検出したS B 35の柱穴の深さが浅い状況は、遺構面が後世に削平された可能性も考えられる。S B 35は規模の割に柱穴内の柱痕跡の直径がいずれも0.2mを越えず、細い柱が使用されている。このような状況から、S B 35は、規模や形状から瓦の整形や乾燥の場として使用された簡素な建物跡の可能性が高い。

柱穴に伴う遺物は少なく、掘形内から須恵器の破片が出土したが量的には僅かである。

溝S D 23 (第4図) 掘立柱建物跡S B 35に沿う状況で検出した、L字に屈曲する素掘り溝である。この建物北東側のS D 23は、建物中央付近で一旦溝が途切れる状況にあるが、約28mにわたって溝を検出した。S D 23の東端はS B 35の東妻部を越えて直線的にS D 21に注いでいる。建物の西妻側は、建物跡北隅の柱穴P 1北側を屈曲点として南西方向に約1.2m延びた後、後世の削平でその先は失われている。溝は幅約0.2～0.3m、深さは0.1m前後を測る。S D 23は、S B 35に対してほとんど距離をとることがなく、近接して存在している。S D 23と建物柱穴柱当たりの心々間は、平均で約0.3mの距離を測る。S D 23はS B 35の雨落ち溝と考えられるが、特に桁行側の柱穴と溝間の間隔が狭く、この場合、建物の軒の張り出しが僅かしか得られない。また、建物南西側には雨落ち溝が確認できない。このような状況からみて、S D 23は建物に付属する雨落ち溝とみるよりも、上方丘陵斜面からの雨水がS B 35に入るのを防ぎ、S D 21へ排水する排水溝としての役割が主目的と考えられる。建物北東側のS D 23は、S B 35の柱穴P 3から柱穴P 4にかけてやや外側に膨らみ、ほぼ建物の中央付近となる柱穴P 4から柱穴P 6にかけて一旦途切れている。この部分では溝底が緩やかに上がっていく状況から、後世の削平で高所部分が失われたとみられる。S D 23は丘陵側の雨水を排水するには規模があまりにも小さく、排水機能も貧弱であることから、当初は現状より規模が大きかったとみられる。S B 35とS D 23を検出した地山面は、瓦窯廃絶後に削平された可能性が高い。

S D 23溝内から、須恵器(第14図1-36)・平瓦・丸瓦の破片や鉄製刀子(第25図249)が出土した。遺物の大半は、S B 35の南東側に位置する柱穴P 6付近からS D 21にかけて集中している。

②通路遺構(第5図) 丘陵の南西部から、2本の平行する通路跡S F 27とS F 28を検出した。S F 27とS F 28は、第1次調査で検出していた丘陵西側の平地と、建物跡(S B 35)や窯跡(1号窯・2号窯)の存在する丘陵上を結んでいる。2本の通路は、丘陵斜面部を大規模に削り下げ、底面には石敷きを施している。なお、この通路遺構の西裾部は通路が機能停止したのち、大井手川の土砂が堆積していた。通路遺構の西側には平坦部が存在し、平安時代から鎌倉時代に属する



第5図 通路遺構 S F 27・S F 28 実測図

溝SD3や柱穴等を確認していることから、何らかの利用が行われたと思われるが、その性格については明らかでない。

通路遺構SF27 2本の通路のうち北側のSF27は、丘陵部で上面幅約3m、深さ約1mの規模で切り通して整形している。底部には石敷きによって路面を整形し、一部では石敷きの両側に溝を設けている。SF27の東端部は丘陵上の平坦地中程で終わっている。検出したSF27は全長約48mを測るが、通路を更に東に延長すると建物跡SB35が存在する。SF27の東端からSB35まで約25mの距離を測るが、SF27の方向性や周辺の状況等から、SF27はSB35付近まで延びていたことも考えられる。

SF27の西端は、丘陵北部を北東から南西に延びる谷の開口部を介して、丘陵西裾の平坦地につながり、谷口部の平坦地で通路の両側に側溝(SD3・SD48)を設けている。側溝間の通路面は0.9m前後を測り、路面西端部の石敷きは細かな石が使用されるが、丘陵西裾の平坦地に達したところで石敷きが終わっている。

溝SD3は検出長約24mを測る通路の北側側溝であり、その西端は第1次調査の第6トレンチから更に西方に延びる状況にある。第6トレンチの西には大井手川の氾濫原が存在し、雨水を排水したと考えられる。SD3の溝底は西に向かうほど深さを増し、第6トレンチ西端では溝幅1.3m、深さ約1mを測る。南側溝であるSD48は、全長約13m、幅約0.8m、深さは0.2m前後で浅い。

SD48の西端部は丘陵西裾に達した地点で終わり、平坦地を越えてさらに西方の氾濫原に達する状況にはない。SD48の西端から約8m南東の地点は、SF27の路面傾斜の変換点にあたり、それより西側は路面がほぼ水平になる。同一地点のSF27の路面はちょうど0.6mの幅で石敷きが途切れ、路面部が窪んだ状況が認められる。この窪みはSD3とSD48を結ぶ状況から、SD48を溢れた雨水は窪みを経由してSD3に流れていたようである。

SF27は、SF28と同様に通路部分底面に小石が敷詰められており、石敷きの中央部が幅約0.3～0.4mの範囲で特に硬く踏み固められて凹み状となっている。この石敷きの硬化部分は周辺部の小石に比べて小さな小石が多く、石敷き面は平坦で硬く締り、あたかもタイル張りに近い様相を呈している。この石敷きの硬化部分については、一輪の荷車等の轍跡と考えられた。この石敷きの小石は、丘陵を形成する大阪層群中に同種の礫層の堆積があることから、通路の掘削に伴って得られた小石を利用しているようである。

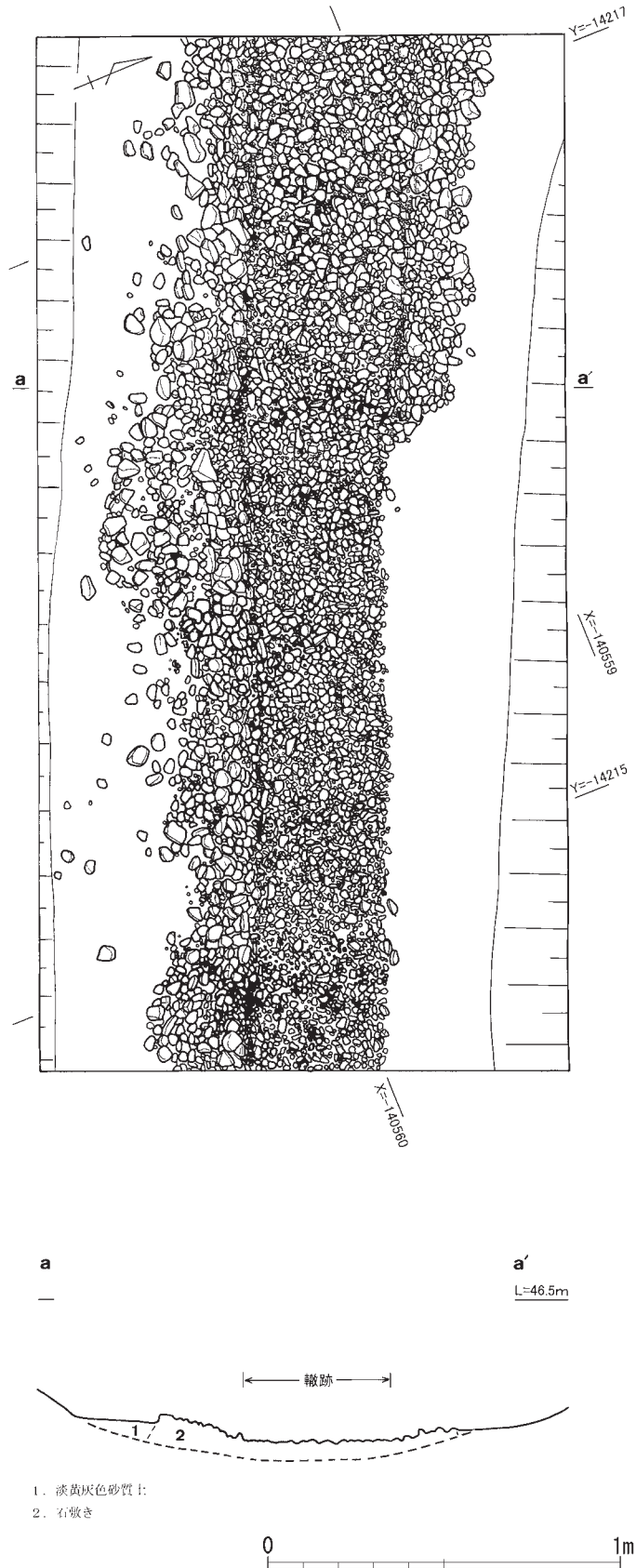
SF27の西部は谷部を横断することから、西半部の傾斜も丘陵部に比べ緩やかになる。この西部付近では路面上の土砂の堆積が顕著であったとみられ、第5図D-D'断面付近では轍路面の上に0.5m程土砂が堆積し、その上面に再度石敷きを行って通路を作り直している(下層通路SF27a・上層通路SF27b)。この嵩が上がったSF27bの通路は、西部の大半が平安時代末から鎌倉時代頃に造成された谷部平坦地の拡幅に伴い、大規模に削平されている。路面が作り直されたSF27の西端部は、第5図D-D'以西の状況については不明な点が多いが、路面傾斜はSF27aに比べて緩やかになったとみられる。

S F 27 の堆積土の中層（第 5 図 8・9 層）から、多量の瓦に混じって須恵器（第 14・15 図 37～57）・鉄製刀子（第 25 図 250）などの遺物が出土した。瓦には軒丸瓦（第 23 図 235・236）も含まれたが、平瓦と丸瓦の破片が大多数を占め、出土量は整理コンテナ 20 箱を超える。

通路遺構 S F 28 S F 27 の南側を蛇行しながら並走する通路遺構で S F 27 と S F 28 の心々間距離は約 4 m を測る。西側丘陵裾部分を後世の削平で壊されているが、長さにおいて約 34 m の範囲を検出した。S F 28 の東端部は調査トレンチ外に延びるが、東側に約 4 m 離れて 2 号窯が存在することから、S F 28 の東端は 2 号窯の手前で終わるものと考えられる。

S F 28 の西部は後世の削平により西端部の状況は不明である。S F 28 の西部では、谷の口付近の南側斜面部に沿って南西方向に延びる状況にあり、通路の斜面部を覆う石敷きが検出されている。S F 28 の西半部では路面は失われているが、通路は谷の南斜面に沿って丘陵西裾の平坦地に達していると考えられる。

路面の石敷きは、S F 27 より S F 28 のほうが格段に良い遺存状況にある。S F 28 の東部で路面の石敷きを部分的に図化（第 6 図）した。第 6 図にみる石敷きは、北東側（右



第 6 図 S F 28 石敷き実測図実測図

下)のラインが整った直線を示す。石敷き中央にはS F 27と同様に、幅35cm、深さ6cmの1条の凹みが平行して存在する。S F 27と同様に、この凹みは一輪車による轍の痕跡と思われる。轍の両側は石敷きが盛り上がるが、個々の石は簡単に剥がれる状況にあり、密着してはいない。S F 28の西側下方では、轍と石敷きとの高低差が15cmを越える地点も存在する。

通路の形状を最もよく残すS F 28は、上面最大幅約4m、深さ約1.1mを測る。横断面がU字形で、大規模に丘陵地山を掘り下げて切り通し状を呈している。

規模・形状が似かよるS F 27とS F 28は、唯一、路面の傾斜角度が大きく異なっている。北側のS F 27(第5図B-C間)の路面傾斜角は約9°であり、南側のS F 28(第5図B-C間)では約4°を測る。路面の傾斜角はS F 27は急勾配であるが、S F 28は逆に緩い勾配に仕上げられている。この路面傾斜が異なる状況は、物資の輸送や通行に関連して、S F 27とS F 28の使用状況が異なることに起因するのかもしれない。急勾配のS F 27は軽量物を、緩い勾配のS F 28は重量物の運搬に使用された可能性もある。

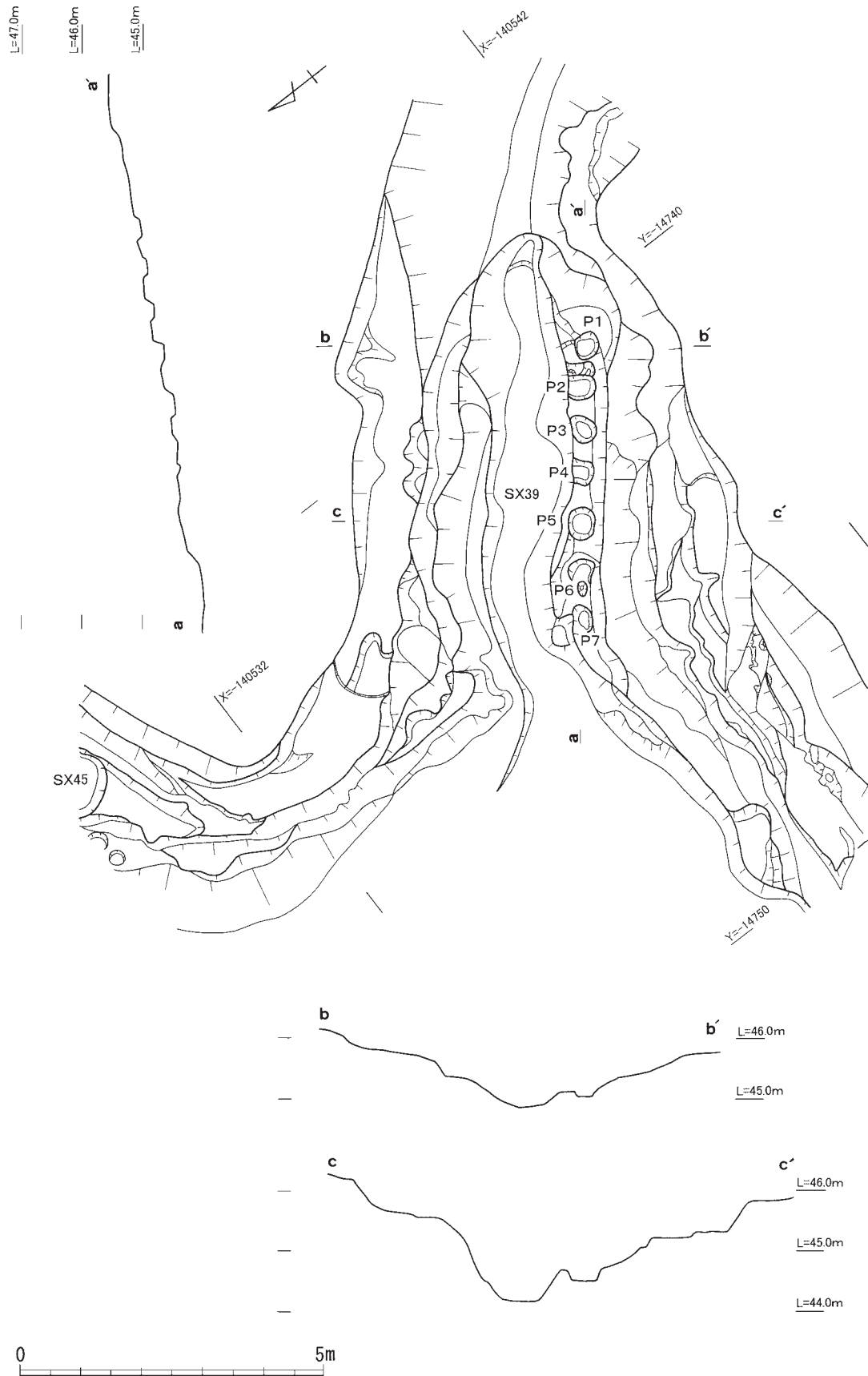
溝S D 58 S F 28では、第5図D-D'付近以西の南側路肩斜面に石敷きが存在し、その南側に近接して浅い溝S D 58が併走している。S D 58は幅約0.5～0.8m、深さ約0.05mで、検出全長は約14mを測る。溝底には顕著な石敷きが存在しないことや、S F 28との並走関係等からみて、S F 28に付属する排水溝の可能性が高い。ただ、S F 28のC-D間での路面の方向性が素直に続く状況は、S D 58がS F 28の旧路面とみることも可能である。

③粘土採掘穴遺構 丘陵の西部には、北東から南西方向に延びる小規模な谷地形(上端幅約20m)が存在している。この谷の東側斜面の調査において、粘土層・砂層・砂礫層の路頭面がみられた。これら地層は一般的に大阪層群と呼ばれる比較的軟弱な地質である。標高46m付近に2～10cm大の丸みを帯びた小石が約0.3mの厚さで堆積し、その下に黄色身を帯びた灰白色の粘土層が堆積する。粘土層の厚さは斜面の路頭で最大約1m前後(S X 39)を測る。この灰白色の粘土を採掘し、混和材を加えて生瓦を整形した可能性が考えられる。

S X 39(第7図) 通路S F 27から北東側に約10m離れた谷の東側斜面から、粘土採掘場とみる幅約10m、奥行き約12mの大規模な切り通し状の凹みS X 39を検出した。

S X 39は、粘土の露頭する谷斜面を逆漏斗形に南東方向に掘り進めている。北西側開口部の丘陵上からの深さは、底部まで約2mを測る。底面には硬い緑灰色の粗砂が広がり、粘土層は無くなっている。調査に伴って埋土の掘削を進めた結果、S X 39の両斜面には丘陵上部から中央底にかけて階段状に下る小さな平坦面が存在した。粘土中には薄い細かな砂層が存在し、その砂層によって水平方向の粘土の摂理が確認された。このような斜面部の階段状に残る粘土面の状況は、粘土採掘の際に摂理に沿った採掘を行っていたことを示している。粘土面での精査では採掘工具の痕跡は確認できなかった。

S X 39の南西側面には、0.4～0.5m幅で西から東方向に緩やかに上る粘土の摂理面がみられ、0.3～0.5mの間隔をあけて小規模なピット列(断面図a-a')が存在する。各ピットは直径0.5m前後、深さは0.1～0.2mを測り、底は平坦である。粘土採掘後のピットとも考えられるが、



第7図 粘土採掘場 S X 39 実測図

ピットの底面が東側丘陵上に向かって次第に上がる状況は足場とみることも可能である。この a - a' 間を使った、丘陵上と粘土採掘場を結ぶ通路が存在した可能性も考えられる。

S X 39 から東側の丘陵部は、建物跡 S B 35 の北側尾根筋が西に下る先端部にあたり、粘質の強い砂質土が堆積した緩やかな平坦地が存在する。平坦地の中央付近には、東から S X 39 にかけて浅い谷状の窪みが存在する。S X 39 はこの窪みを対象に掘削された状況にもあり、ここに良質な粘土が存在していたと考えられる。この浅い谷状部では奈良時代から平安時代前期にかけての土器破片が出土した。

S X 45 (第8図) S X 39 の北側に位置し、S X 39 から丘陵斜面を東に回り込んだ、谷地形の南側斜面の裾に存在する土坑である。S X 45 の南西斜面上部では、S X 39 にみられた階段状の粘土掘理面が存在し、ここでも粘土の採掘が行われている状況が確認できた。S X 45 は粘土採掘範囲の北東端に位置し、S X 45 から北東側斜面には粘土の堆積がみられない。

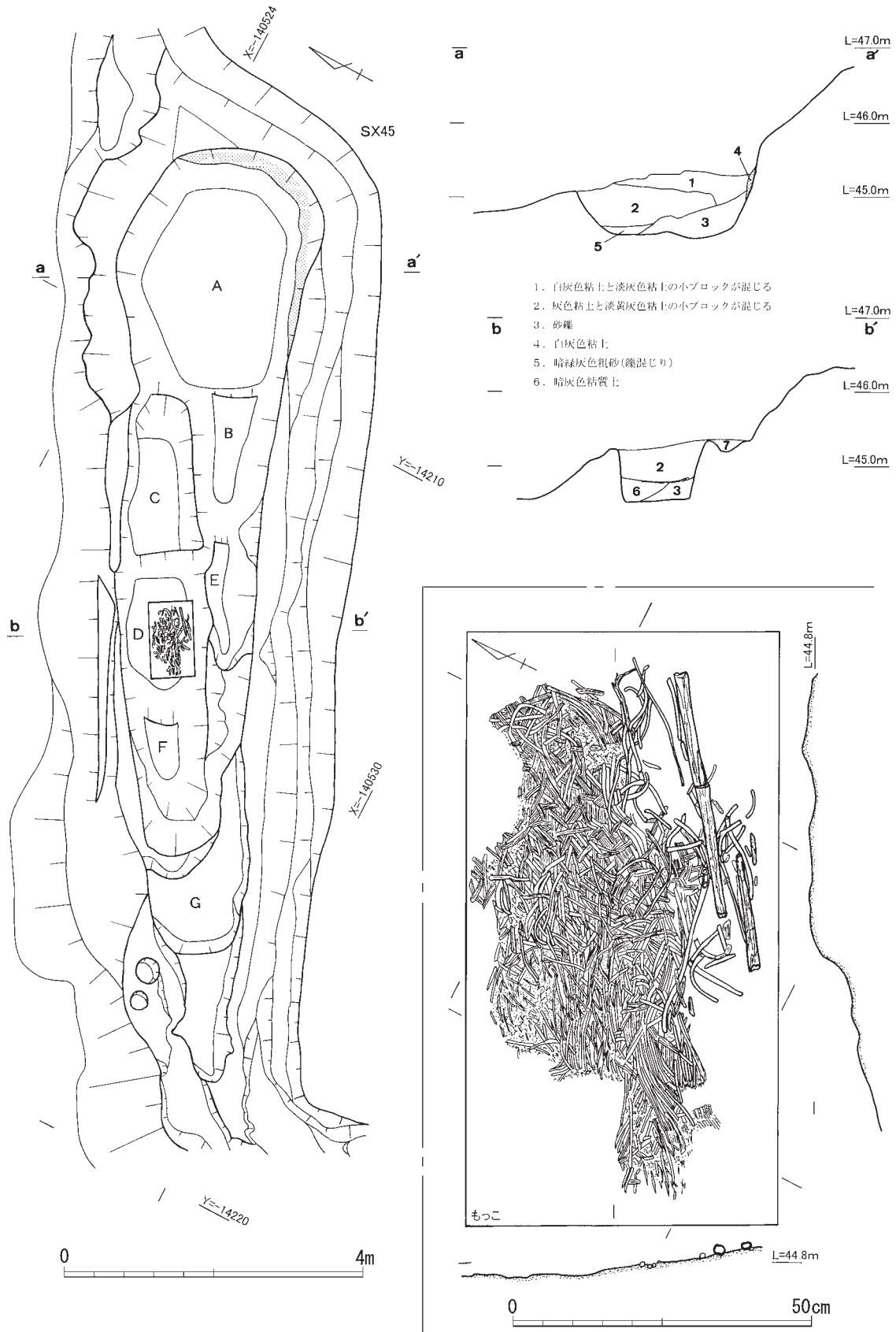
S X 45 は、平面形が細長い隅丸長方形の土坑であり、全長は約 10.8 m、幅 1 ~ 2.4 m の規模を測る。S X 45 は底面が一律に平坦ではなく、深さの異なる底面が 7 か所 (A ~ G) 存在する。良質な粘土を求めて掘削を進めた結果、底面の深さにばらつきが生じたとみられる。底面の高低差は 0.3 ~ 0.5 m を測る。

S X 45 の東端部に位置する A 区は、底面が 1.9 m × 2.7 m、深さは最大 (南西側) で 1.2 m の規模を測る。谷側の北東では、地山上端から底まで 0.7 m を測る。側面部は地山の粗砂が広がるが、側面のはほぼ中間付近において、東面から南面にかけて粒子の細かい粘土が壁面に残っていた。この粗砂土の壁面に張り付く粘土の存在から、特に良質の粘土が当地の地山の窪みに堆積していたものと考えられる。S X 45 は、当初、粘土貯蔵穴の可能性も考えられるが、土坑底の凹凸や他の遺構との位置関係等から、貯蔵穴とはし難いとみられた。

S X 45 の内部に土器等の遺物はみられなかったが、土坑中央部の D 区からもっこ (第8図) とみられる植物質の編み物が出土した。D 区は 2.3 m × 1.2 m、深さ 0.7 m の方形区画であり、編み物は埋土中層付近から出土した。編み物は竹と蔓^{つる}状の植物で編まれており、土坑の南東側に 2 本の竹が平行して置かれ、北西側に網部分が重なる状態で置かれていた。この植物性編み物は、出土遺構や 2 本の竹と網の状況から、粘土の運搬の際に使用したもっこの可能性が高い。検出範囲でのもっこは、全長 0.9 m、幅 0.5 m を測る。2 本の竹は直径約 2 cm を測る。直径 0.5 cm 程の蔓状植物が竹の周囲に絡む状況にあり、このうちの幾つかの蔓は編み部にも骨材のように延びている。編み部では蔓と黒く変色した薄い植物 (幅約 0.5 cm) による編み目が一部に確認できた。もっこは脆弱であり、詳細な観察においても、これまでのところ編み目を復元することができない。

④土坑

土坑 S K 16 (第9図) 建物跡 S B 35 の東端付近から検出した土坑である。遺物廃棄土坑とみられる遺構であり、比較的浅い土坑内から大量の土器や瓦が出土した。土坑の平面形は不定形で、北東から南西方向の長軸は約 5.8 m、最大幅は約 4 m、深さは最大で 0.2 m を測る。土坑の



第8図 粘土採掘坑S X 45 実測図およびもっこ出土状況



第9図 土坑S K 16実測図

底面は緩やかに北東から南西方向に下っている。土坑の南部は、S K 16 がS B 35 の柱穴P 9 と溝S D 23 に切り勝つ。土坑内の遺物は南部に集中する傾向にあり、遺物の大部分は須恵器と瓦が占めている。須恵器には歪むものや焼成の悪いものが含まれることから、S K 16 は土器や瓦の廃棄土坑と判断される。

土坑S K 19 (第11図) 建物跡S B 35 の中央部付近から検出した長方形の土坑である。全長約2.5 m、幅約0.7～1.1 m、深さは0.25 mを測る。土坑の小口は南西側が北東側に比べて短い。土坑底はほぼ平坦である。土坑の主軸は北から東に約42°振っている。S K 19内の埋土は暗茶灰色粘質土であり、土器(第17図97～101)と瓦の破片が含まれていた。S K 16と同様に、S K 19も遺物廃棄土坑と判断される。

S X 26 建物跡S B 35の北西部、柱穴P 3とS D 23を覆う状況で検出した遺構で、土器と瓦が集中する範囲をS K 26とした。遺物の集中する範囲は、長さ約2.2 m、幅約1 mの規模である。

遺構下部の柱穴P 3とS D 23は、S K 26の遺物取り上げ後の精査で検出している。S K 26は浅い土坑が存在するとみているが、周辺部の掘削では明確な土坑の痕跡は確認できなかった。遺物廃棄土坑とみているが、地上面での廃棄遺物集積地の可能性も考えられる。

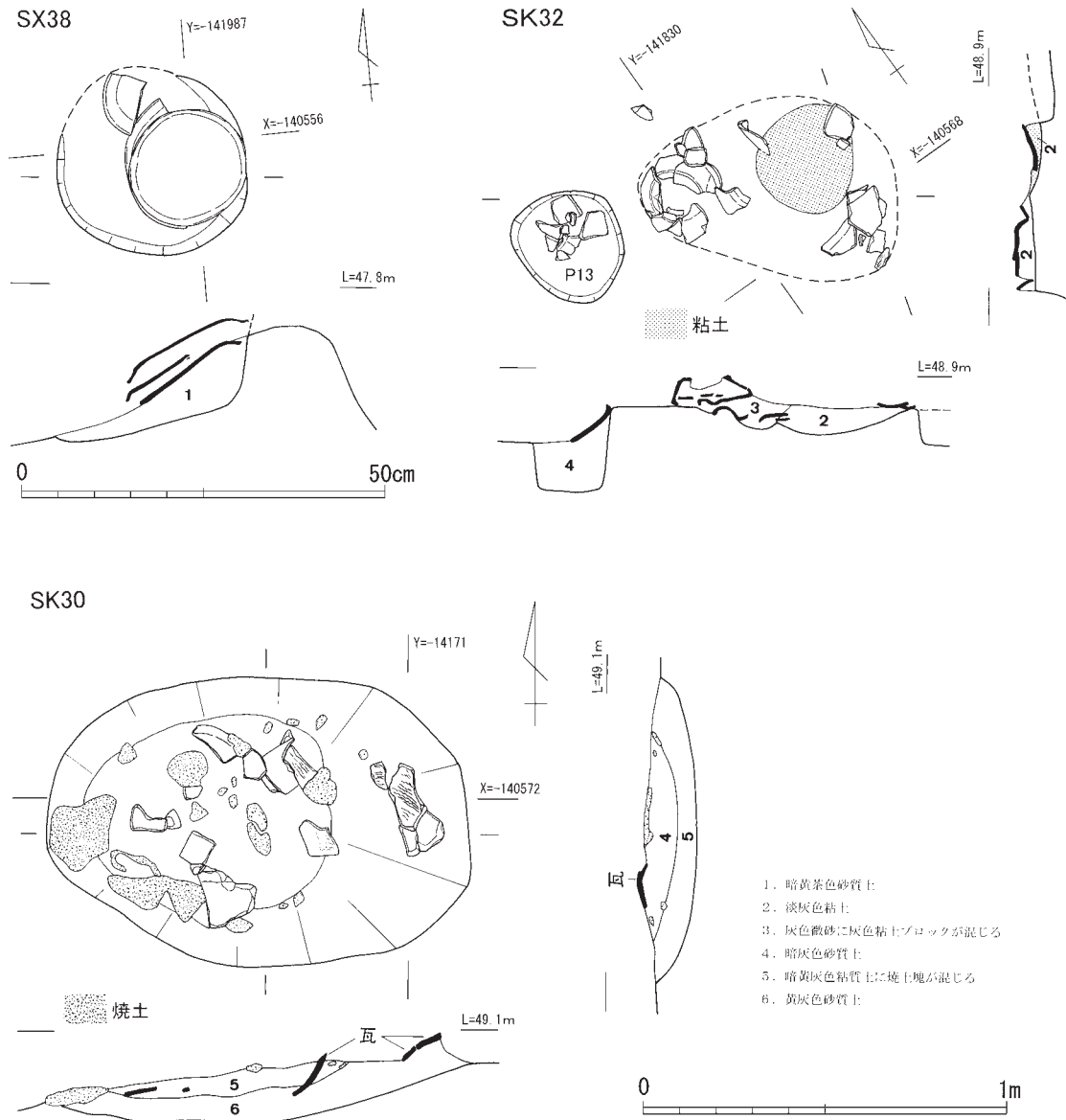
土坑S K 30 (第10図) 建物跡S B 35の内部、S K 19の東側に約2.3 m離れて検出した楕円形土坑である。土坑は、長さ1.15 m、幅0.8 m、深さ0.15 mを測る。土坑内埋土中には、須恵器の皿(第17図106)のほか、幾つかの赤褐色を呈する焼土塊が存在した。S B 35廃絶後の遺構とみられる。S X 26と同様、地上面での廃棄遺物集積地とも考えられる。

S X 32 (第10図) 建物跡S B 35の南西部、建物柱穴P 13の西側で検出した遺構であり、白灰色の粘土塊と須恵器と土師器が集中して存在した。粘土塊は浅い窪みに填まった状態で、直径約0.4 m、深さ0.07 mを測った。粘土塊の北西側に土器が集中して存在した。土器は土師器甕と須恵器の平瓶・甕である。平瓶は口縁と把手を欠くが、多くの破片が重なり合っていた。

土坑S K 41 (第11図) S B 35の南西隅柱穴P 12を切って存在する長方形掘形の土坑である。全長約3 m、幅約1.6 m、深さは最大で0.1 mの規模を測る。土坑の南西部は後世の削平で土坑壁を失っている。また、S K 41の北西角では、土坑42と重複する。S K 41の掘削時点ではS K 42の存在が確認できず、S K 41の底面でS K 42を検出したことから、S K 41はS K 42に切り勝っている。土坑内埋土中から、平瓶や直口壺・鉢などの須恵器(第17図110～113)が出土した。

土坑S K 42 (第11図) 土坑S K 41に切られた土坑である。土坑は方形に近い楕円形を呈し、長さ約1 m、幅約0.7 m、深さ約0.1 mを測る。土坑内から須恵器片が出土した。

土坑S X 38 (第10図) S B 35の西約10 m付近で検出した遺構である。S X 38は須恵器の蓋と皿が上下に重なって出土したが、当初は遺物の周囲に遺構掘形が確認できなかった。S X 38は完形品の蓋が最上部に存在し、その蓋を取り除いた下部と周辺から蓋と皿の破片が出土し、さらにその下には先の皿と接合する破片が存在した。破片を含む4点の土器が上下に重なる状況

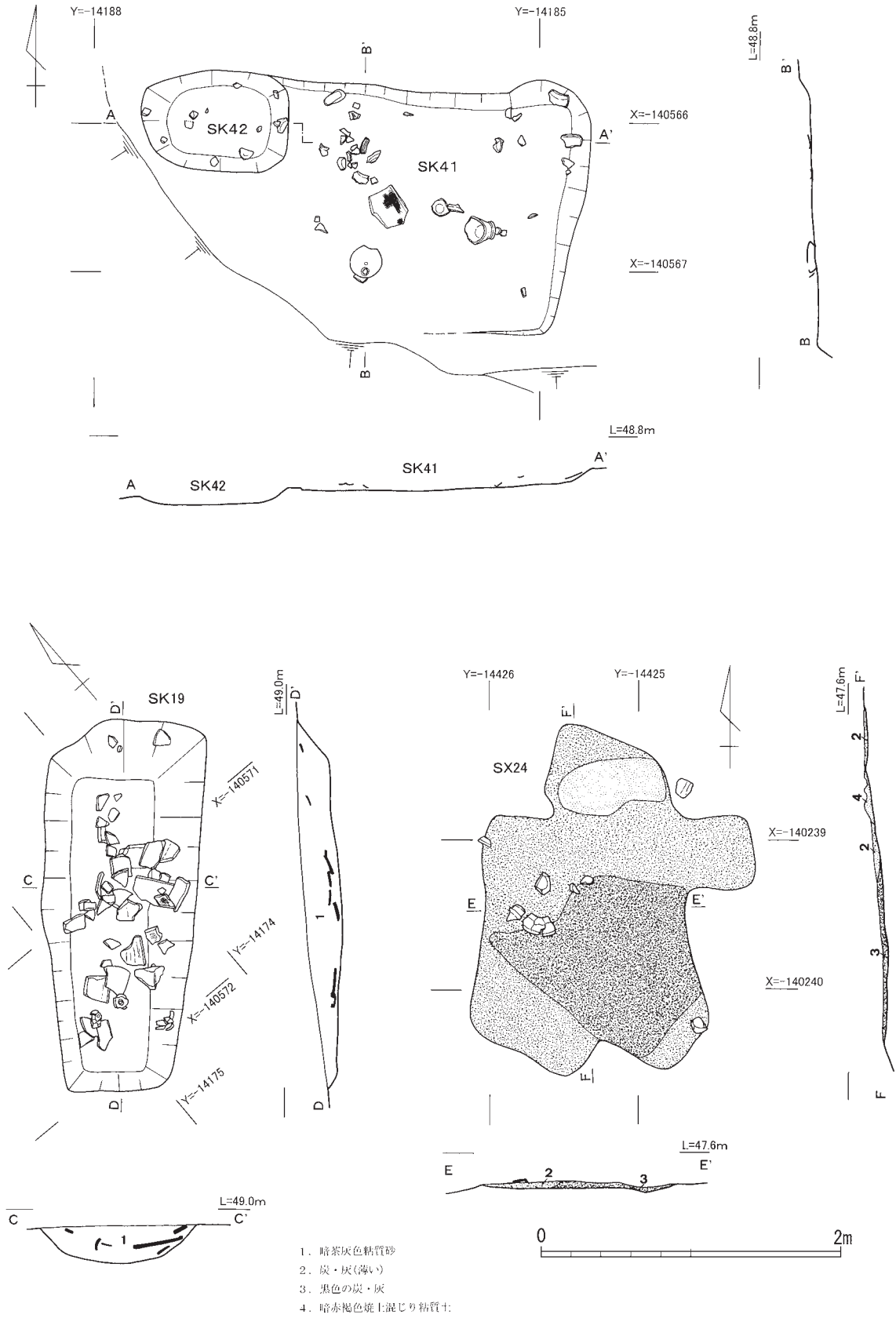


第10図 土坑S K 30・32、S X 38実測図

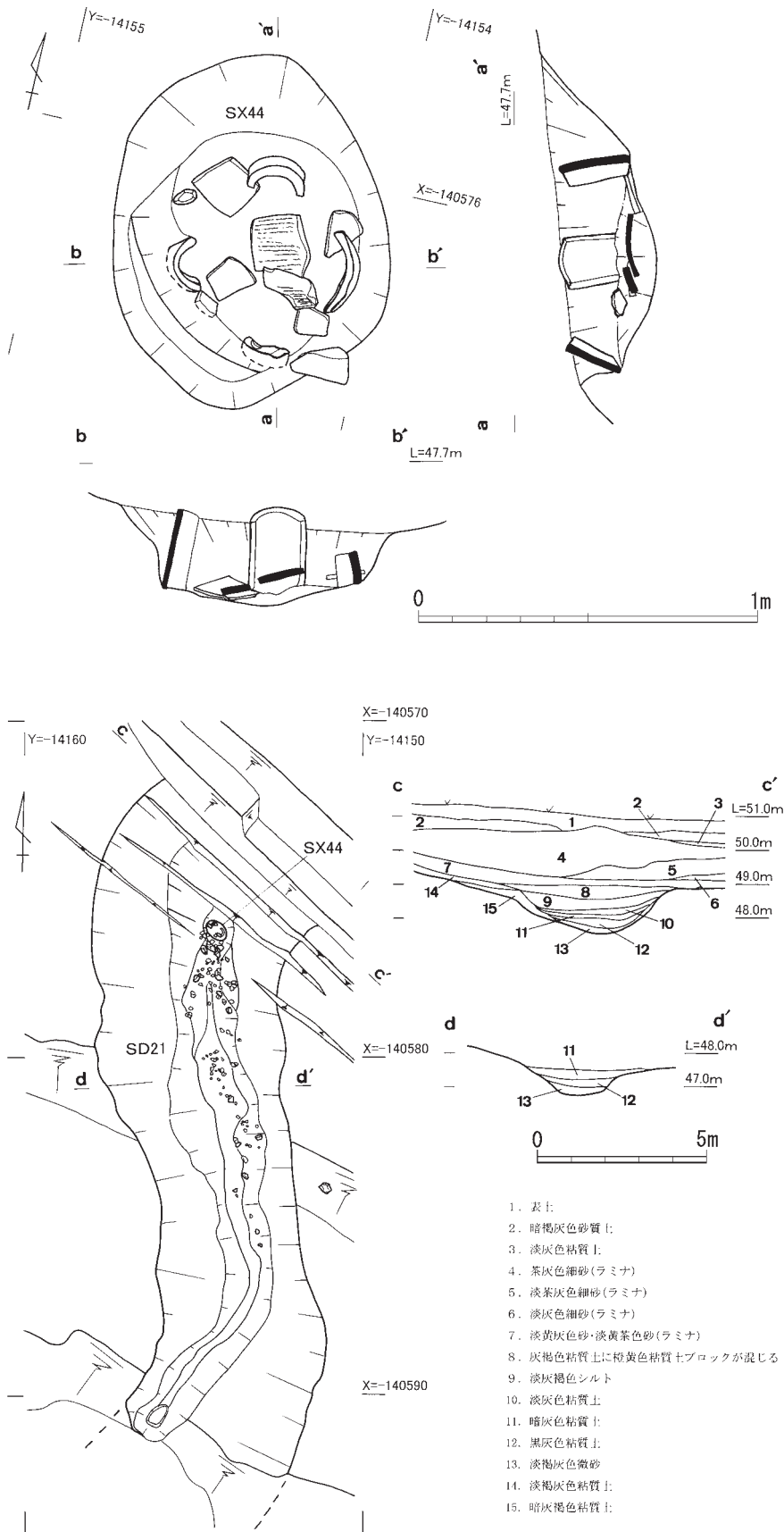
から、精査を繰り返した結果、最下部の皿破片の周囲の土が周辺部の土よりやや粘性が強いことが判明し、掘形の存在が確認できた。掘形の全様は確認できなかったが、直径約0.3m程の柱穴状の掘形であったとみられる。S X 38周辺部での遺構や遺物の出土が稀であるなかで、完形品や破片が集中する特異な状況から、祭祀に関連した遺構である可能性が高い。

⑤溝状遺構

溝S D 21 (第12図) S B 35の東側で検出した幅3～5m、深さ約1mの素掘り溝である。溝は約16m分を検出したが、その短い範囲内にもかかわらず溝底は大きく蛇行している。溝は丘陵南側尾根の南斜面中腹に存在するとみられ、北から南流する溝の下流側はV字状の断面形を呈している。S D 21は、水路の東側に遺構・遺物がほぼ存在しないことから、遺跡の東を区画する水路と考えられる。水路内には瓦以外に、多量の須恵器が含まれていた。特に須恵器は、重



第11図 土坑SK41、42、19、SX24実測図



第12図 SD21、SX41 実測図

ね焼きで数固体が融着したもの、焼け歪んだもの、焼成の悪いものなどが多数存在している。

SX44 SD21の溝北部(上流側)の溝底部分には、集水桝(SX44)が1か所存在した。SX44は、直径約0.5m、深さ約0.25mの規模を測り、丸瓦と平瓦で周囲を囲って枡形を作っている。

⑥その他の遺構

近世墓SX24(第11図)SB35の存在する平坦地の南側の1段下がった平坦地で検出した。この下段の平坦地では、SX24以外の遺構は存在していない。遺構は、地山上の北側に暗赤褐色の焼土が存在し、焼土の南側に炭と灰が薄いながらも広範囲に広がっていた。焼土は、長さ約0.7m、幅約0.35mの規模を測る。炭・灰の範囲は不定形ながらも方形に近い状態で、東西

約1.8 m、南北最大約2.35 mを測る。炭・灰層の中でも特に炭を多く含む範囲は、南側に集中する傾向にある。特に掘形は存在しない。出土遺物として、灰層を除去した地山面から寛永通宝1枚の出土をみたが、脆弱でもあり完全状態での取り上げが不可能であった。骨や他の遺物の出土をみないが、遺構の状況から、近世の火葬墓と判断される。(竹原一彦)

古墓(S X 18)(第13図) 立地は、丘陵南向き斜面にあり、墓の主軸は等高線に直交している。墓の位置する標高はおよそ50 mである。調査地内で1基のみ検出した。墓の主軸は南北方向であり、国土座標軸に対してN11° Eである。灰釉陶器2点が北側から出土しており、遺物の出土状況から斜面上部にあたる北側が頭部と考えられる。

構造について述べる。鉄釘の出土状況および堆積土の土層観察により、木槨と木棺の二重構造となる木炭木槨墓と思われる。遺体の埋葬主体部の構造は、墓壙の底部全体に約5 cmの厚さで木炭を敷きつめ、その木炭床上に北側に子どもの拳大の円礫を木棺棺底に5石置き、その上に木棺を納めている。この礫は棺台と考えられる。木槨は鉄釘の出土状況から底板のない蓋状の構造と考えられる。木棺は鉄釘の出土状況から木槨の中央から西寄りに納められていた。木炭床上面で出土した鉄釘の位置から推定できる木棺の規模は、長さ1.9 m、幅0.45～0.5 mを測る。深さは検出面から0.4 mを測る。墓壙掘形規模は3.0×1.4 m、木炭床規模は2.35×0.75 m、木槨規模は2.3×0.65 mである。木槨に使用された鉄釘は長さが9 cm以上、厚さ0.5 cmでしっかりしている。鉄釘に残存する木質から推定する木槨木材の厚さは3.5 cm程度である。木棺は底板が3 cm、側板が3 cmと考えられる。

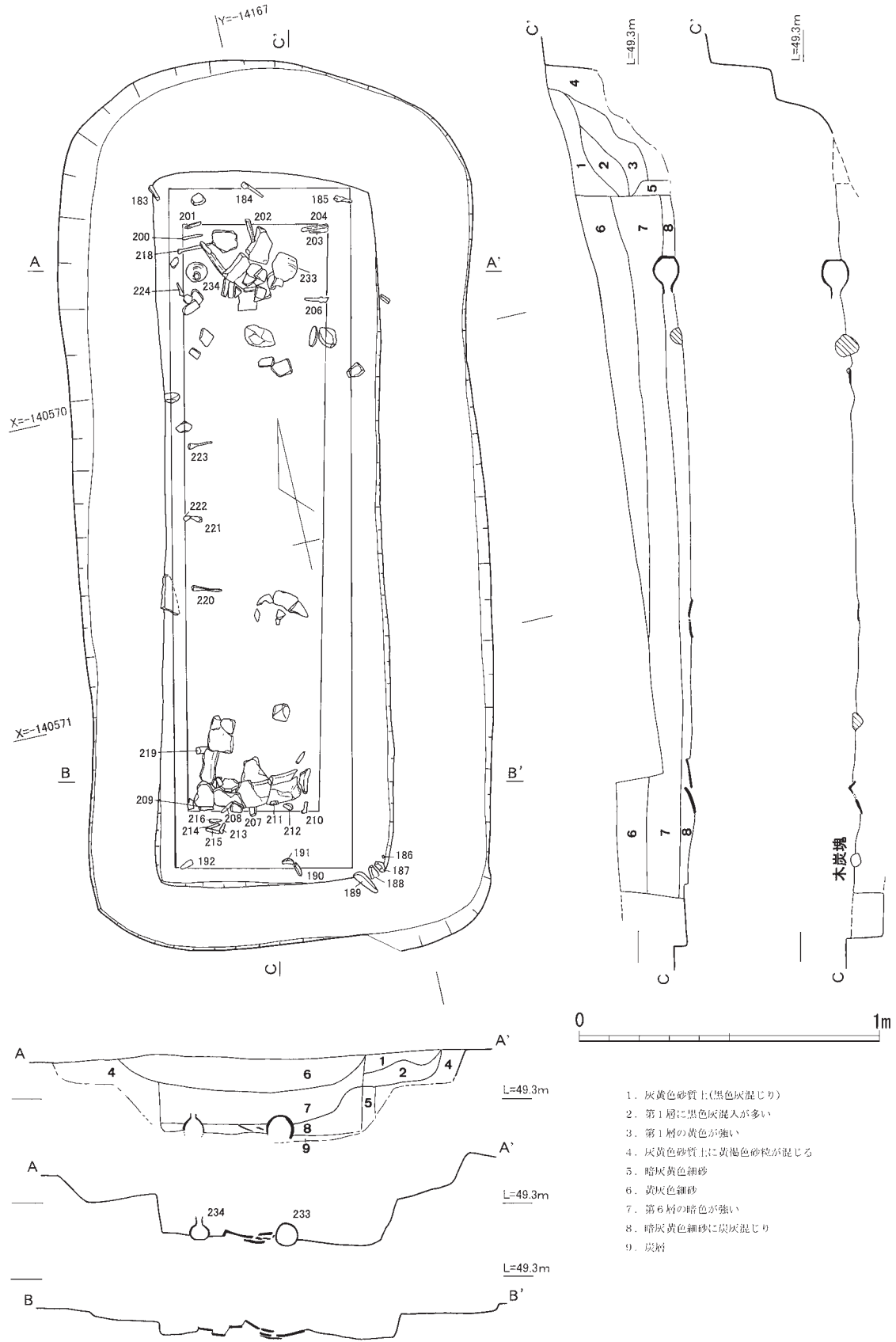
遺物の出土状況は次のとおりである。木棺内の遺物は北側の頭部付近および足元付近で出土した土師器甕がある。これらの甕は棺内に人為的に破碎して入れられたものと考えられる。また腰の付近で土師器(皿か)が1点出土した。供献土器には灰釉陶器の小瓶(瓶子)と手付瓶(水注)がある。いずれも頭部付近で出土した。小瓶は底部を棺底に向け土師器甕の西側、正位置で出土し、手付瓶は口縁部を足側に向け土師器の東側で横倒しの状態で出土した。小瓶は口縁部、手付瓶は口縁部、注口部と把手部分が破碎されていた。^(注5)墓内から灰釉陶器の破碎された部分の破片は見つかっていない。鉄釘は墓(S X 18)の検出時に8点、木炭床上面で41点(破片点数)出土した。鉄釘の出土位置は第13図の通りである。木槨は小口部分の中央部に1本、両端上下に各1本の計5本が打ち込まれていたと推定される。また木棺については小口部分に各4本、西棺側については北小口から南側に0.2 mのところ、東西各1本、側板中央に約0.25 m間隔で計3本が遺存していた。人骨は出土していない。また堆積土を水洗洗浄したが微細遺物は見つからなかった。(柴 暁彦)

(2) 出土遺物

今回の第2次調査では、丘陵上や通路・溝・遺物廃棄土坑・古墓等から、瓦・土器・金属器・石器・植物質もっこなど、多種の遺物の出土をみた。

①土器

S B 35 出土土器(第17図114・115) 建物柱穴掘形埋土から土器の細片が出土した。図示で



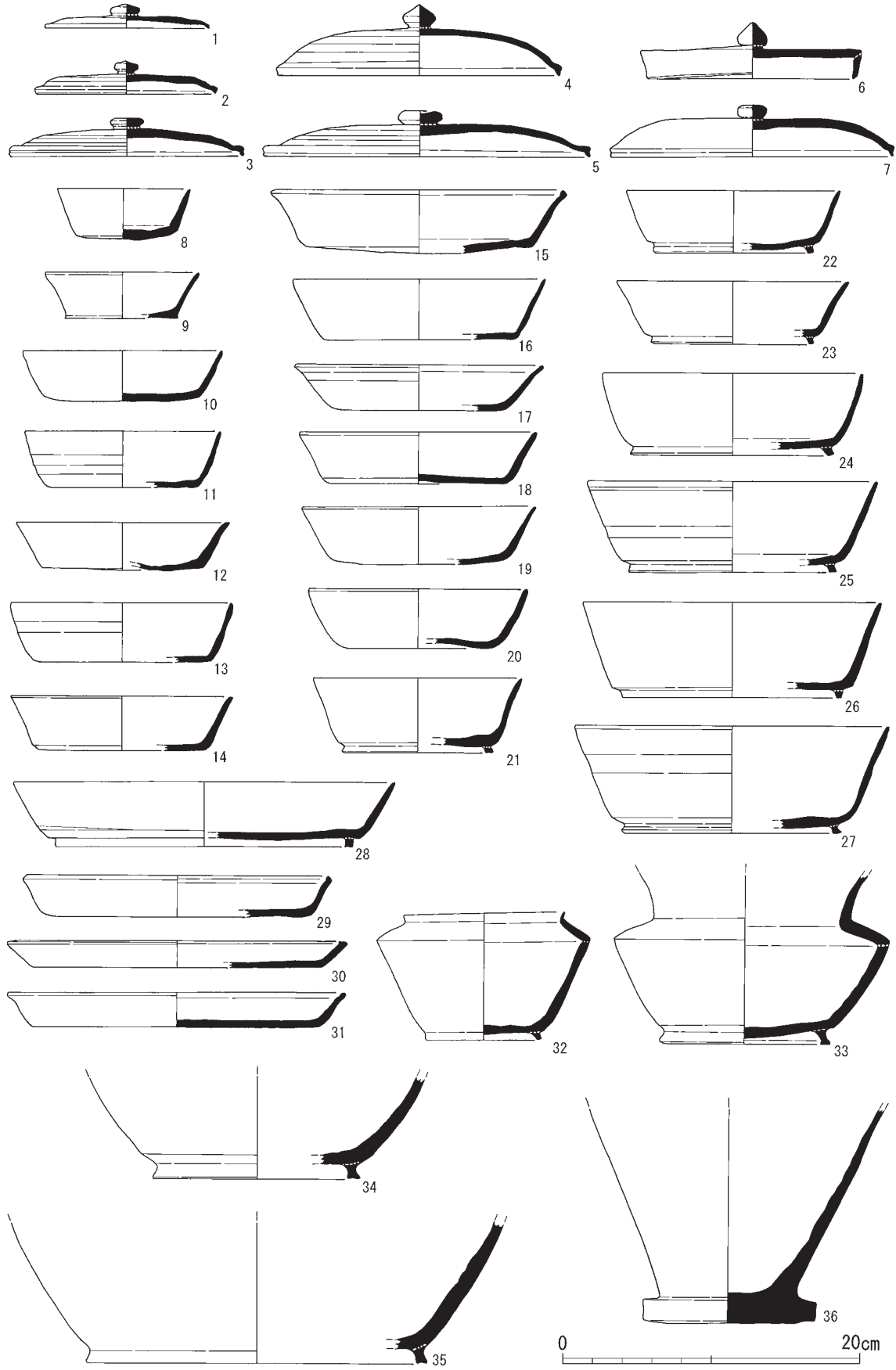
第13図 古墓S X 18実測図

きたものは須恵器杯B 2点で、114は口径13.9cm、器高5.1cmである。115は口径20.6cm、器高6.3cmを測る。

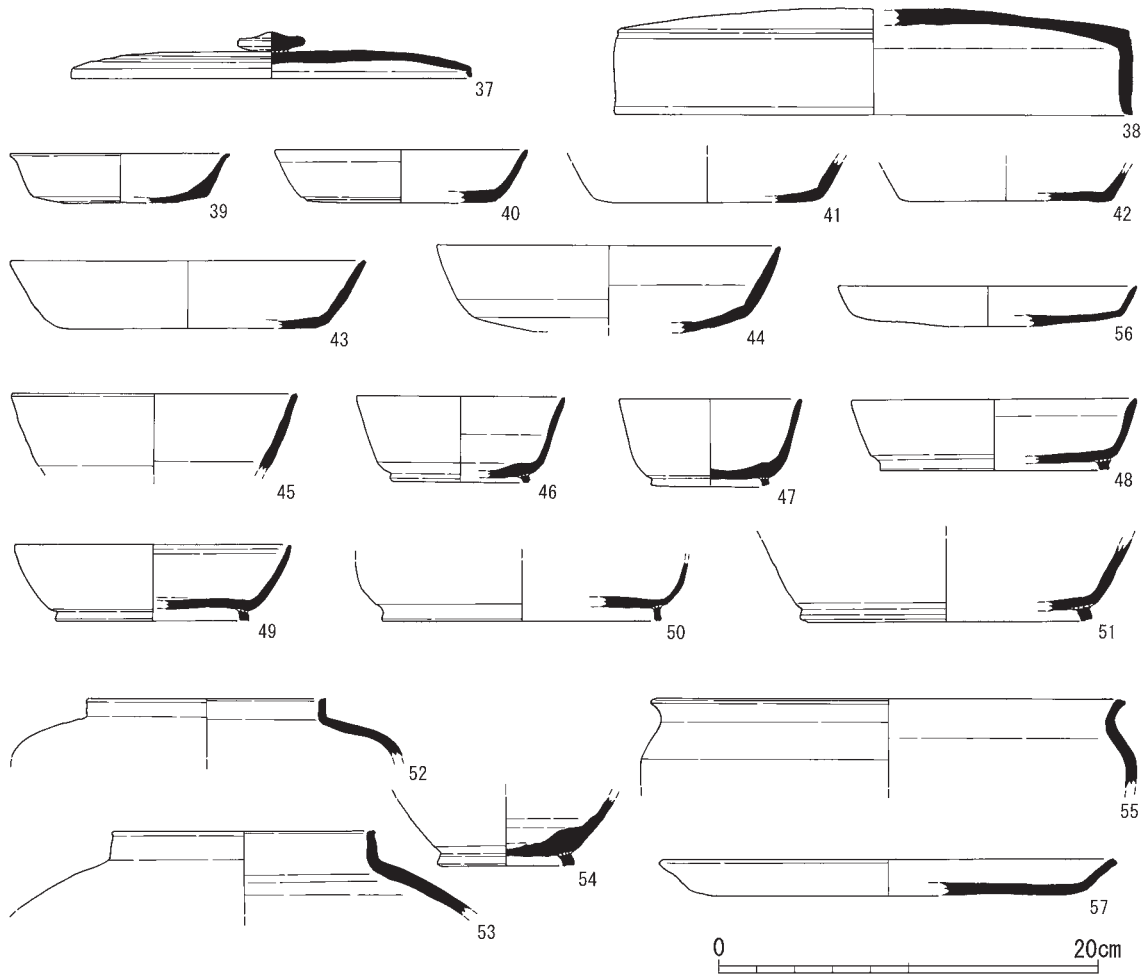
S D 23 出土土器（第14図1～36）掘立柱建物跡S B 35の排水溝S D 23の埋土から、須恵器と鉄製刀子が出土した。1～7は、宝珠つまみを有する杯Bの蓋である。1・2は、口径11～12cmで天井が低く、平坦な頂部はヘラ切り未調整である。4は、口径19.2cm、器高4.6cmで天井が高く、頂部は丁寧に回転ヘラケズりする。6は、壺Aの蓋であるが、焼成時の歪みが著しい。直径14.2cm、器高3.8cmである。8～20は杯Aである。底部外面はヘラ切り未調整である。軟質焼成や焼け歪むものが多い。21～27は杯Bである。貼り付け高台の内側底部外面は、ヘラ切り未調整である。28は皿Bである。29～31は皿Aである。32は壺Eである。口径11cm、器高8.6cm。33は壺Hである。36は鉢Fである。軟質焼成であり、白灰色の色調を呈する。

S F 27 出土土器（第15図37～57）37は杯B蓋である。口径21.2cmである。38は壺Aの蓋である。直径27.5cmを測る大型品である。頂部の中心部を失うが、つまみが伴うものとみられる。39～44は杯Aであり、底部外面はヘラ切り未調整である。39は口径11.6cm、器高2.5cmである。40は口径13.4cm、器高2.8cmである。43は口径18.7cm、器高3.5cmである。56は皿Aである。口径15.8cm、器高3.1cmである。45～51は杯Bである。小型の46・47は身も深く、46は口径10.9cm、器高4.4cm、47は口径9.6cm、器高4.5cmである。48は口径15.3cm、器高4.7cmである。49は口径14.6cm、器高4.1cmである。52・53は壺Aである。54は壺の底部である。55は甕の口縁である。口径は25.3cmである。57は皿Aである。口径24.3cm、器高1.9cmである。

S K 16 出土土器（第16図58～96）いずれも須恵器である。58～63は杯Bの蓋である。58・59は頂部が丸く、傘形を呈し、縁部は屈曲する。58は宝珠形のつまみが付く。58は直径12.5cm、器高3.1cmである。59は直径15.2cm、器高2.9cmである。60～63は扁平な頂部で縁部は屈曲する。ボタン形のつまみが付く。61は直径21.9cm、器高3cmである。62は直径17.4cm、器高1.3cmである。64は壺Aの蓋である。直径4.2cm、器高1.4cmである。65は皿Eであり燈明皿でもある。口縁端部を大きく外反させる。口径9.6cm、器高2.4cmである。66～78は杯Aである。平坦な底部と斜め上方に延びる口縁は丸くおさまる。小型品である66は口径12.9cm、器高3cmを測る。大型の84は口径24.1cm、器高6.1cmを測る。底部外面はヘラ切り未調整であり、焼成不良のものが多い。77は、内外両面に多数の篋描を施しているが、文字・記号・絵画など判読はできない。79～84は杯Bである。小型の79は口径13.4cm、器高4.3cmを測る。大型の72は口径19.7cm、器高6.3cmを測る。85は椀Aである。口径14.5cm、器高5.6cmを測る。86は椀Bである。口径19.3cm、器高6.4cmを測る。87～90は皿Aである。平坦な底部に短い口縁を備える。底部外面はヘラ切り未調整の例が多い。87は口径17.4cm、器高2.2cmを測る。大型の89は口径22.6cm、器高1.8cmを測る。89・90は歪みが著しい。91～95は皿Bである。平坦な底部から外上方に延びる口縁は丸くおさまる。小型の91は口径17cm、器高3.2cmを測る。大型の95は口径28.1cm、器高5.4cmを測る。96は円面硯の脚部である。



第14図 S D 23 出土遺物実測図



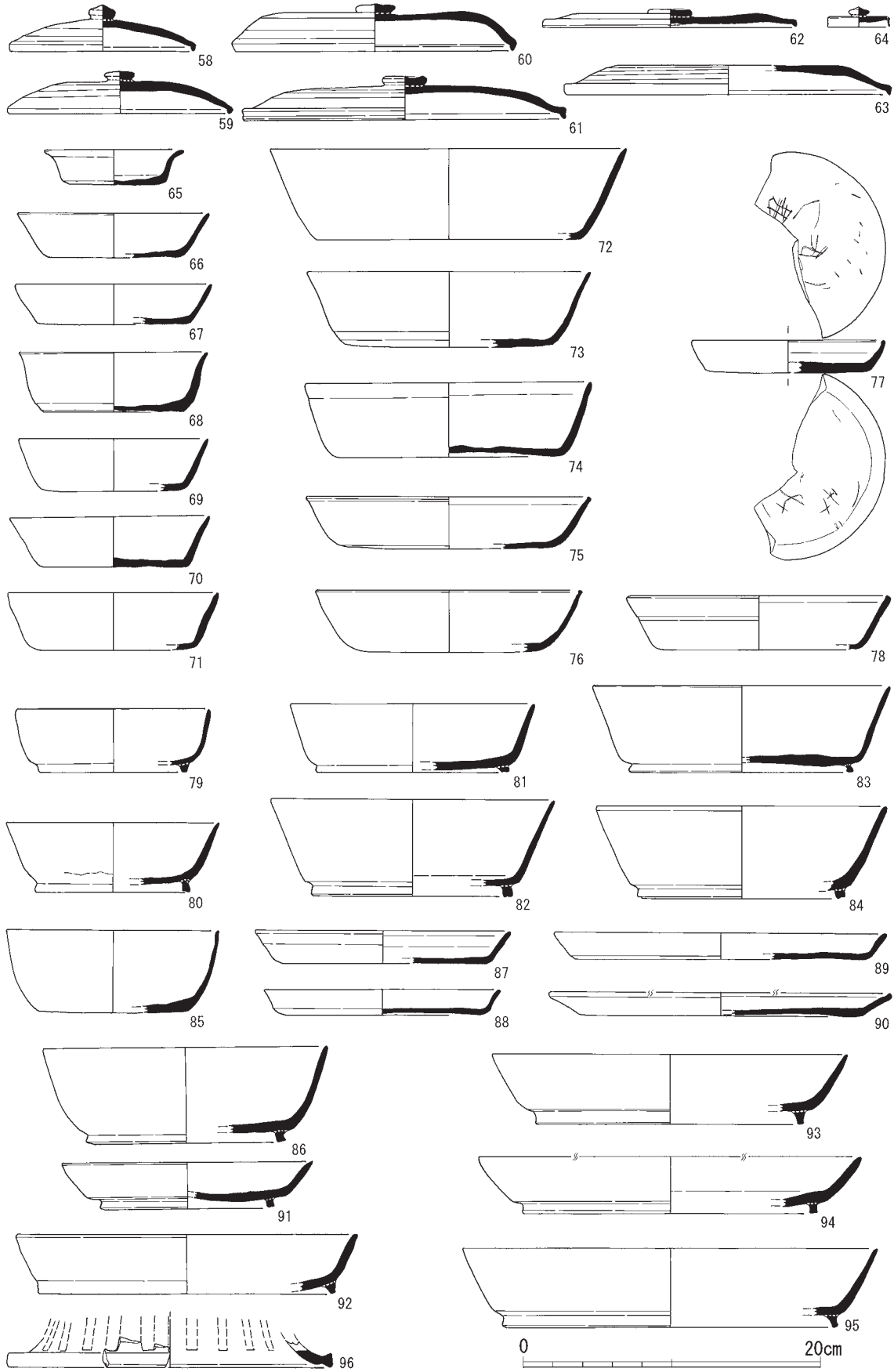
第 15 図 S F 27 出土遺物実測図

幅約 1 cm のスカシは長方形で、間隔はおよそ 2 cm を測る。

S K 19 出土土器（第 17 図 97～102） 須恵器（97～101）と土師器（102）が出土している。97 は蓋である。頂部は平坦で、縁部は面をもっておさめる。直径 22.3cm、頂部高 1.2cm を測る。98 は杯 B である。口径 10.8cm、器高 3.6cm を測る。99 は托であり、軟質焼成である。100 は甕の底部である。101 は盤である。体部外面に半環状把手（2 か所）が付く。体部内面は斜めハケの後に上下に間隔をあけてヨコハケする。口径は 34.4cm である。102 は土師器の甕である。丸みの強い体部に 2 か所、三角形の粘土板を上にした把手をもつ。外反する口縁の端部は面をもっておわる。口径は 12.4cm を測る。

S K 32 出土土器（第 17 図 103～105） 土師器（103）と須恵器（104・105）が出土した。103 は甕である。体部は長胴で張りが弱く、外面はユビオサエの痕跡を残してタテハケする。口径は 22.4cm を測る。104 は平瓶である。頂部には把手をもつ。105 は甕である。口径は 38.6cm である。

土坑 S K 30 出土土器（第 17 図 106） 106 は、皿 A であり、土坑内から出土した唯一の遺物である。口径 24.3cm、器高 2.6cm である。焼成が悪く、色調は白灰色で軟質である。



第16図 土坑S K 16出土遺物実測図

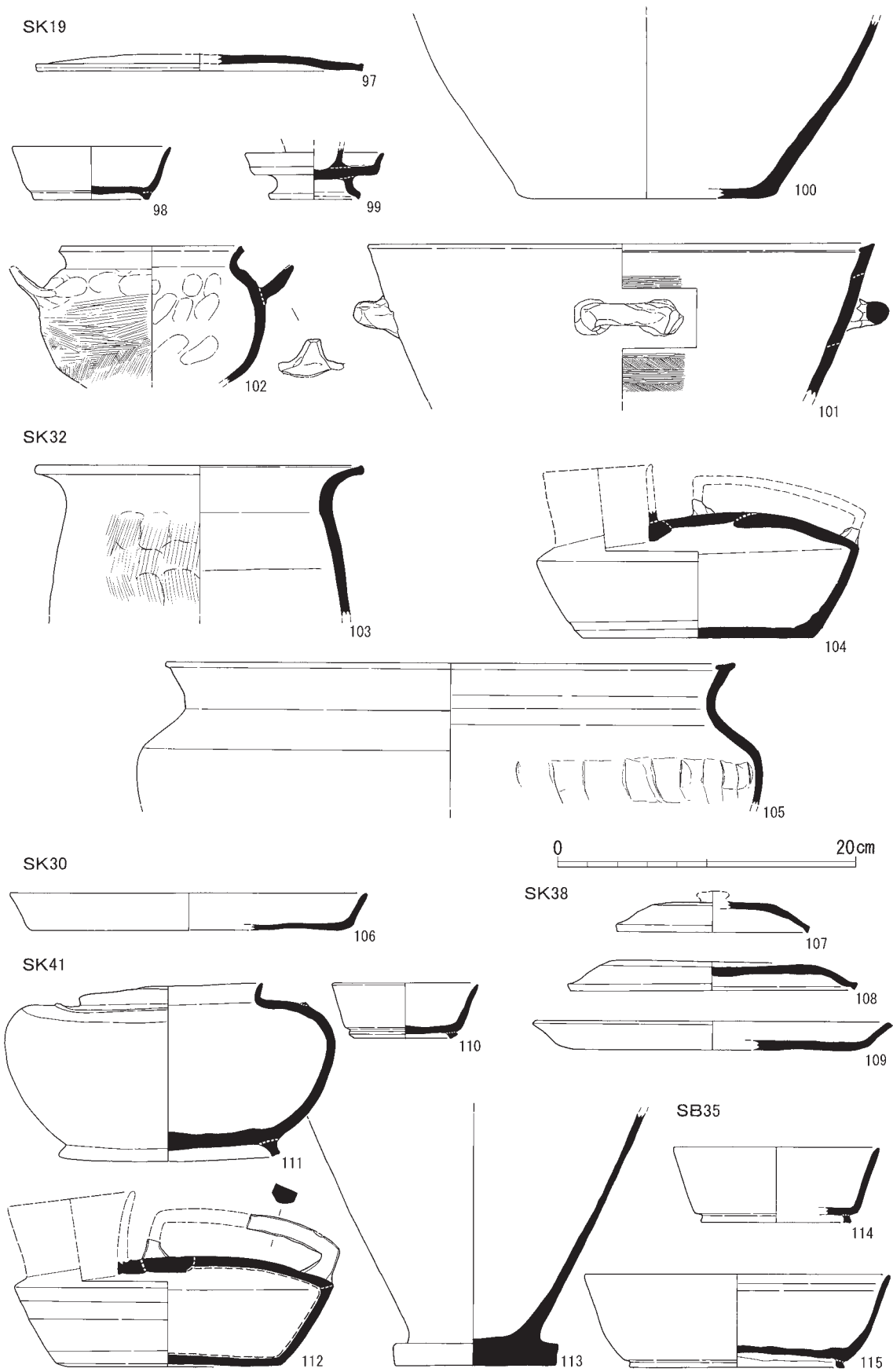
S X 38 出土土器（第17図107～109） 2点の蓋（107・108）と皿C（109）が重なって出土した。いずれも須恵器である。蓋は大小あり、107は直径12.9cm、頂部高2cmで、つまみがつくとみられる。破片出土であり、全体の約4割前後である。108はつまみを持たない完形品の蓋である。頂部は平坦で緩やかにカーブする縁部は短く屈曲する。頂部は回転ヘラ切りの後、粗い回転ミガキを施している。直径19.2cm、器高1.9cmである。109は、広く平らな底部と、口縁は外上方に短く立ち上がる。口縁端部は平坦に整える。大きな破片2片が接合した。接合した破片は全体の約7割を占める。108・109は大きく歪む。

S K 41 出土土器（第17図110～113） 全て須恵器である。110は杯Bである。口径9.4cm、器高3.8cmである。111は壺Aである。口縁から体部上半にかけて大きく焼け歪んでいる。口径12.4cm前後、器高は12cm以上である。肩部には窯着した蓋の縁部が残る。また、体部には胎土の火ぶくれもみられる。

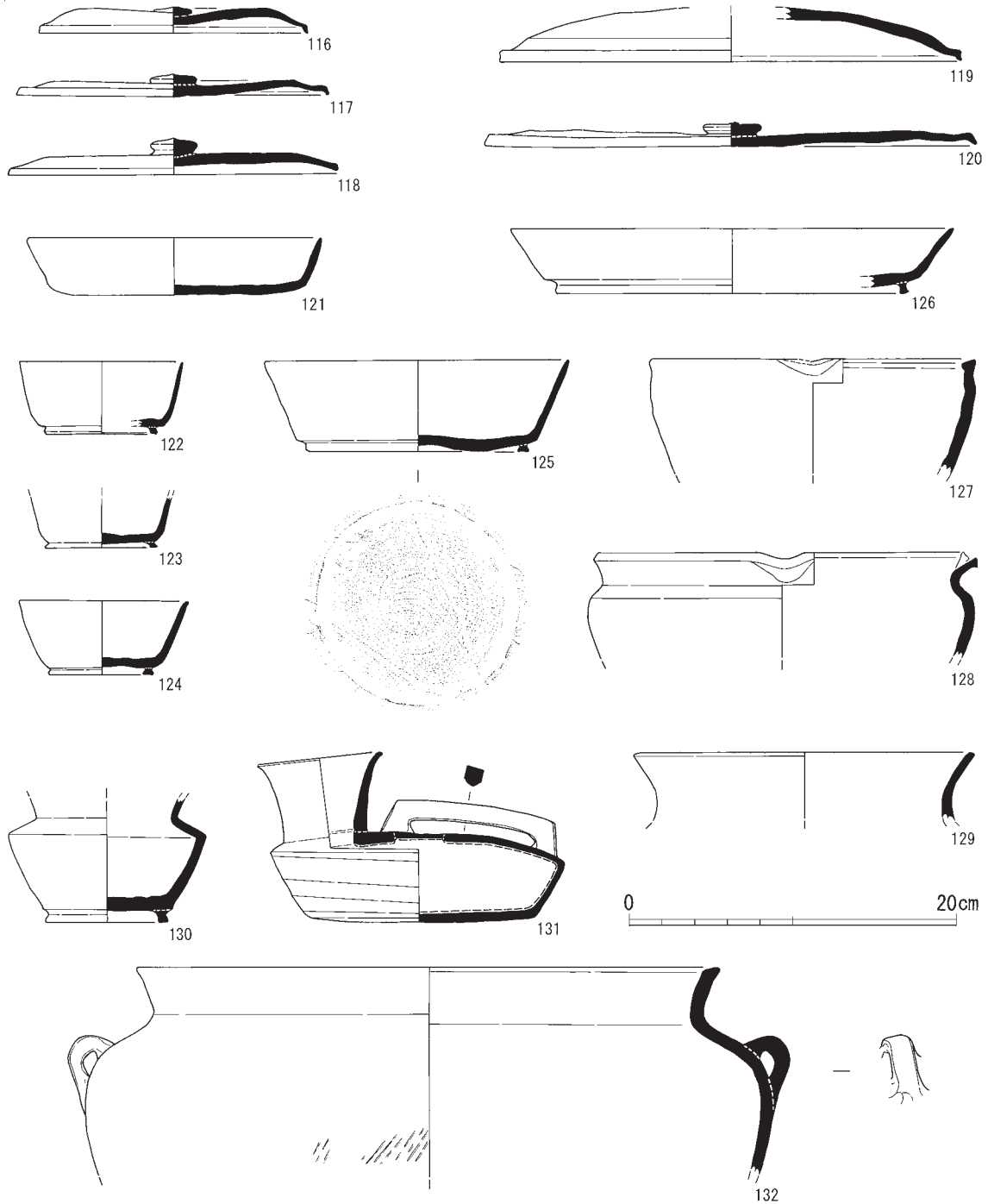
S K 26 出土土器（第18図116～132） 129の甕以外は全て須恵器である。116～120は蓋である。蓋は、口径が16.1～20.1cm（116～118）と28～30.1cm（119・120）の大小がみられる。121は杯Aである。口径18.1cm、器高は3.2cmである。122～125は杯Bである。122～124は小型で身が深い。122は口径10cm、器高4.2cmである。124は口径10.1cm、器高4.5cmである。125は杯Bであり、底部外面を糸切りした後、中央部を残し回転によるナデ調整を行う。出土した須恵器のなかで、底部の糸切りは本例のみである。口径18.8cm、器高5.5cmである。126は皿Bである。口縁部は外上方に立ち上がる。口径27.3cm、器高3.9cmである。127はいわゆる鉄鉢形の鉢Aである。口縁部の内湾は緩いが片口をもつ。口径15.1cmである。128は鉢Dである。口縁は短く外反し、体部の上部で肩が張る。片口をもつ。口径は22.6cmである。129は土師器甕の口縁である。130は壺Qである。131は平瓶である。132は甕Cで、体部の上部で肩が張り、相対する肩部2か所に把手を付す。

S D 21 出土土器（第19図133～168、第20図169～182） S D 21は遺跡の東を画する溝であり、多量の須恵器の出土をみた。須恵器には焼成不良・焼け歪み・窯融着等の不良品が多数存在する。唯一、第20図179は土師器である。

133～138は蓋である。133・134は、口径約20cm、器高3.1～3.8cmである。135～137は口径12.3～12.6cm、器高2.1～2.3cmである。頂部は平らでボタン状のつまみを付す。138は皿B蓋である。口径28.1cm、器高3cmである。139～141は壺A・壺C～壺Eに伴う蓋である。139は口径10.4cm、器高2.2cmである。141は口径15.1cm、器高3.5cmである。143～150は杯Aである。いずれも底部外面は回転ヘラ切りで未調整である。143は口径9.9cm、器高2.3cmである。149は口径17.5cm、器高5.5cmである。150は、4点の杯Aが焼成時の重ね焼きのまま融着したものである。最下部の杯Aは口径14.2cm、器高4.3cmである。151～163は杯Bである。153は器表面の火ぶくれが著しい。164は皿Cである。口径24.3cm、器高1.7cmである。165は皿Bである。口径28.1cm、器高4.2cmである。166は壺Eである。狭い肩部に外傾する短い口縁部をもつ。口径9.3cm、器高5.9cmである。167は壺Qである。口径11.9cm、器高7.9cmであ



第17図 土坑19、30、32、41、SB35、SX38出土遺物実測図

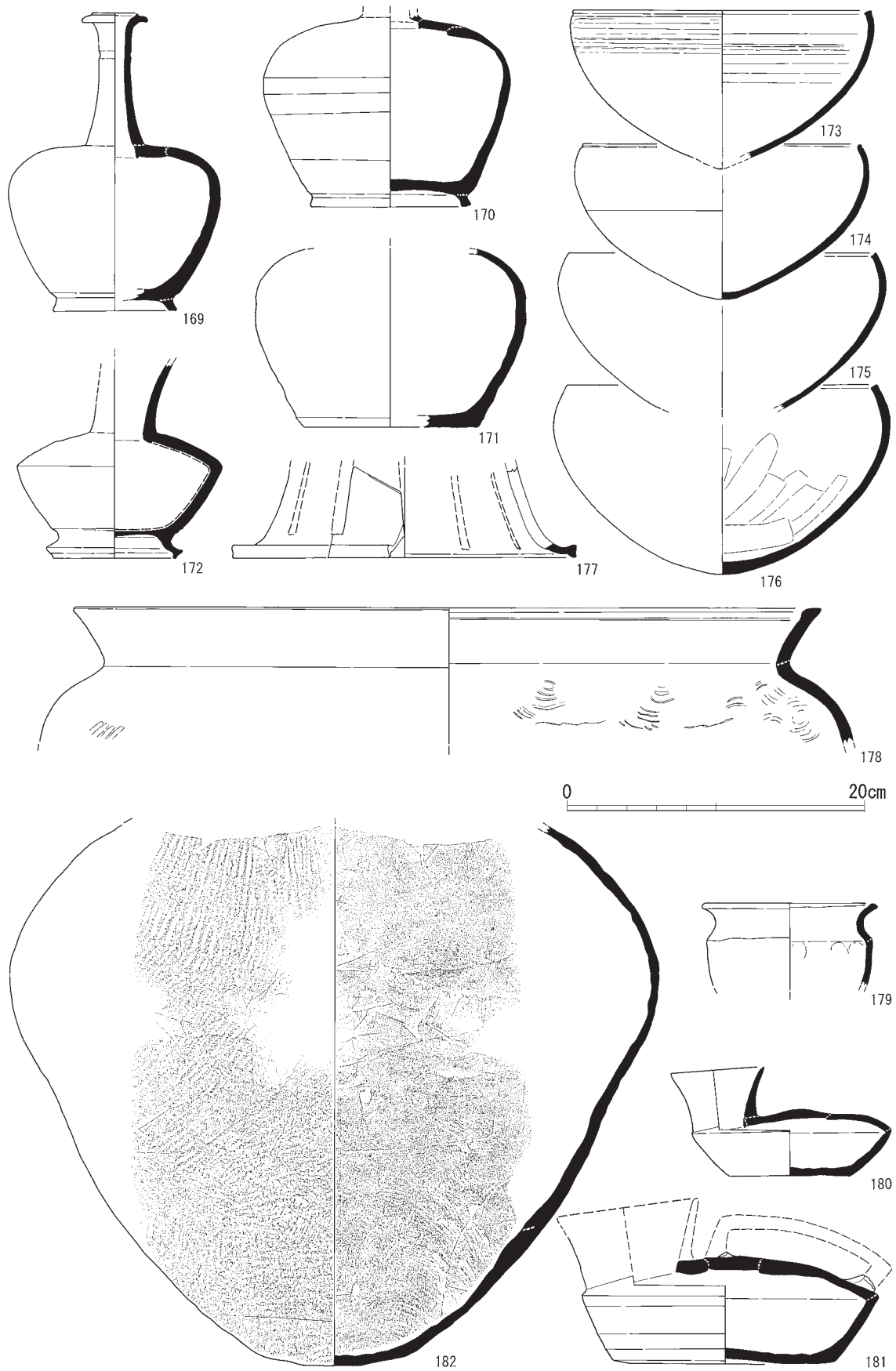


第18図 土坑S K 26 出土遺物実測図

る。168は壺Aである。口径15.1cm、器高24.2cmである。169は水瓶である。金属器を模したもので、体部の上部で肩が張り、細長い頸部をもつ。頸部に沈線をもつ。大きく外反する口縁の内側上端部に、小さな立ち上がりをもつ。172は壺Kである。173～176は鉢Aである。尖底で口縁部は内湾しながら立ち上がる、いわゆる鉄鉢形である。口縁端部は面をもつ。体部上半の外表面は回転ヘラミガキを施す。口径は20.4～21.1cm、器高10.5～12.7cmである。177は円面硯の脚である。脚端部の直径は23.3cmである。178は甕である。口径は50.8cmである。179は土師



第19図 S D 21 出土遺物実測図1



第20図 S D 21 出土遺物実測図2

器壺Bである。口径11.4cmである。180・181は平瓶である。把手の無いもの(180)と、有るもの(181)がある。182は、甕Aの体部である。卵形の体部内面は同心円タタキをナデ消す。体部外面は平行タタキする (竹原一彦)

古墓S X 18 出土遺物 (第21・22図) 出土遺物には、土器と鉄製品がある。土器は、灰釉陶器小瓶と同把手付瓶及び土師器甕である。灰釉陶器小瓶(234)は残存高8.8cm、底径5cm、胴部最大径7.4cmを測る。釉調は黄褐色をなす。一見、緑釉陶器の釉のような滑らかさがある。口縁部は人為的に打ち欠かれ残存しない。底部には糸切り痕が残存する。胎土は灰白色で精良である。把手付瓶(233)は器高11.9cm、底径6cm、胴部最大径9cmを測る。釉調は緑灰色をなす。口縁部の一部、把手、注口部を欠損する。底部にはロクロから切り離れた際の糸切り痕が残存する。胎土は灰色である。^(注7)土師器甕は口縁端部を内側に折り曲げ断面三角形に肥厚している。細部の調整は磨滅のため不明である。

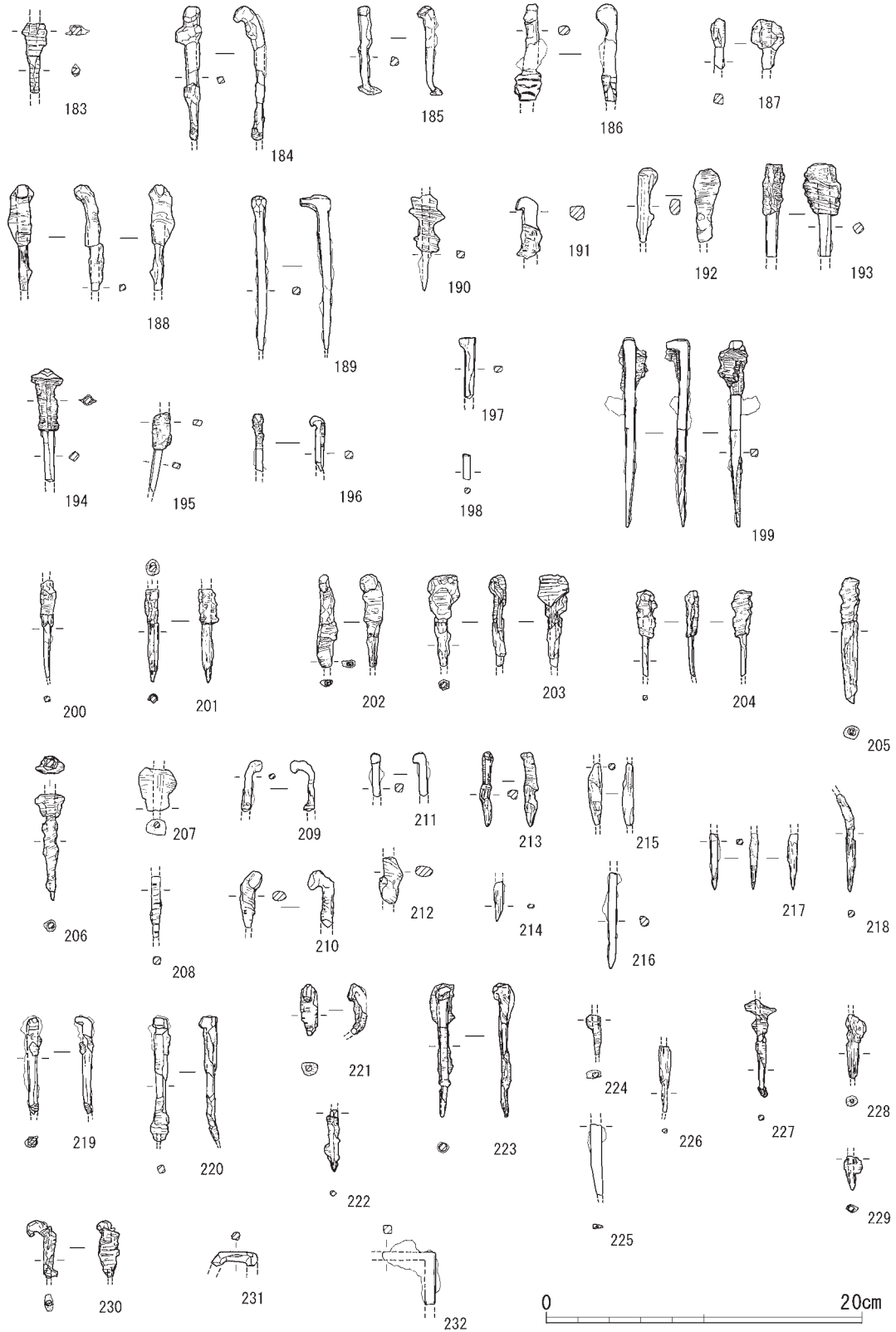
鉄製品として多数の釘が出土している。鉄釘(183～230)は、長さ、幅により2分類できる。長さ10cm程度、厚さ0.5cm程度のもの(183～193、199)(A類)と、長さ7cm前後、厚さ0.4cm程度のもの(200～230)(B類)がある。A類は木槨に使用した釘、B類は木棺に使用したものと考えられる。しかし厚さが薄い分先端部の残存度が低い。A類で最も残存度が良好な199は長さ12cm、B類では223が8.5cmである。釘はほとんどのものに板材痕跡(木質部)が残る。225は断面が三角形をなし、刀子の可能性がある。232は断面方形の「L」字金具である。 (柴 暁彦)

③瓦類・塼 (第23・24図)

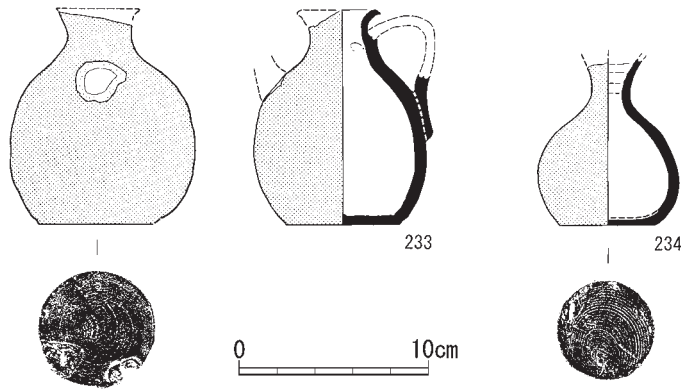
軒丸瓦(235・236) 今回の第2次調査では、平城6313 F型式のみ5点出土した。^(注8)235・236は、内区には中房に一つの大きな蓮子をもち、その外側に8単位の複弁蓮華文をあしらう。一見単弁に見間違いが複弁蓮華文であり、弁端は尖り気味である。外区は、内縁に15個の珠文を配し、外圏線の外に約8mm幅の無文帯をもつ。外縁は丸い傾斜縁で線鋸歯文を巡らす。236では、丸瓦凹面にみる接合粘土が瓦当裏面全体に広がり、瓦当部分の厚みを増している。ちなみに、瓦当の厚さは外縁から約4.6cmである。面径は235が15.4cm、236は15.1cmである。瓦当裏面は外区面より1.5cm程下がった位置に丸瓦を装着した窪みがあり、丸瓦の凹凸面両方に貼り付けられた接合粘土の一部が残る。出土した5点の同種の軒丸瓦のうち、瓦当裏面が良好なもの3点では、丁寧なナデにより平らに調整したもの、ユビオサエが残るもの、粗い指ナデを行うものなど様々である。

軒平瓦(237) 軒平瓦は3点が出土しており、いずれも平城6685 E型式である。内区は中心飾りが十字形で、左右にそれぞれ3回反転する唐草文を配する。上下の区と脇の区に珠文を配し、上区と脇区の境には杏仁形の珠文を置く。下顎部は斜めで無段である。平瓦凹面には布目を残し軽くなでている。凸面は瓦当側から後ろ側に向かって、縦方向ナデで仕上げている。焼成は軟質で色調は3点とも淡褐色を呈している。

丸瓦(238・239) 調査の中で出土した丸瓦はいずれも有段(玉縁)式である。出土した瓦の



第 21 図 古墓 S X 18 出土遺物実測図 1



第22図 古墓S X 18出土遺物実測図2

中で丸瓦の占める比率が少ない中であって、玉縁が伴うものはさらに少なく、わずか7点が確認できた。丸瓦の製作方法は、総じて模骨に布を被せ粘土板を巻きつけたのち、凸面を縦方向の縄目タタキを行い、ナデ調整を施している。凹面には布目痕跡をそのまま残し、ナデ消す等の調整は加えない。凹凸面両端部の面取りは、凸面に施される例は確認され

ないが、凹面では面取りを行うものを行わないものの両方が確認できる。丸瓦の分類は調整や寸法から行うことはできないが、玉縁の形状には変化が認められた。ただし、観察数が限られることから、ここでは大別し止めておく。

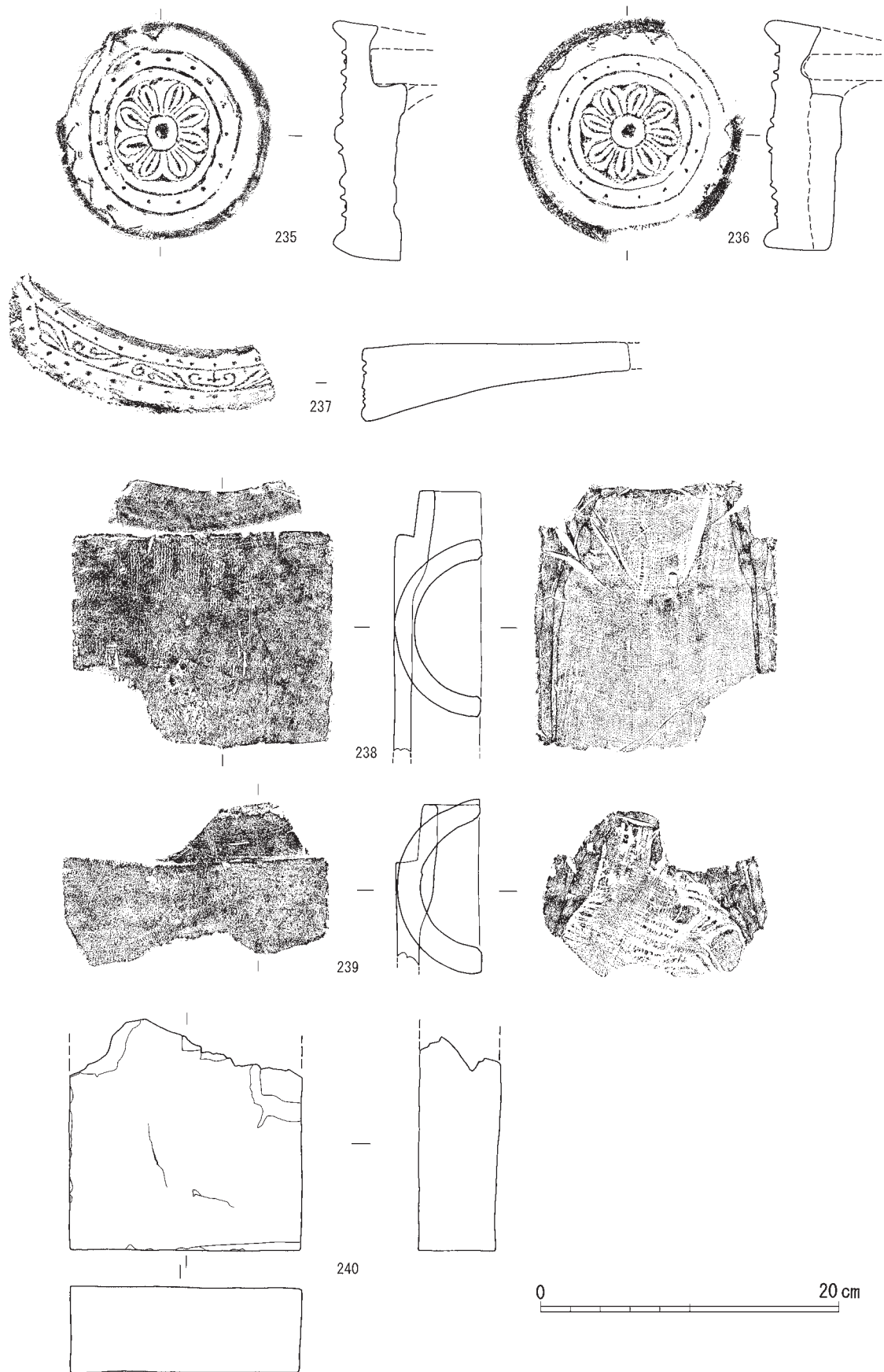
I類 (238) 玉縁の形状が方形で、両側面が水平であるもので、238が該当する。合計4点を確認した。玉縁の長さは全て4.2cmで、焼成が硬質で、灰色を呈している。

II類 (239) 玉縁の形状が台形を呈し、両側面も先端方行に向かって立ち上がるもので、239が該当する。玉縁の長さは5cm前後である。焼成が硬質で灰色を呈するもの(239)と、軟質で淡褐色を呈するものが存在する。合計3点を確認している。

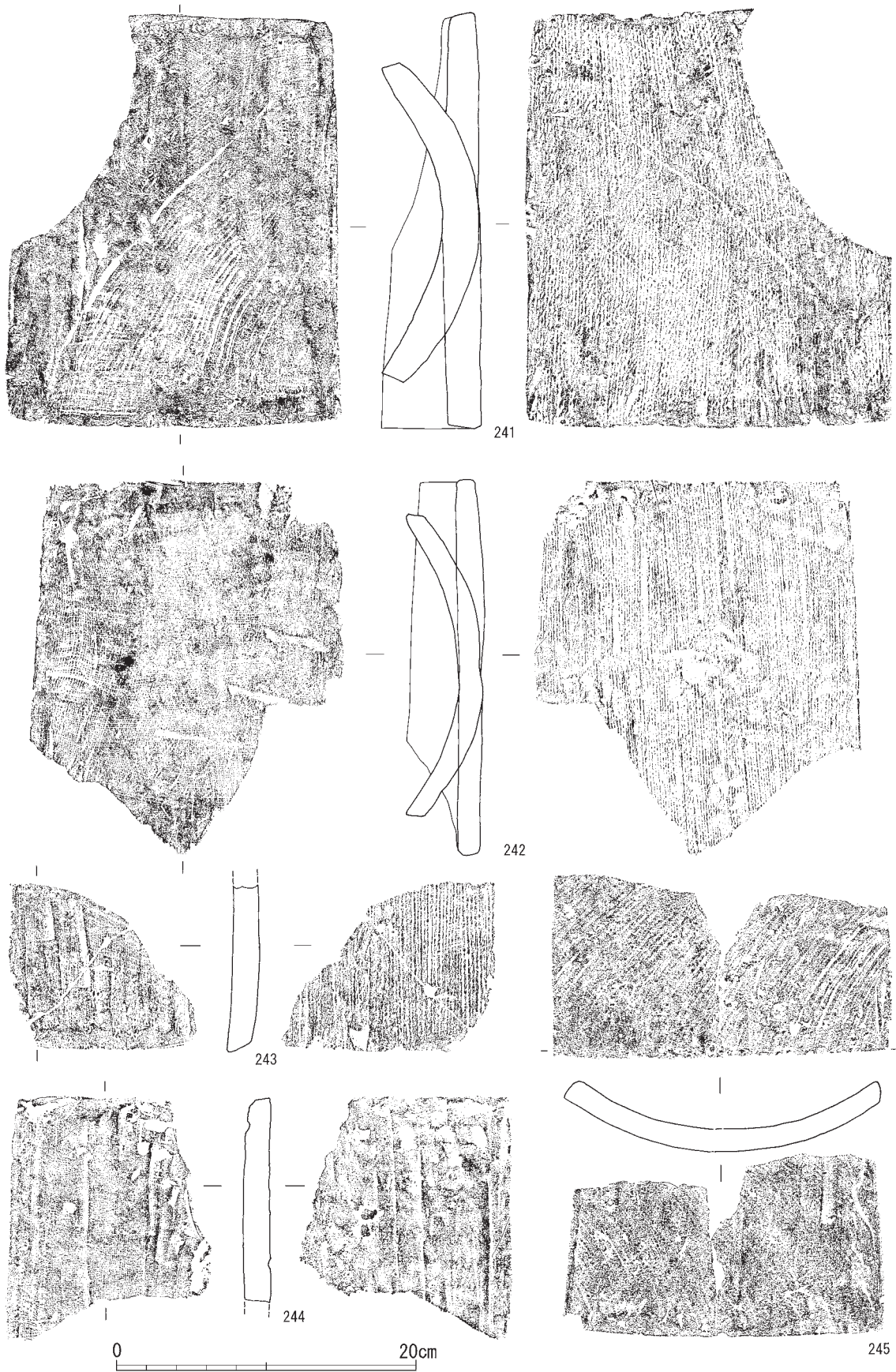
丸瓦では円筒部の器壁の厚さに若干の変化が認められたことから、出土資料の中から無作為に100点を抽出して計測をおこなった。器壁の厚さは1.4cmを最大多数として、1.1～2.0cmまでの幅が認められた。玉縁が残る7点では、I類に属するものは1.3～1.6cm、II類に属するものは1.8～2.0cmに分かれた。計測点数が少なく実態を反映しない可能性も残るが、器壁の厚さにおいてI類は1.7cm以下、II類は1.7cm以上とする傾向が読み取れた。丸瓦全体でみればI類が優勢である状況から、鹿背山瓦窯ではII類よりもI類の丸瓦が多く生産されていた可能性が指摘できる。

平瓦 鹿背山瓦窯出土の平瓦は、凹面に糸切り痕跡がみられ、瓦の端部に綴った布端の圧痕が存在するものが多い。また、凹面には模骨の痕跡が全く存在せず、凹面中ほどに布綴じ痕を残すものは皆無である。このような状況から、鹿背山瓦窯跡では、平瓦は全て一枚作りで製作されていたようである。平瓦の分類については丸瓦と同じく完形のもものがなく、特に良好としたものは一部が欠損したものの1点、半分以上が残るものが5点程度しかなく、他の大多数は破片資料である。分類に際しては、良好な資料が少ないこともあって、破片資料も含めて行った。

I類 (241～243) I類は、凸面に縦方向の縄目タタキを行い、凹面に布目の圧痕を残すものである。生瓦の整形台は表面が平滑な凸型台が使用されている。241では凹面に残る布目痕を部分的に縦方向にナデ消す。凸面中央部に残る縄目が潰れる例も多く存在する。これは生瓦の乾燥が進まない段階で当面を下にして生瓦を置いたことを示し、凹面のナデ消しの作業工程に伴う潰



第 23 図 瓦実測図 1



第24図 瓦実測図2

れと考えられる。なお、凹面のナデ消しの範囲は固体によって様々であるが、凹面全体をナデで仕上げる例は認められない。焼成は硬質で灰色を呈するものが多い。また、胎土は砂を含み粗い傾向にある。241 の凹面には布目痕跡の下に糸切り痕跡が残る。この糸切り痕は、生瓦を整形するにあたり、方柱状の素地粘土塊から生瓦 1 枚分の粘土板を切り取った痕跡と考えられる。凹面のナデは指頭等によるナデ (241・242) と、板状工具による縦方向のナデ (243) の 2 種が認められる。また、指頭ナデにも縦方向ナデ (241) と横方向ナデ (242) の 2 種が存在する。243 にみる板状工具は幅約 2.4cm であり凹面の下端から施されるが、部分的に端から離れた内側から始まる状況も観察される。ナデ自体は弱く、部分的に布目が残る。

Ⅱ類 (244) Ⅱ類は凸面に縄目タタキをもたないものである。全体の中での出土量は僅かである。凸面にはユビオサエと縦方向に模骨様の段差痕が認められる。これは素地の粘土板をⅠ類と同じ凸型の整形台に置いて素手で押さえた後、板状工具による縦方向のナデで整形したものであろう。

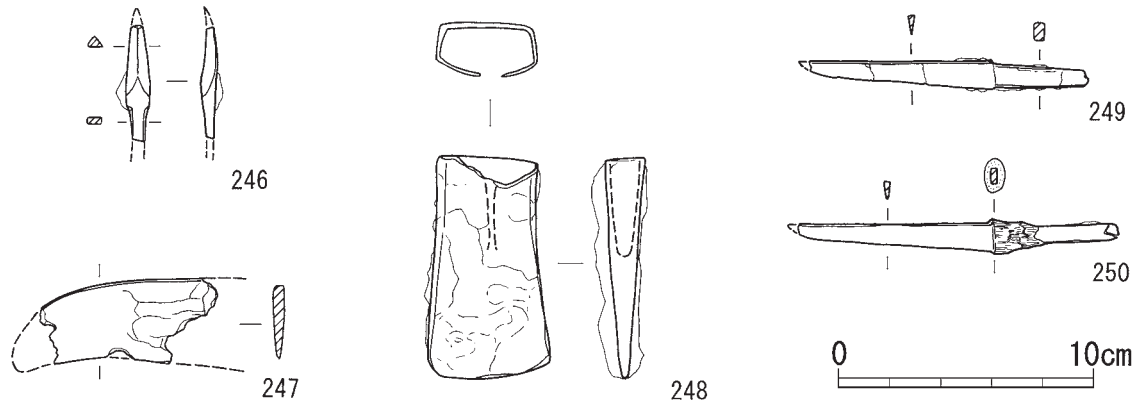
Ⅲ類 (245) Ⅲ類は整形台が凹型と考えられるものである。凹面に布目痕跡が存在せず、凸面には離れ砂の付着が認められる。この離れ砂の存在から凹面の整形台の使用が窺われる。245 は素地粘土板を切り取る糸切り痕を凹凸両面に残す。粘土板は常に連続して切り取られたようで、粘土板の一方の角から対角線方向に糸切りを行っている。糸切りの始点と終点は、粘土板の上下両面で同じ角で共通する。245 の凸面は薄い離れ砂がみられる程度で、あまり手を加えてはいない。凹面は部分的に縦方向の指ナデを施している。

磚 (240) 方形で厚みのある磚の出土をみている。出土量は瓦に比べ僅かであり、いずれも須恵質焼成である。隣接する 2 つの角が残り、一辺の大きさが判明するものは 3 点しかなく、なかでも良好なものを 1 点 (240) を図化した。240 は長方形の磚とみられるもので、短辺は約 15.5cm である。長辺は破損資料であるため不明である。厚さは 5.5cm である。胎土は良質であるが、僅かに 5 mm 程の小石を含むものもある。素地の粘土には数種の粘土が使用されるが捏ねが不十分で、破断面に灰色粘土と白色粘土が縞状に残るものも存在する。表面は軽くヘラケズリして仕上げている。
(渡辺理気)

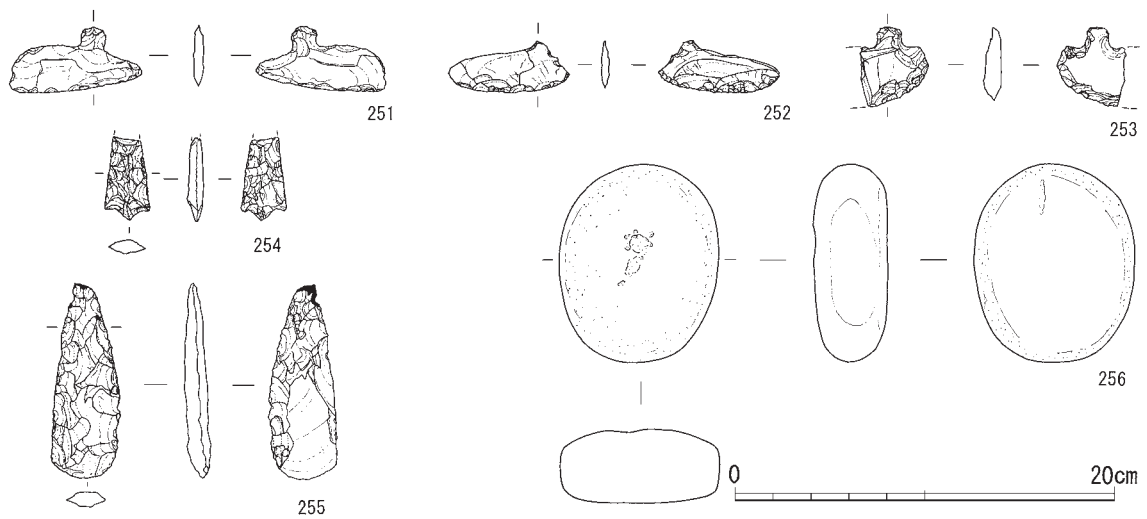
④金属器 (第 25 図) 246～248 の 3 点は、S B 35 周辺部の遺物包含層から出土した遺物である。246 は鉄製の鉈であり、刃部先端を欠く。247 は鉄鎌である。248 は鉄斧である。249 は S D 23 から出土した鉄製刀子である。残存長は 11.2cm を測る。切先は失われていたが、茎には柄の木質が僅かに残る。研ぎ瘦せた刃部の状況から、頻繁な使用が窺われる。250 は、S F 27 の轆上面から出土した鉄製刀子である。切先は失われているが、残存長は 12.7cm を測る。刃部は、頻繁な研ぎにより瘦せ細っている。茎の関付近に柄の木質が残る。関部の柄の断面形は楕円形である。

金属器ではその他、近世墓 S X 24 から寛永通宝 1 点の出土をみたが、脆弱であり図化できなかった。

⑤石器 (第 26 図) 丘陵上と溝 (S D 23・S D 48) から縄文時代の石器の出土をみた。ただ、



第25図 金属器実測図



第26図 石器実測図

同時期の土器の出土はみられない。251～253はサヌカイト製の石匙である。3点とも横長の刃部は曲刃である。刃部の長さは251が7.2cm、252が6.4cmを測る。254はサヌカイト製の有舌尖頭器であり、SD 21の肩部から出土した。先端部を欠くが残存長は4.3cmである。255はサヌカイト製の尖頭器であり、SD 48の溝底から出土した。基部の裏面には主剥離面を残し、側面の刃部は丁寧な押圧剥離で整えている。先端部をやや欠く。残存長は10.3cmである。256は丘陵上の包含層から出土した花崗岩製の磨石である。側面部が特に摩滅しており、片面の中央部に人為的な窪みをもつ。敲击石としても使用されている。長さ10.3cm、幅8.5cm、厚さ3.9cmである。
(竹原一彦)

3. まとめ

今回の第2次調査では、丘陵上から瓦工房に伴う掘立柱建物跡・通路遺構・粘土採掘跡などを検出したほか、奈良時代のもっこや多量の須恵器の出土など、貴重な調査成果を得ることができた。今回、粘土採掘・瓦製作・運搬等に関連する遺構の検出をみたことから、前年度に検出した2基の瓦窯跡とあわせて、鹿背山瓦窯跡のほぼ全容を明らかにすることが可能となった。瓦窯の

時期は奈良時代中頃（平城土器編年のⅢ期）と考えられる。

鹿背山瓦窯は、丘陵尾根の南側斜面部に瓦窯が築かれ、これまでに1号窯と2号窯の2基の窯跡を検出した。^(注9)瓦窯周辺部の斜面には未調査部分もあり、さらに数基の瓦窯が存在する可能性もある。2基の瓦窯跡は上面輪郭を確認したのみの調査であり、窯跡内部と窯跡南側直下の灰原の調査は実施していない。ただ、上面観察では第1次調査概要で報告したように、1号窯は平窯である。2号窯は、検出面で確認した焼成室の改築状況から、窖窯から平窯に造り替えているようである。

掘立柱建物跡S B 35は、2号窯から東に約20m離れた丘陵上に存在する。S B 35は2間×8間の規模をもち、丘陵尾根南側斜面の一部を削った平坦地に築かれている。S B 35の柱穴掘形は円形で、直径が0.3～0.5mと小規模であり、建物は細くて長い。上人ヶ平遺跡の瓦工房建物も2間×9間（両庇）で細長く、3棟が整然と並んでいる。S B 35は上人ヶ平遺跡の建物と同様な工房建物跡と考えられ、瓦製作・生瓦の乾燥等が行われたとみられる。S B 35の南側は後世の耕作に伴い大規模に削平された空間が存在する。上人ヶ平遺跡と同様ならば、この空間にも同規模の工房建物が存在した可能性があるが、確証は得られない。

今回の調査では、丘陵西裾の平坦地と丘陵部のS B 35と瓦窯を結ぶ2本の通路（S F 27・28）を検出することができた。S F 27とS F 28はほぼ同規模で並走するが、路面の角度が大きく異なっている。瓦窯跡に近いS F 28は傾斜が緩く、その東端は2号窯の焼成部付近に達する。北側のS F 27はS F 28より傾斜が急勾配であり、東側が削平の影響で失われるがその延長先にはS B 35が存在する。S F 27の東端は、ほぼS B 35付近にまで続いていたものと推測される。S F 27とS F 28は、ともに路面部に石敷きが存在し、石敷き上に1条の轍が残る。轍の存在から、荷車を使用した物資の運搬が行われたと考えられる。この轍は1条であることから、1輪車を使用したとみられる。急勾配のS F 27は、西裾の平坦地から丘陵上（工房）に、比較的軽量の物資の荷揚げに使用された可能性が高い。焼成の完了した瓦は燃焼室天井を壊して取り上げ、一旦窯の近くに集積して検品したと考えられる。1号窯と2号窯の北側からS F 28の間には平坦な空間が存在し、ここが瓦の集積地の一つとみられる。不良な瓦は窯跡前面の灰原に捨てられたと考えられる。瓦は重量物でもあり、窯跡から搬出の際には、主に傾斜の緩やかなS F 28が使用されたと考えられる。

調査で出土した複弁蓮華文軒丸瓦（平城6313型式）と均整唐草文軒平瓦（平城6685型式）は、平城宮内に出土例が認められ、鹿背山瓦窯の瓦は平城宮に供給されていたことが明らかとなった。

S D 21から出土した須恵器は、割れや歪みなど不良な製品が数多く存在する。調査地内に窯跡は確認できないが、周辺部に奈良時代の須恵器の窯跡が存在する可能性が高い。

平安時代では尾根南側斜面に1基の古墓（S X 18）が存在した。古墓の年代は平安時代に属する。^(注10)木炭木槨墓であり、その丁寧な造りや灰釉陶器の副葬から、被葬者は身分の高い役人と判断される。被葬者の特定には至らないが、鹿背山に墓所をもった橘氏一族の墓である可能性が高い。^(注11)

平安時代後期には通路S F 27・28の西部にある谷地形を大規模に削り、平坦地が築かれている。この平坦地には同時期の遺構が存在せず、平坦地の利用状況には不明な点が多い。

鹿背山瓦窯跡は、調査によって縄文時代から江戸時代にかけて、折りにつけ人々が活動した状況が明らかになった。なかでも、特に重要な位置を占めるのは奈良時代中期から後半にかけて操業した鹿背山瓦窯跡である。粘土採掘から瓦の焼成、その後の運搬までの一連の工程が検出遺構によって明らかになる成果を得ることができた。2基の窯跡を検出したが、内部構造等の詳細については内部調査が未実施のため不明な点が多い。2号窯では焼成部の平面形の変化から、窖窯から平窯へ造り替えているようである。窖窯から平窯に変わる時期を知る上で、鹿背山瓦窯跡は重要な位置を占める遺跡である。

(竹原一彦・柴 暁彦)

(2) 馬場南遺跡

1. はじめに

馬場南遺跡は、JR木津駅の南約1kmにあつて、木津平野の東部丘陵を東西に貫く井関川の右岸丘陵裾に位置する。遺跡範囲は、東と北にY字に分岐する谷部と井関川沿いの文廻池とその周辺部が含まれる。

今回の調査は、造成工事に先立ち、遺跡の性格・内容・範囲の確認を目的として、丘陵裾の水田部を中心に16か所の試掘トレンチを設けて試掘調査を実施した。また、第7トレンチについては遺構の性格を明らかにするために一部拡張を行い、面的調査を実施した。



第27図 馬場南遺跡調査トレンチ配置図

2. 調査概要

今回の調査では、谷筋の水田部を中心に丘陵裾に沿って14か所の試掘トレンチ（第1～第11・第14～第16トレンチ）を設定して試掘調査を実施した。谷部以外では東側丘陵裾に2か所（第12・第13トレンチ）の試掘トレンチを設けた。調査の結果、谷部の数か所のトレンチから弥生時代の溝や奈良時代の掘立柱建物跡・井戸・溝を検出したほか、同時期の遺物が多量に出土した。

（1）試掘トレンチ（第27・28図）

第1トレンチ 谷筋最奥部の丘陵南側裾部に設けたトレンチであり、幅約4m×長さ約25mの規模を測る。地表下約2mまで掘り下げて遺構・遺物の検出を目指したが、灰色系・淡緑灰色系の粘質土や砂の厚い堆積層のみであった。トレンチ最下部では湧水がみられ、土質も軟弱であることなどから、調査当初から壁面の崩壊が進む状況にあった。堆積土は丘陵裾方向から谷筋中央に向かってやや下がる状況にあり、自然堆積した土層と判断された。トレンチ内は無遺構・無遺物であった。

第2トレンチ 谷筋最奥部の丘陵北側裾に設けたトレンチであり、幅約6m×長さ約7mの規模を測る。第1トレンチと状況は大きく変わらず、無遺構・無遺物であった。

第3トレンチ 第2トレンチの西側、丘陵の北側裾に設けたトレンチであり、幅約4m×長さ約25mの規模を測る。第2トレンチと状況は大きく変わらず、無遺構・無遺物であった。

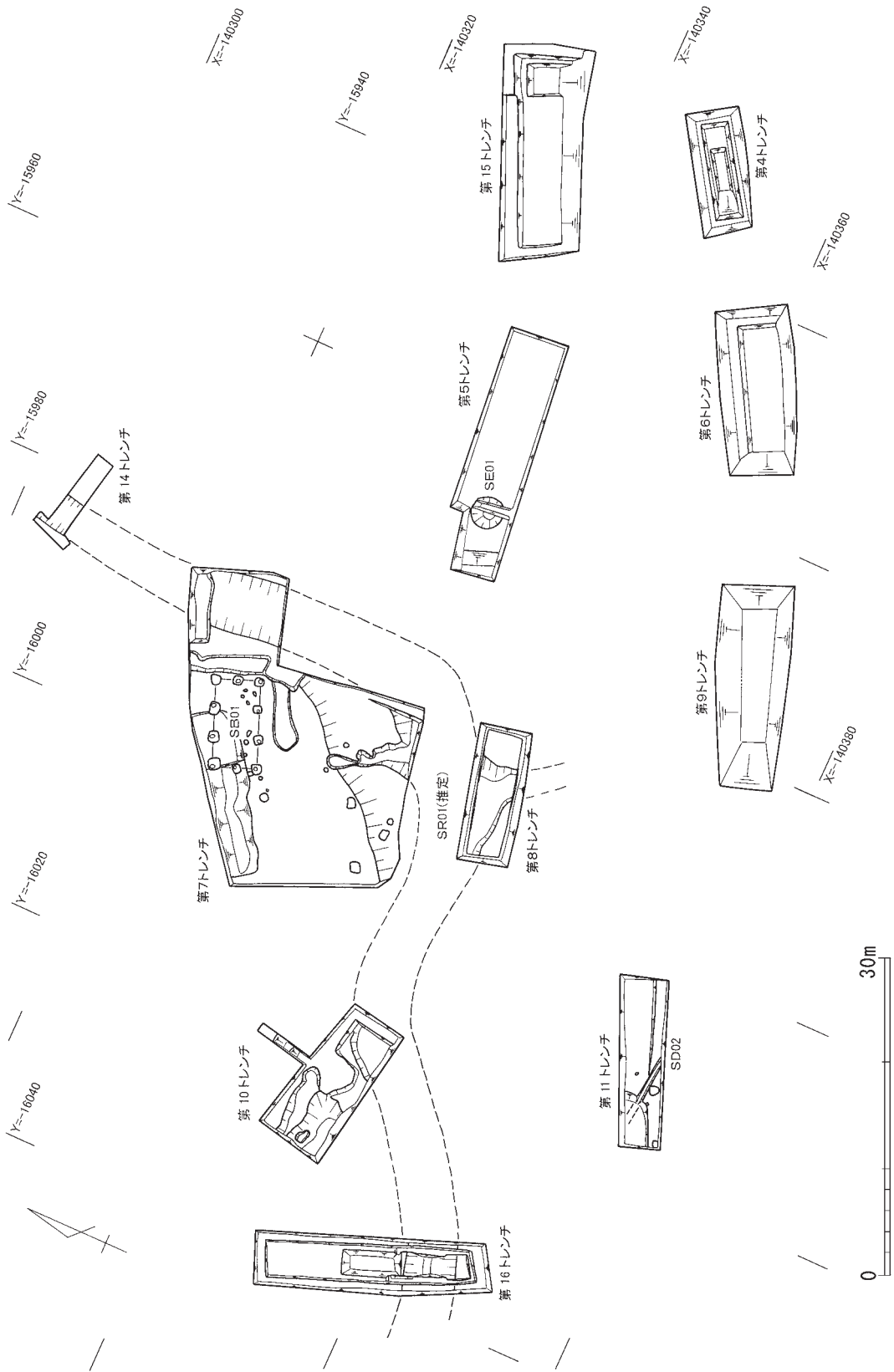
第4トレンチ 第3トレンチの西側、丘陵の北側裾に設けたトレンチであり、幅約4m×長さ約18mの規模を測る。地表下2.4mまで重機掘削を行ったが、地山の検出には至らない。堆積土の状況は、先述のトレンチと大きく変わらず、無遺構・無遺物である。

第5トレンチ 谷筋の分岐部に位置し、東側谷筋の北尾根南裾に設けたトレンチである。第1トレンチからは西側にやや離れる。幅約4m×長さ約25mの規模を測る。ここでは地表下0.4m付近に黄茶灰色系の砂質土が存在し、精査を実施したところトレンチ西端付近から奈良時代の井戸（SE 01）を1基検出した。トレンチ内の調査では、須恵器と土師器に混じってサヌカイトの剥片等の出土もみた。

第6トレンチ 第5トレンチ南側の丘陵北裾に設けたトレンチである。幅約6m×長さ約16mの規模を測る。トレンチは地表下約2mまでの掘削を行った。灰色系・淡緑灰色系の粘質土や砂の自然堆積がみられたが、第5トレンチで確認した。遺構面は検出できなかった。遺物の出土はみえていない。

第7トレンチ 第5トレンチの西側、谷筋北側丘陵裾に設けたトレンチである。トレンチは当初、分岐した北側谷筋を横断するように4m幅のトレンチを設定し調査を実施した。丘陵裾部では耕作土直下に淡黄灰色～黄灰色の硬い砂質土が広がり、柱穴を検出したほか遺物が出土した。トレンチの東端部では、奈良時代の土器を多数含む暗灰色粘質土の堆積層を確認した。

調査地内から掘立柱建物跡（SB 01）1棟、トレンチ東端部で大溝（SR 01）を検出したことから、建物跡の全容と周辺遺構の確認を目的に建物跡南部でトレンチの拡張調査を行った。拡



第28図 検出遺構平面図

張を行ったS B 01の南側は遺構面が緩やかに南東側を下る状況にあり、幾つかの柱穴や小規模な溝が存在したが遺構密度は薄い。S R 01では溝の上層でもある暗灰色粘質土層中から、三彩の陶器片や土製品が出土した。

第8トレンチ 第7トレンチの南側、1段大きく下がった水田部に設けたトレンチである。谷筋の分岐部に位置している。東西方向のトレンチは、幅約6m×長さ約12mを測る。第7トレンチから続くS R 01の南延長部の一部(南岸)を検出した。第7トレンチから南流するS R 01は、第8トレンチ付近でその流れを大きく西に振る。また、小規模ではあるが、第8トレンチから第9トレンチ方向に続く流れも存在するようである。

第9トレンチ 第8トレンチの南東側、丘陵北側裾部に設けたトレンチである。トレンチは幅約7m×長さ約17mを測る。地表下約2mまで掘り下げたが無遺構・無遺物であった。

第10トレンチ 第7トレンチの南西側、第7トレンチのある平坦地から1段下がった水田に設けたトレンチである。第8トレンチの西に位置する。地表下約0.5mで淡灰色の粗砂層を検出し、トレンチ東端ではこの粗砂層を切って流れるS R 01の北岸部を検出した。須恵器や土師器に混じって三彩陶器が出土した。

第11トレンチ 第10トレンチの南側に位置し、丘陵の北側裾部の水田に設けたトレンチである。幅約4m×長さ約20mの規模を測る。トレンチ中央やや西側の地表下約0.4m付近で、弥生時代の素掘り溝(S D 02)を検出した。

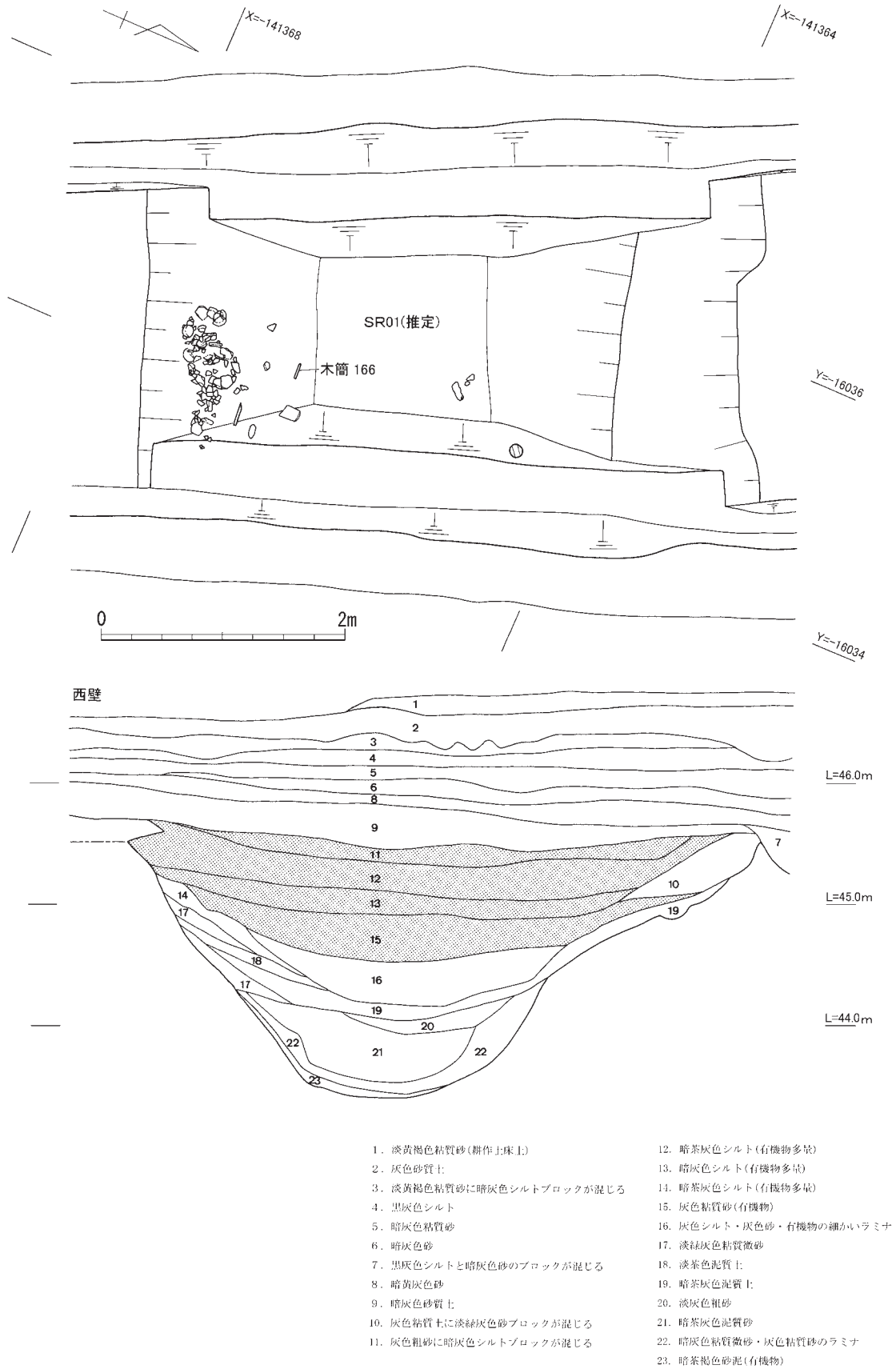
第12トレンチ 井関川右岸にあって、北に広がる丘陵部南裾に設けたトレンチである。幅約4m×長さ約22mの規模を測る。耕作土直下から地表下約2.3mまでの間は、灰色系・黄灰色系の砂や砂礫が入り組んで堆積する。遺構の存在は確認できないが、古墳時代から近世まで遺物の出土をみた。遺物は須恵器や陶磁器であり、多くは器表面の摩滅が進む。トレンチ壁の土層観察から、当地は井関川の氾濫原とみられ、遺物は井関川上流部からの流入遺物と判断される。

第13トレンチ 第12トレンチの東側に設けたトレンチである。幅約4m×長さ約30mの規模を測る。地表下約1mまで掘削を行ったが、状況は第12トレンチと同じであった。

第14トレンチ 第7トレンチの北側、小規模な北側谷筋に設けたトレンチである。幅約2m×長さ約9mの規模を測る。当地は、最近まで溜め池であったとみられ、第7トレンチとの間に大規模な堰堤が築かれていた。トレンチ内では暗灰色粘質土の堆積がみられ、トレンチ西部から大溝S R 01の北側延長部を検出した。特に土質が軟質であったことから完掘に至っていないが、須恵器や土師器の出土をみている。

第15トレンチ 東側谷筋の第1トレンチと第5トレンチの間に設けたトレンチである。幅約8m×長さ約21mの規模を測る。第5トレンチに近いトレンチ西端部から柱穴と判断した遺構を検出したほか、暗灰色粘質土の遺物包含層を僅かに検出した。トレンチ中央以東は砂と粘質土が自然堆積し、無遺構であった。

第16トレンチ 谷の口部にあたり、谷を横断する方向に設けたトレンチである。調査期間中の濁水排水溝の関係から、トレンチは谷の北半部にとどめた。トレンチは、幅約4m×長さ約



第29図 第16トレンチSR01実測図

21 mの規模を測る。トレンチ南端部で大溝S R 01を検出した(第29図)。このトレンチで検出したS R 01については、トレンチ内で完掘を行った。当トレンチで検出したS R 01は幅約5 m、検出面からの深さは約2 mを測り、護岸施設は確認できない。断面形は深いU字形を呈する。粗砂や砂・シルトや粘質土・有機物層が互層に堆積している。なかでも上層付近には葉を主体とした有機物を含むシルト層が堆積し、灯明皿・三彩陶器・墨書土器・木簡などの遺物も多量に含まれていた。木簡(166)はこの第15層の南岸部で、灯明皿群の下から出土した。

今回の試掘調査において検出した遺構は、検出もしくは部分調査に止めた。馬場南遺跡は平成20年度以降に面的調査を実施する予定であり、各遺構の詳細についてはここでは割愛する。

(2) 出土遺物

第30図1～74はS D 01から出土した土師器の灯明皿と土師器皿である。第8トレンチからの出土が多数を占め、完形品の比率が高い。1～64は口径8.6(1)～13.1cm(56)の小型の皿で、底部ヘラ切りの59以外は全て手づくねである。皿は、口径が11cm前後と12cm前後を測るものが多い。1～58は灯明皿として使用され、口縁部に灰色から黒色の灯明痕(油煙痕)を残している。多くは1か所であるが、2～4か所みられるものも存在する。61～70は灯明痕のない皿である。内面中央部だけに薄茶色の汚れがみられる例がある。灯明皿には口縁部の外面から底部にかけて薄茶色の油煙の垂れ痕がみられるものがある。灯明痕のない皿の内面の汚れは灯明皿外底部の汚れと対応する状況からみて、灯明皿の台皿として使用された可能性が高い。

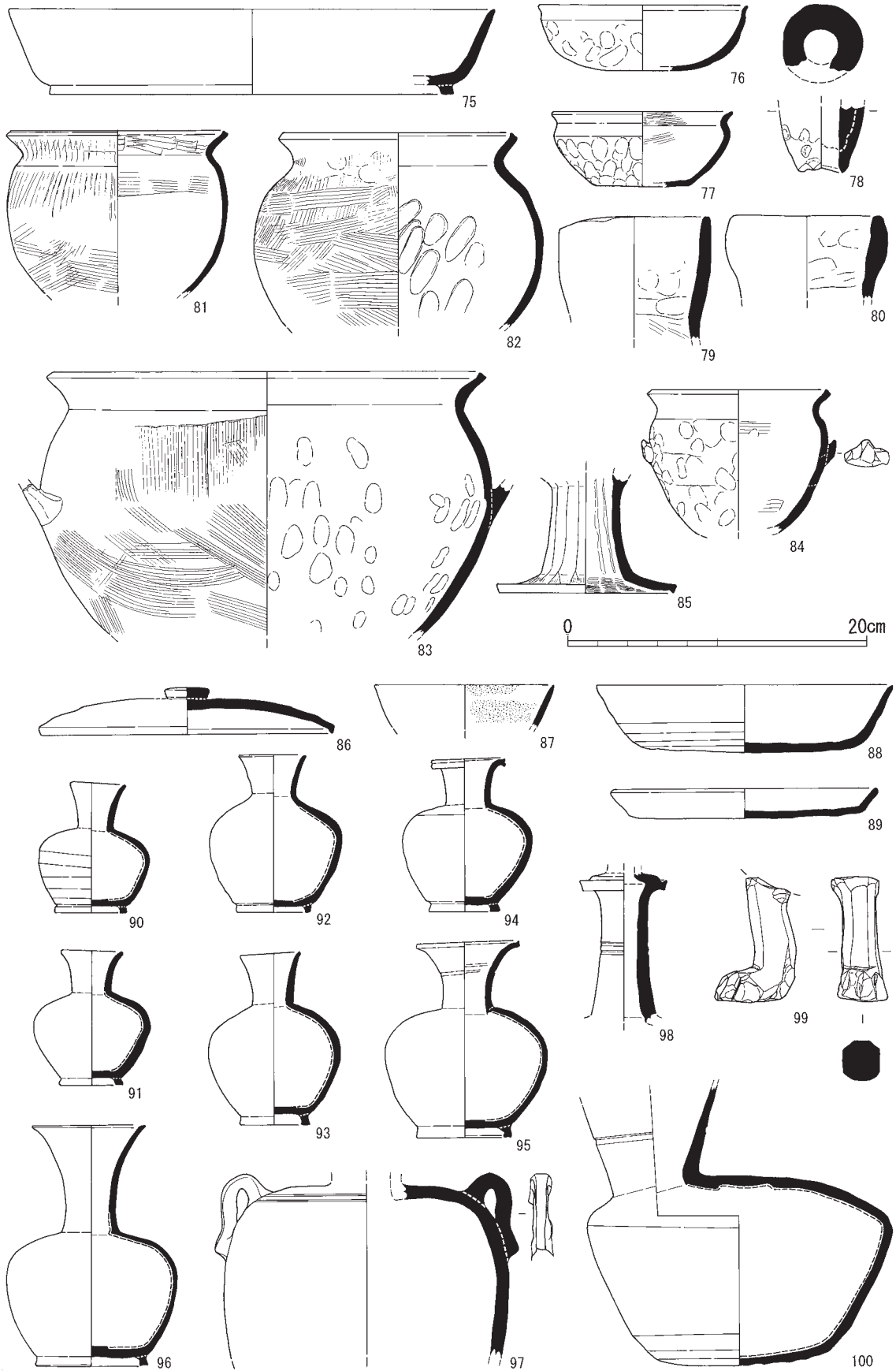
71～73は杯Aであり、灯明皿として使用されている。平らな底部は、71がヘラケズリ、72と73はナデである。口径19cm(73)と22cm前後(71・72)のものがみられる。74は皿Aであり、灯明皿として使用されている。底部はヘラケズリで口径は22cmである。小型の灯明皿は灯明痕が1～4か所であるが、71～74は口縁部の約半分から全周にかけて黒々としたタール状の固化した油煙が厚く付着している。71～74では灯芯の痕跡が10～20か所に上り、ことさらに灯芯数が多い。

第31図は土師器(75～85)と須恵器(86～100)である。75は杯Bである。口径22.6cm、器高5.5cmである。76は椀Cである。口径14.1cm、器高4.3cmである。77は壺Bで、広口である。底部は平底で、口縁部は短く外反する。口径12.2cm、器高5.1cmである。78はふいごである。先端部外面はガラス質化している。79・80は製塩土器である。口径は約10cmである。81・82は甕Aである。81は口径14.3cm、82は口径15.3cmである。83・84は甕Bである。相対する肩部2か所に把手をつける。84は口径11.9cm、83は口径29.3cmである。85は高杯の脚である。外面は面取りし、内部には絞り痕を残す。

86は蓋である。直径19.8cmである。87は杯の口縁部である。内面には薄い朱が残る。88は杯Aである。口径19.9cm、器高4.4cmである。89は皿Aである。口径17.6cm、器高1.9cmである。転用硯でもあり、内底面は特に平滑である。90～95は壺Mで、外反する頸部は短い。器高は9.7～12.2cmである。96は壺Lで、長頸である。器高は16.2cmである。97は壺Nである。相対する肩部に耳状の把手を付ける。98は浄瓶である。細長い頸部には沈線をもつ。漏斗状の



第30図 灯明皿、土師器皿実測図



第31図 土師器、須恵器実測図

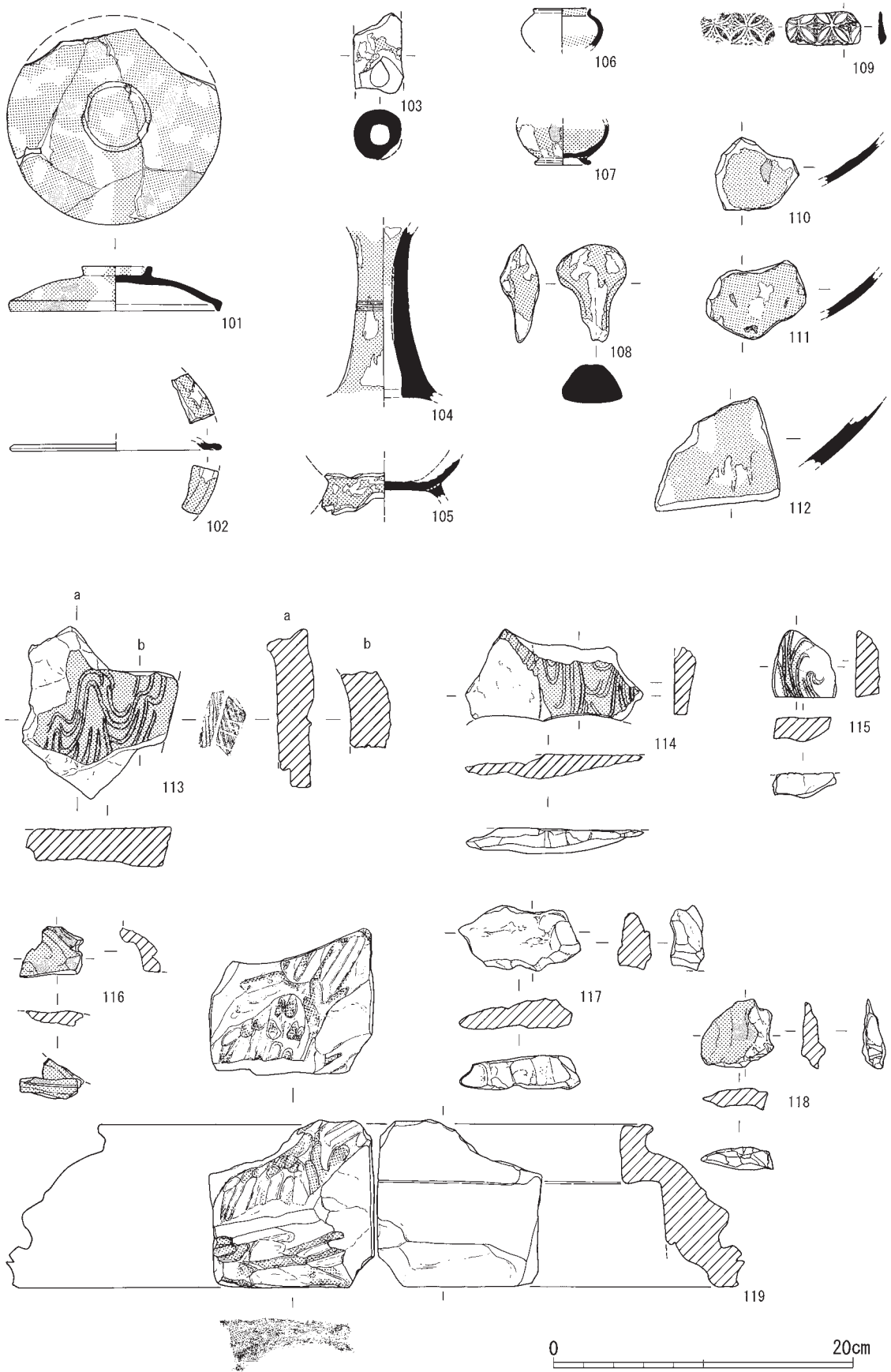
口縁部を欠く。99は須恵質の獣脚である。切込みによる指部の表現はリアルである。高さは8.3cmを測る。100は平瓶である。把手は付かない。

第32図101～119は奈良三彩の陶器である。多くの三彩陶器はSR01の出土であり、還元作用によって三彩の発色は銀化してくすむ。奈良三彩の胎土は精良で白色を呈している。101・102は蓋である。101は頂部に輪状つまみをもつ。口径14.1cm、器高3.1cmである。103・104は水瓶の頸部である。胎土は軟質である。104はいわゆる二彩である。105は脚付の壺である。106・107はミニチュアの壺である。106は口縁が外反気味に短く立ち上がる。器表面の剥落が激しいが、緑色釉がみられる。口径は3.8cmである。体部径は5.5cmである。107の体部径は6.2cmである。108は脚である。胎土は軟質である。109はスタンプ文様のある土製品の一部であり、拓本も添付した。輪の中に花卉・子葉を配置したようにもみられるスタンプが連続する。元は施釉されていたとみられるが、素地のみが出土した。陶枕とも考えられるが、不明な点が多い遺物である。110～112は内外面の施釉状況や器壁のカーブから、鉢と考えられる。

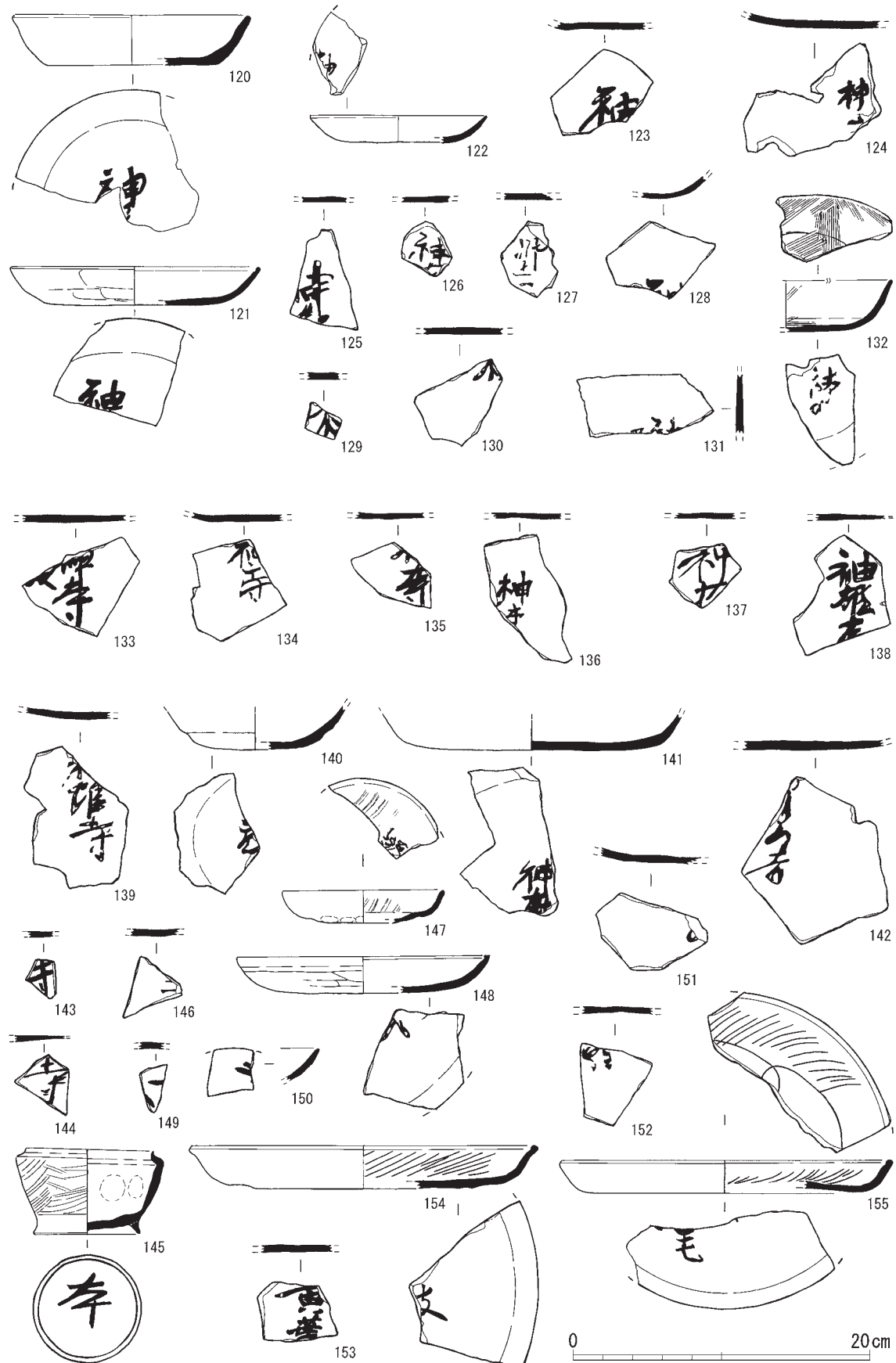
113～115は、水波文をもつ三彩の土製品である。表面にはヘラ状工具による平行する数本の沈線で水の流れが表現される。113は施釉部の左上端の胎土が盛り上がる（断面a）状況から、山河などを表現した立体感のある埴と推測される。水波文の沈線は深くシャープである。図面右側面は直線的に面取りされ、1本の太目の沈線とこの沈線に直行する3本の細い沈線が存在した。この沈線は埴の組み合わせ順の記号とみられる。残存長11.5cm、残存幅10.1cm、厚さは2.5cm以上である。素地粘土の焼きは硬い。114の水波文は彫が浅く、113より不鮮明である。焼成はやや軟質である。図面下方の側面部は中央部に稜をもち、左右は緩やかなカーブを描いて面取りする。別部品との接合面と考えられる。残存幅は12.2cmである。115の水波文は彫が深い。下端部は直線的に面取りする。116～118は表面の凹凸が著しく、山の一部と考えられる。焼成は硬い。117の側面部は匙面取りしている。面取り部に薄い施釉が残る。焼成は軟質である。118は焼成が硬質である。119は円形の台座とみられる土製品である。台座は中空で、内面が階段状に上方にかけて窄まることから、木型の周囲に貼り付けられていたと考えられる。台座は数個の部品で構成されたとみられ、片方の側面に平滑な分割面がみられる。分割ラインは台座の中心を大きくはずしている。

上端側面のカーブは内径35.6cmを測る。表の側面は、饅頭形のカーブをもち、先の丸い円棒で側面から軽く突き刺したり、連続的に棒の側面を押し付けたような造形がみられる。凹面の幅は8mm程度である。所々に黒色銀化した施釉が残っている。下端部は約5cmの厚さがあり、端面には布目圧痕が残る。

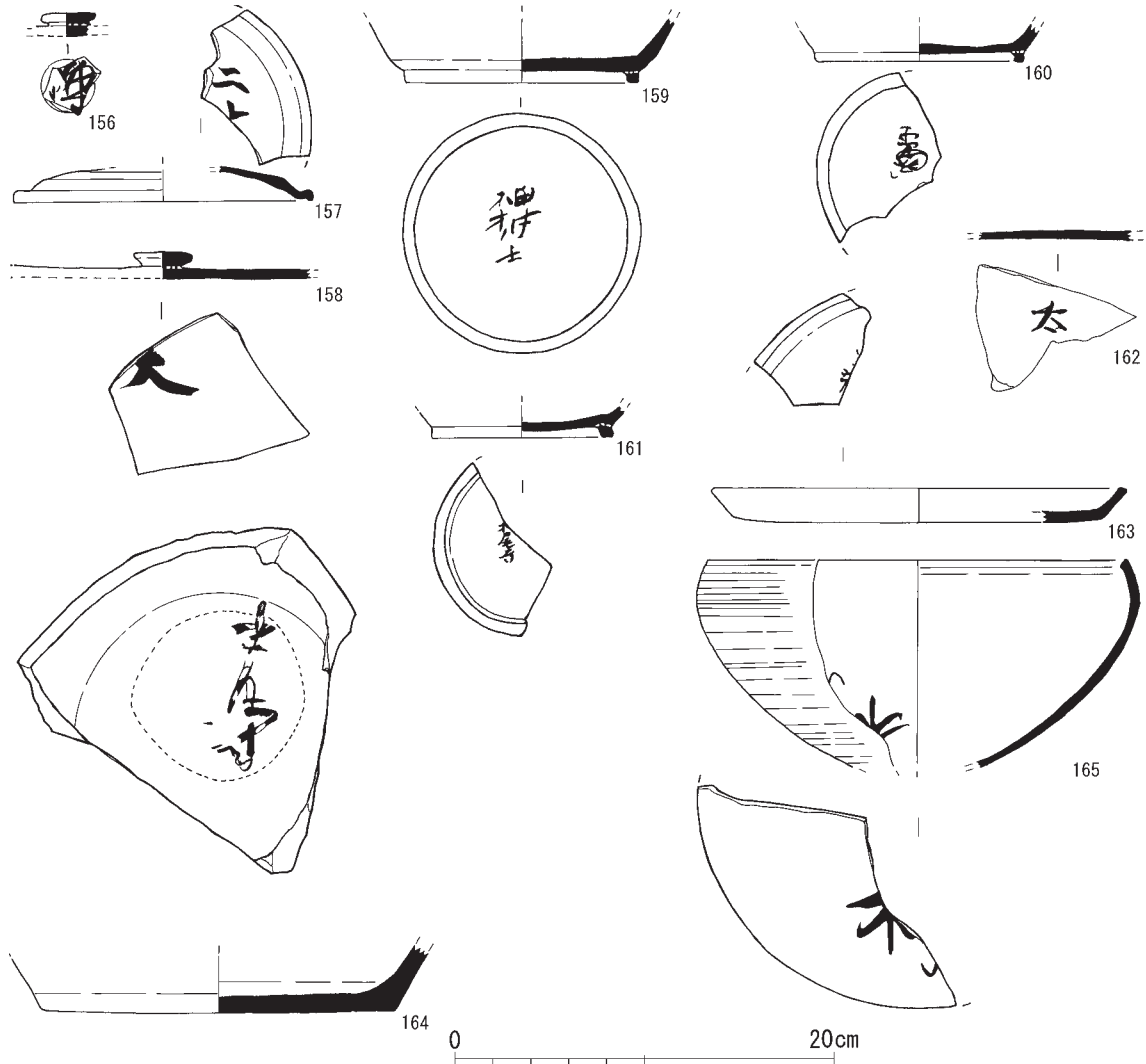
第33図120～155と第34図156～165は墨書土器である。墨書については奈良文化財研究所の赤外線写真の判定によるものが多い。^(注12)120～155は土師器、156～165は須恵器に墨書が認められた。土師器では杯と皿の外面に墨書されるものが多いが、145のみ壺Eの底部高台内側に寺を墨書する。大多数の墨書は、120～145などにみる「神□寺」・「神寺」・「寺」が占めることから、寺院名を表したものとみられる。153は寺院名とは異なり、「黄葉」と判読できる。



第 32 図 三彩実測図



第33図 墨書土器実測図1

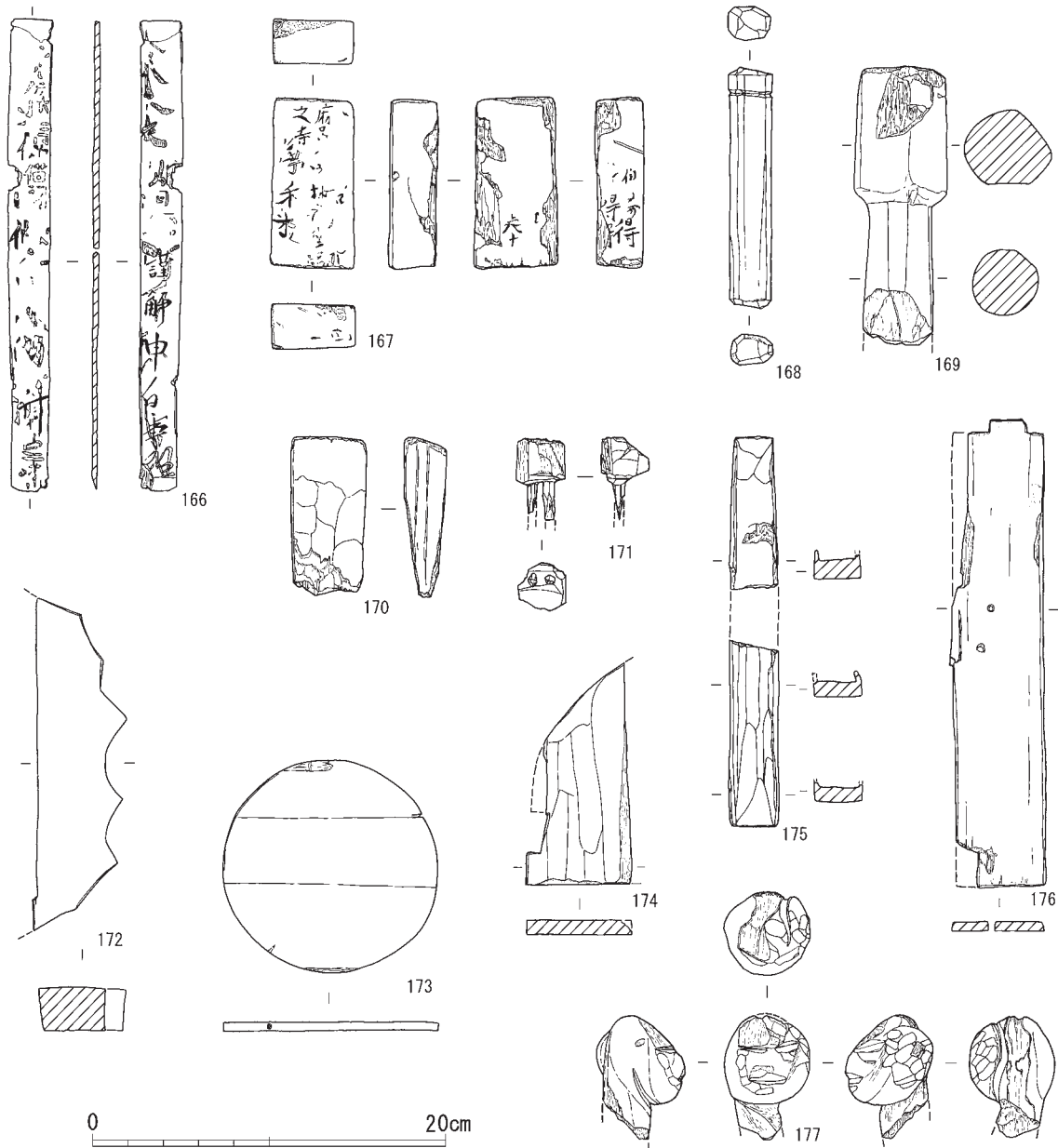


第34図 墨書土器実測図2

須恵器では蓋(156～158)・杯B(159～162)・皿(163)・壺(164)・鉢A(165)など各種の器に墨書が行われている。土師器にみられた「神□寺」・「寺」もみられるが、157の「二(カ)□」、158の「大」、162の「太」など、バリエーションが豊富である。なかでも、161は杯Bの底面に墨書されたものであるが、「□尾寺」と判読できる。164は壺の内底面に寺院名の墨書がみられる。第34図の破線内が特に平滑であり、転用硯として再利用されている。鉢Aの165は「神」とみられ、墨書は鉢を伏せた状態が文字の正位置となる。

第35図は木簡を含む木製品であり、SR 01から出土した。167のみ第8トレンチから出土し、他は全て第16トレンチからの出土である。木簡は2点(166・167)が出土した。166は第15層から出土した。長さ26.8cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmの柾目板の両面に、墨書が認められた。木簡上端の小口面は面取りするが、下端はA面からB面方向に斜めに切り取られている。

赤外線判読では、A面には第1次墨書として「大(カ)大(カ)大(カ)大(カ)[]」が認められ、更に下半部の第1次墨書の上に「謹解申日事」の第2次墨書が存在する。木簡の板面には刃物による削り痕がみられ、第1次墨書も肉眼観察では不鮮明ある。第1次の墨書は、第



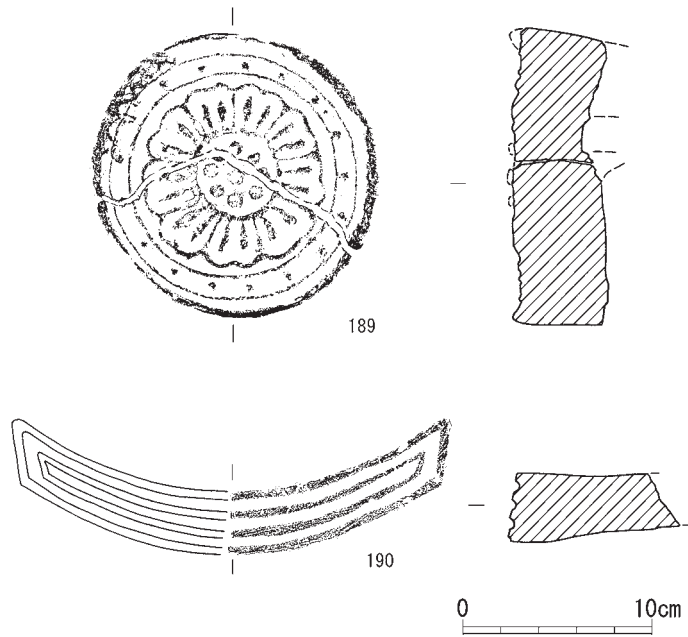
第35図 木筒、木製品実測図

2次使用に先立って削られたようである。A面の第1次木筒は習書木筒とみられ、第2次木筒は日時を上申する木筒である。B面の墨書は「[]」で判読し難い。A面の第1次の文字が板面の左側に偏り（B面では右側）、左側面に丁寧な調整が認められない。第1次木筒の当初の板幅は広く、再使用時に2枚の木筒材として分割したようで、第2次に伴う文字は木筒の中央に書かれている。

木筒167は、厚みのある角材であり、6面（A面～F面）のうち、5面に墨書や墨痕が存在する。角材は長さ9.5cm、幅4.8cm、厚さ1.6cmである。A面はほぼ全面に3行に渡って文字が墨書される。右から1行目は「□ □□ □」、2行目は「麻呂□□□□□□」、3行目は「之寺□□禾（カ）□」の墨書がみられる。側面Bには墨書・墨痕は存在しない。C面には中央下端付近に「奉」の一文字がある。もう一つの側面Dには、下半部分に「得」の文字が縦1行に3文

字、左右2行の合計6文字の墨書がある。小口面のE面では角部の1か所、相対するF面にも2か所に墨痕がみられた。F面の墨痕のうち1つは、文字の可能性もある。この木簡も連続する同一文字の状況等から、習書木簡とみられる。

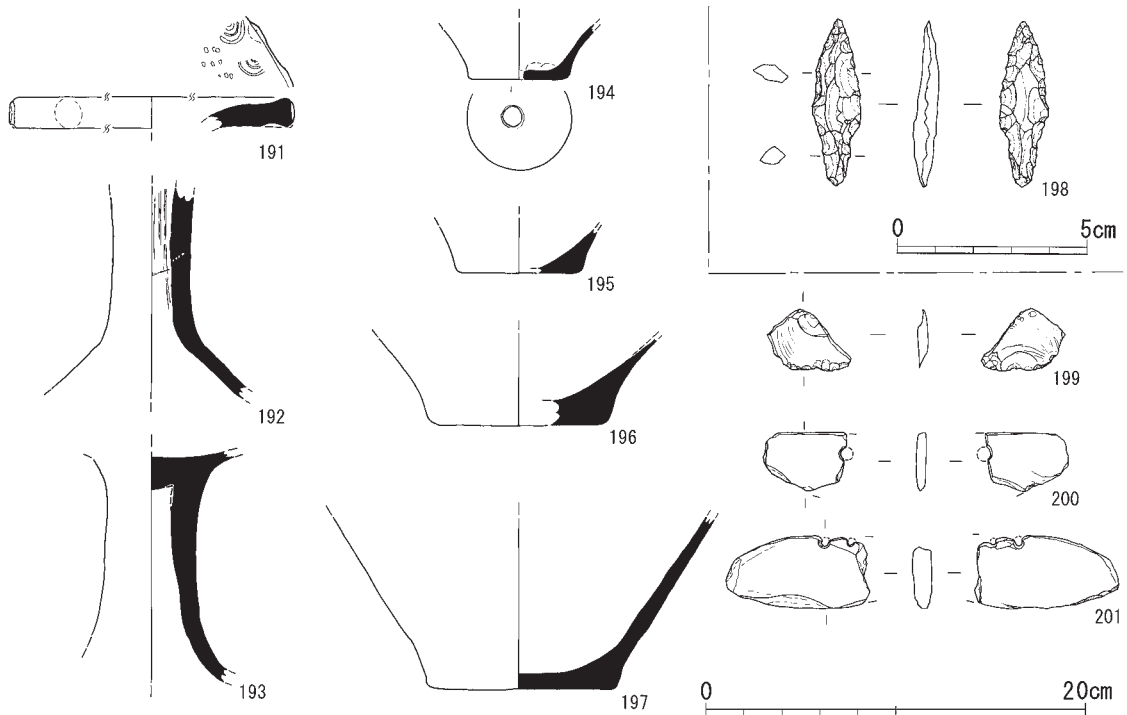
168・169は有頭棒である。168は全長13.8cm、幅2.3cm、厚さ最大1.8cmである。面取りした棒の断面形は楕円形に近く、片方の先端付近に切り込みを1周させて頭部を作り出す。切り込みは先端から1.5cmの位置にある。頭部の先端は傘型に面取りする。棒の下端は縁を細かく面取りする。



第36図 軒先瓦実測図

169は長さ8cm、幅4.2～5.3cmの頭部と、折損するが断面円形の棒部(残存長7.9cm)からなる。頭部の側面は約6面に面取りする。円棒部は直径約4cmで、頭部から棒端方向にやや太くなる。170は楔とみられる木製品で、厚みのある板の小口の一方を片面から斜めにカットして尖らせる。全長9cm、幅4.3cm、厚さ最大2.5cmである。171は、用途不明の木製品であり、小さな頭部の一方から、平行する2本の細長い棒が伸びる。傘型に近い頭部は、長さ2.6cm、幅2.8cmである。細い棒状部は直径0.6cmである。細い棒状部は折損するが、残存長は2.2cmを測る。172も用途不明の木製品である。破片出土であるが、厚さのある円形の板の周縁部を連続的に匙面取りする。残存長は18.8cm、厚さ2.5cmである。173は曲物の底板である。直径12.2cm、厚さ0.5cmである。周縁部の端面に1か所、目釘穴が存在する。174は用途不明の部材である。折損しているが、半円形を呈する板の可能性もある。曲面に面取りした周縁部の下端付近に、長さ2.3cm×0.8cmの方形の切込みが存在する。残存長12.6cm、幅6cmである。175は、舟形木製品とみられる。細長い方柱板の、片方の板面中央部を0.6cm程削り込み、縁を残して舷側を作る。船底は平坦に仕上げる。舳先・艫は板小口のままである。破損品であり中央部を欠損している。欠損部を欠いた残存長は19.1cm、幅2.1～2.7cm、高さは1.4cm、舷側の高さは0.6cmである。176は、ホゾをもつ部材で、板は長さ26.6cm、幅5.2cm、厚さ0.5cmを測る。一方の小口に2cm×0.8cmの方形のホゾが存在する。中央付近に2か所、小さな円孔が存在する。円孔の間隔は2.4cmを測る。

177は、人形の頭部である。頭部は葛の瘤部分を、頸部は蔓をそのまま利用している。人形の頸部は蔓の一方をそのまま利用しているが、折損のため頸部以下は不明である。頭部は左側側頭部を中心に刃物で細かい調整を行い、頭部を丸く仕上げている。刃物による調整痕は右頬にも認められるが、その範囲は限定的である。顔は瘤の凸部先端を鼻に見立て、両目と口は鋭利な刃物



第37図 弥生土器、石器実測図

で切り込んでいる。切れ長の両目はやや吊上がる。頭部の高さは5.2cm、幅4.9cm、鼻から後頭部間は4.8cmを測る。人形の正面は円形に近いが、横顔は卵形である。

第36図189と190は調査の中で出土した軒丸瓦と軒平瓦である。189は複弁蓮華文軒丸瓦であり、平城6316型式に分類される。面径は15.7cmである。190は、重郭文軒平瓦である。平城6572型式に分類される。

第37図は、第11トレンチS D 02と周辺部から出土した、弥生時代の土器（191～197）と石器（198～201）である。191は壺の口縁部である。口縁の周縁部に櫛描きの扇形文と列点文を施し、縁には円形浮文を付す。192・193は高杯の脚である。194は甑であり、底面の中央に円孔をもつ。195～197は底部である。

198はサヌカイト製の有茎石鏃である。全長3.9cm、鏃身部幅1.6cm、厚さ0.7cmである。199はサヌカイト製の削器である。刃部は両面から丁寧に押圧剥離する。200・201は粘板岩製の石包丁である。

3. まとめ

今回の馬場南遺跡の試掘調査では、当初予想した須恵器窯は存在しないことが判明したが、当初予想していなかった遺構群を検出した。掘立柱建物跡と井戸、多量の灯明皿・須恵器・墨書土器の内容から、馬場南遺跡は、奈良時代後半期（土器編年平城IV期）の寺院関連の跡である可能性がある。遺跡は狭い谷筋にあり、伽藍建物の全てが、谷の中に存在するとは考えられず、多くの伽藍は調査地周辺の丘陵部に点在する可能性もある。周辺での地形観察では、第7トレンチの

背後の斜面部と東側尾根先端部に平地が存在するほか、さらに周辺部の尾根筋や斜面には幾つかの平坦地が認められる。このような平坦地に建物跡が存在する可能性が高い。このような状況から、馬場南遺跡は古代の山林寺院跡であると考えられる。

今回の調査では、多量の遺物が出土している。出土遺物は、一括廃棄されたとみられる多量の灯明皿のほか、多種多様な三彩陶器・須恵器・土師器・墨書土器・木簡・木器など、豊富な遺物の出土をみた。

馬場南遺跡の調査は、今回の試掘調査成果をもとに、現在、本格的な面的調査が実施されている。今年度検出した遺構の詳細を含め、今後の調査の成果に期待が寄せられる。

(竹原一彦)

- 注1 中島 正「相楽郡木津町鹿背山瓦窯出土の古瓦」(『京都考古』第61号 京都考古刊行会)1991
- 注2 竹原一彦・柴 暁彦・他「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成18年度発掘調査報告(2) 鹿背山瓦窯跡第1次」(『京都府遺跡調査概報』第126冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2008
- 注3 長谷川達他「5山城南部地区遺跡分布調査概要-日本住宅公団木津東部地区遺跡分布調査概要-」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1981-1 京都府教育委員会)1981
- 注4 調査参加者(順不同)
調査補助員 渡辺理気・大谷博則・土屋菜摘子・田邊恵里香・金原裕美子・田邊恵里香・喜多萌夏・兼子拓也・鈴木宣雄・大江克己・宮澤まなか
整理員 山田三喜子・岡野奈智子・寺尾貴美子・清水友圭子・川村真由美・久米政代・藤井矢壽子・藤井聖名子・川端恵美・徳田千恵子
- 注5 小瓶、手付瓶の口縁部、把手が打ちかけられた類例は次のものがある。神木坂古墳群平安時代遺構SK03、丹切43号墳第3次床面遺物
- 注6 土器の機種呼称は、基本的に『平城宮発掘調査報告書XI』に準拠する。
(『平城宮発掘調査報告書XI』 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)1982
松田真一ほか「神木坂古墳群」榛原町文化財調査報告 第2集 榛原町教育委員会 1986
- 注7 灰釉陶器については京都国立博物館尾野善裕氏に実見していただきご教示を得た。記して感謝の意を表す。手付瓶については越州窯の水注を模倣したものと考えられるが、小瓶への過渡的な器形と考えられ類例は少ないようである。年代は950～990年を与えられている。
「北丘14号窯」(『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』岐阜県多治見市教育委員会)1981
『北丘25号窯発掘調査報告書』岐阜県多治見市教育委員会 1984
『大針4号窯発掘調査報告書』岐阜県多治見市教育委員会
「北小木萱原2号窯地点遺跡」(『北小木古窯跡群発掘調査報告書』岐阜県多治見市教育委員会)1991
- 注8 参考文献
『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』 国立奈良文化財研究所 1996
石井清司他「奈良山瓦窯跡群」(『京都府遺跡調査報告書』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1999
- 注9 注2に同じ
- 注10 平安時代の古墓の集成を管見ながら末尾に付す。

注11 延喜式に嵯峨天皇の皇后橘嘉智子の父である橘朝臣清友の墓「兆域東西三町、南北二町守戸一畑」が山城国相楽郡加勢山墓として記されるが、場所について定かでない。木津川市鹿背山地区が候補地とされている。

注12 馬場南遺跡出土の墨書土器の一部と木簡については、赤外線写真撮影および判定にあたり、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所のご協力を得た。

No.	遺跡名	所在地	立地	墓坑の形態	柩の規模(長×幅m)	棺の規模(m)	副葬品	時期
1	鹿背山瓦窯跡	京、木津川市鹿背山	丘陵南斜面	木炭床	2.12×0.55	2.0×0.5(推定)	灰釉陶器2点、土師器甕ほか	9c後～10c初
2	鳥取古墓	京、京丹後市弥栄町鳥取		木炭床木棺墓			銅鏡、石帯、刀剣類、茄子形垂飾、須恵器大甕	9c前
3	木棺墓54	京、右京区嵯峨野開町	段丘下の平坦地	木炭床木棺墓	掘形3.0×1.6(南北、東西)	1.9×0.5	須恵器壺、緑釉陶器椀・皿、土師器皿、鉄製刀子2	10c初
4	香掛古墓	京、京都市西京区大枝		木炭塚		1.85×0.55	銅水瓶、銅小椀、漆方形小箱、水晶丸玉、木製丸玉	8c後
5	平安京R3、3SX46	京、中京区西ノ京徳大寺町		木炭床		1.65×0.4	土師器皿、黒色土師器椀、合子、銅製空玉、銅鏡、漆器皿、簪、漆皮折敷、銅製鑷(はさき)	10c前
6	大日寺古墓	京、山科区欽修寺北大目町		方形石組内木炭敷			緑釉葉蓋形	9c後
7	西野山古墓	京、山科区川田	盆地の中央部	木炭塚		2.7×1.35	銅鏡、石帯、金装大刀、刀子、鉄鏃、漆箱破片、黒色土器、鉄板	9c前
8	安祥寺下寺古墓	京、山科区安朱中小路町、北屋敷町		木炭塚	外柩2.65×1.45、内柩2.35×1.05	1.95×0.45～0.5	銅鏡片、不明乾漆製品、土師器皿・杯・椀、釘、不明鉄器、銅銭	9c後
11	長野古墓	京、向日市物集女		木炭塚			銅鏡、水晶製丸玉、簪状製品、瓶子	9c前
12	向井古墓	京、綴喜郡宇治田原町郷ノ口		木槨墓			須恵器杯身	8c後
13	西山古墓	京、木津川市木津町	丘陵	木炭塚	2.7×1.3	2.0×0.45～0.5	棺内 冠	8c後葉～9c前?
14	平吉古墓	奈、高市郡明日香村	丘陵斜面	木槨	2.12×0.55	1.86×0.4	棺蓋上 冠断片、石帯、砥石、須恵器瓶子、黒色土器鉢、樽蓋上面 土師器杯	9c前
15	能峠南山1号墳	奈、榛原町		木棺			刀子	9c末～10初
15	能峠南山3号墳	奈、榛原町		木棺			刀子、須恵器平瓶	9c後
16	神木坂1号墳裾SK03	奈、榛原町萩原	丘陵南西斜面	木棺(炭)	墓坑1.15×0.73		八稜鏡、尾張産灰釉陶器壺	10c前
17	東中谷遺跡2号墓	奈、高取町	丘陵斜面	木炭塚			土師器壺、銅鏡(破鏡)、鉄滓	8c(鏡製作)
18	太安萬侶墓	奈、奈良市比叡町	丘陵斜面	木槨			墓誌(723)、真珠、鉄片	8c前
19	高安山第10号墓	奈、生駒郡三郷町		木槨	3.0×1.5		土坑内炭層中 鉄板、和銅開跡、神功開寶、萬年通寶	
20	萩原古墓	奈、榛原町萩原宇岩尾		炭			須恵器、葉蓋形、灰釉壺、鉄板(墓誌?)、八稜鏡	9c前
21	奈良市六条西木槨墓	奈、六条西	丘陵南斜面	木槨	墓坑1.5×0.7×0.5 木槨0.7×0.36			8c後半～9c初頭
22	小治田安萬侶墓	奈、天理市都祁村甲岡		木槨			墓誌	8c前
23	岡本山古墓群木棺墓1	大、高槻市岡本町字東山	丘陵南斜面	木棺	墓坑長2.4m、幅0.95m、深さ0.3m	2.0×0.45m	棺内 土師器皿、須恵器水瓶、刀子、帯金具(青銅製鉸具、サヌカイト製丸柄、巡方、鉞尾)	平安末
24	岡本山古墓群木棺墓2	大、高槻市岡本町字東山	丘陵南斜面	木槨墓			土師器皿片、鉄釘	9c
25	土師の里遺跡、墓1	大、藤井寺市道明寺		木棺	墓坑長2.75m、幅1.2m、深さ0.4m	1.8×0.5m、(棺材厚さ2.5cm)	漆器片、石鈎帯(巡方、丸柄、)木炭片 カシ	8c後半～9c初頭
26	土師の里遺跡、墓9	大、藤井寺市道明寺		木炭床		0.7×0.4	須恵器長頸壺、広口壺、鉄釘	8c後

圖 版

鹿背山瓦窯跡第 2 次

(1) 鹿背山瓦窯跡第 2 次調査地遠景
(北西から)



(2) 第 2 次調査地遠景 (南東から)



(3) 第 2 次調査地全景 (左上が北)





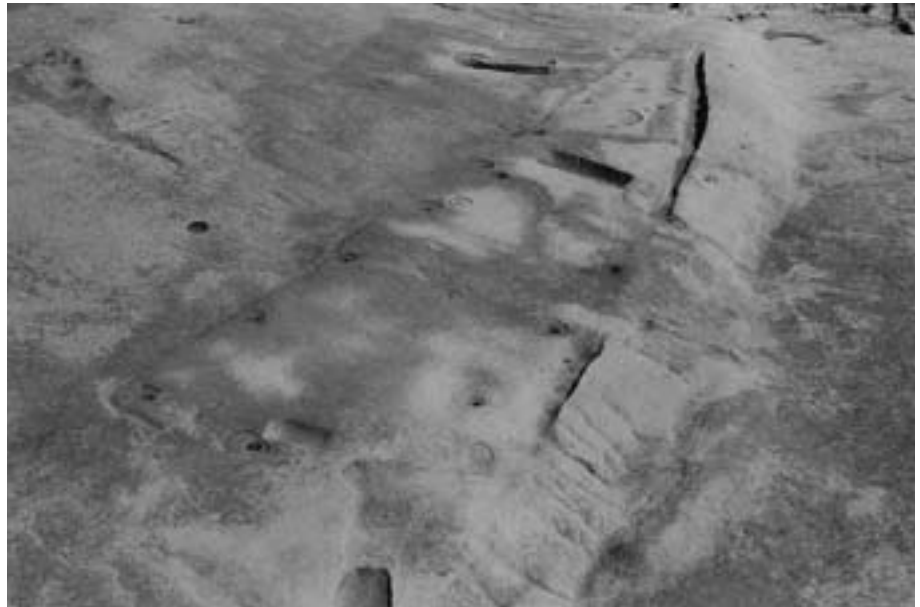
(1) 第2次調査地東部全景 (左上が北)



(2) 通路S F 27・S F 28 東部と鹿背山1号窯・2号窯 (左上が北)



(1) 掘立柱建物跡 S B 35 全景
(南西から)



(2) S B 35 全景 (西から)



(3) 溝 S D 23 東部遺物出土状況
(北東から)



通路遺構 S F 27 (左)・S F 28 (右) 全景 (西から)



(1) 第 2 次調査地西部全景 (左上が北)



(2) S F 27・S F 28 全景 (北西から)



(3) S F 27・S F 28 全景 (南東から)

鹿背山瓦窯跡第2次



(1) S F 27・S F 28 検出状況 (北西から)



(2) S F 28 B - B' 地点埋土断面 (北西から)



(3) S F 27 D - D' 地点上下路面石敷き断面 (北西から)



(4) S F 28 石敷き轍調査状況 (北西から)



(5) S F 27 東端部 (東から)



(6) S F 27 西端部 (北東から)



(7) S F 28 石敷きの轍 (東から)



(8) S F 28 石敷きの轍 (北西から)

(1) 粘土採掘穴遺構 S X 39・
S X 45 (北西から)



(2) S X 45 の壁面に残る
粘土検出状況 (北西から)



(3) S X 45 内もっこ出土状況
(北西から)





(1) 土坑 S K 16 遺物出土状況
(南西から)



(2) 土坑 S K 19 遺物出土状況
(南東から)



(3) S X 26 検出状況 (南から)



(1) 土坑S K 30 焼土・
遺物出土状況 (南東から)

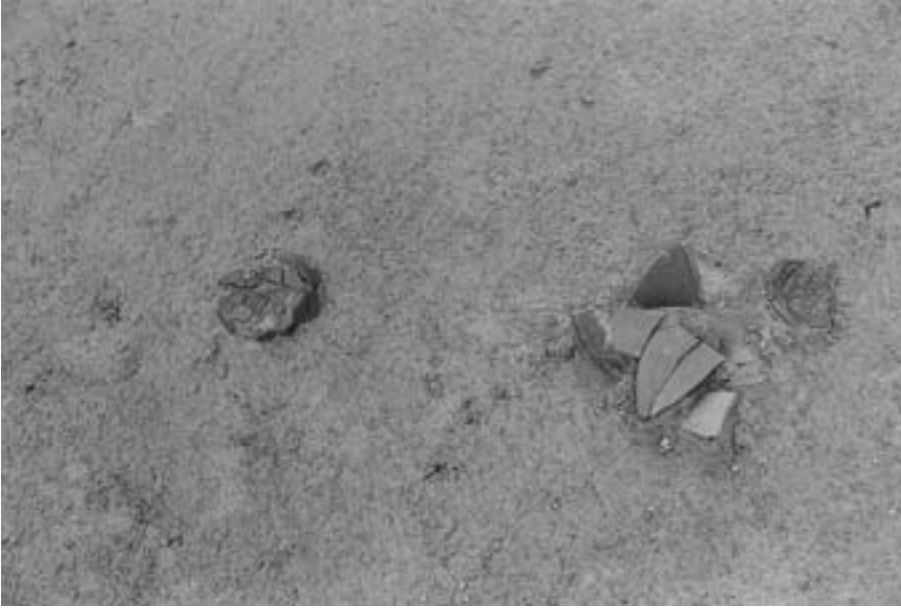


(2) 土坑S K 41 遺物出土状況
(南から)



(3) S K 32 検出状況 (南西から)

鹿背山瓦窯跡第 2 次



(1) 丘陵部 S X 38 周辺遺物
出土状況 (南から)



(2) 土坑 S X 38 遺物
出土状況 (南から)



(3) 近世墓 S X 24 (東から)

鹿背山瓦窯跡第 2 次



(1) 溝 S D 21 北部遺物出土状況
(北西から)



(2) S D 21 内集水榼 S X 44
(北から)



(3) S D 21 内軒丸瓦出土状況
(北から)



古墓 S X 18 全景（南から）

鹿背山瓦窯跡第 2 次



(1) S X 18 調査状況 1 (南から)



(2) S X 18 北部埋土断面 (南から)



(3) S X 18 調査状況 (南から)



(4) S X 18 木郭・棺内遺物出土状況 (東から)



(5) S X 18 棺内北小口遺物出土状況 (南から)



(6) S X 18 棺内南小口遺物出土状況 (北から)



(7) S X 18 木棺北小口部東側墓壙掘形断面 (南から)



(8) S X 18 中央西側墓壙掘形断面 (南から)

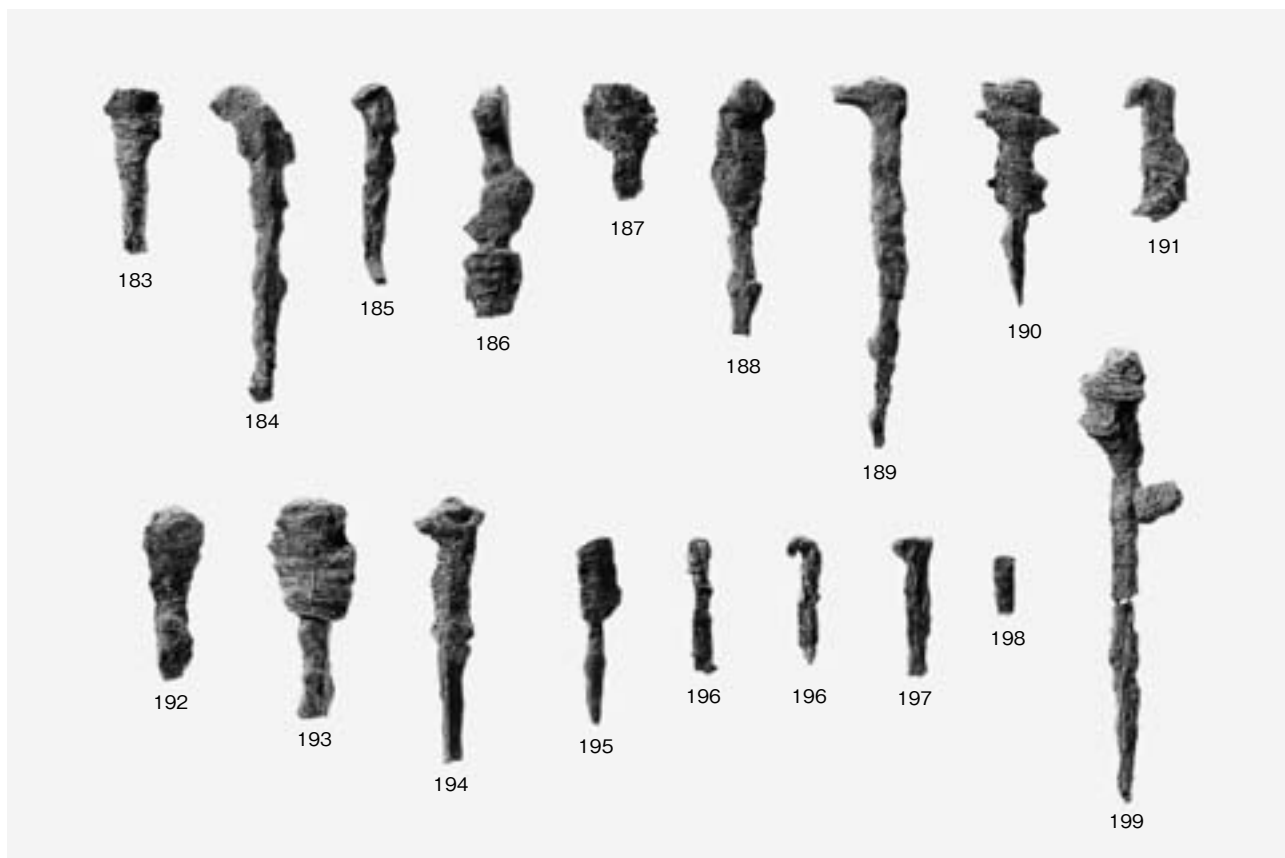




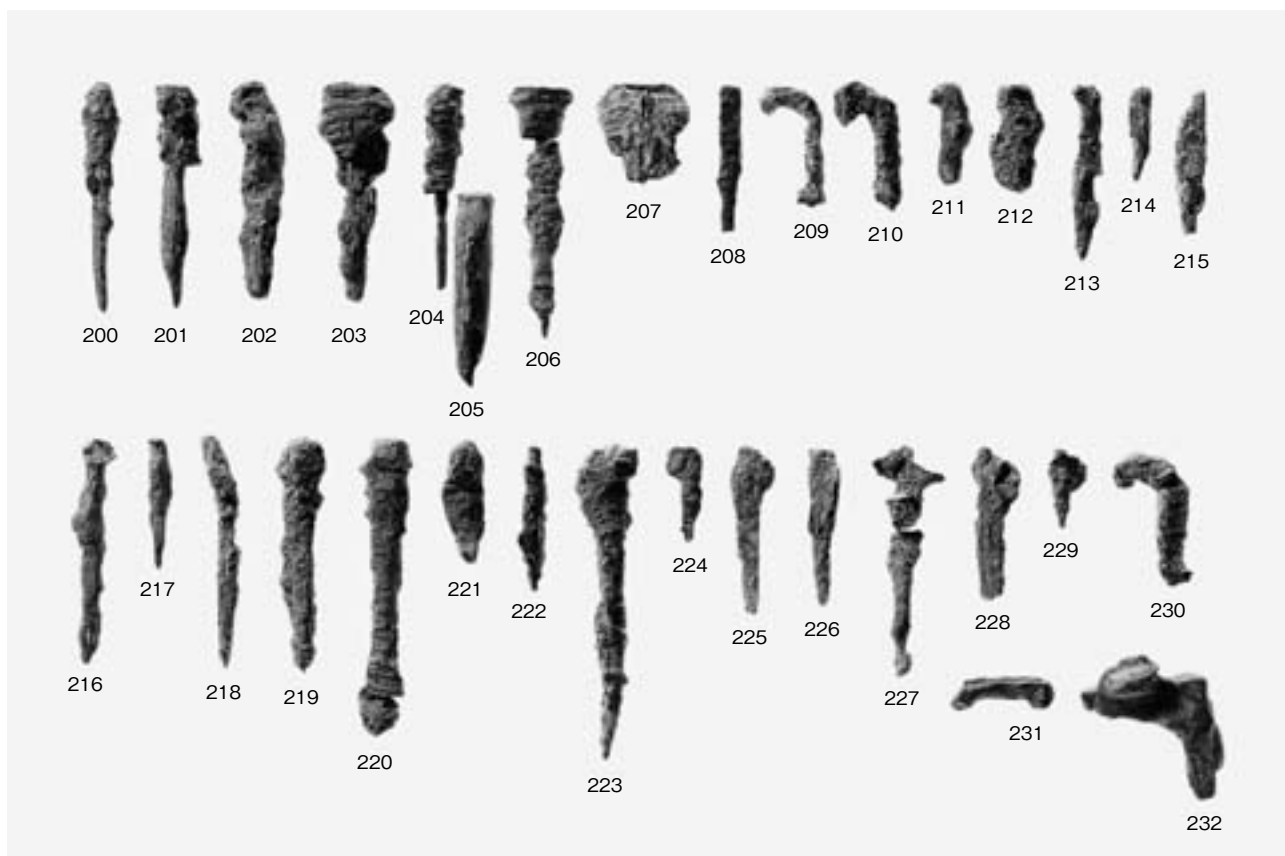




鹿背山瓦窯跡第 2 次



(1) S X 18 出土釘 1



(2) S X 18 出土釘 2

馬場南遺跡



(1) 馬場南遺跡調査前 (南西から)



(2) 馬場南遺跡調査前 (西から)



(3) 馬場南遺跡全景 1 (南西から)



(4) 馬場南遺跡全景 2 (東から)



(5) 第 7・第 8・第 10 トレンチ全景 (南から)



(6) 第 1 トレンチ全景 (西から)



(7) 第 2 トレンチ全景 (西から)



(8) 第 3 トレンチ全景 (西から)

馬場南遺跡



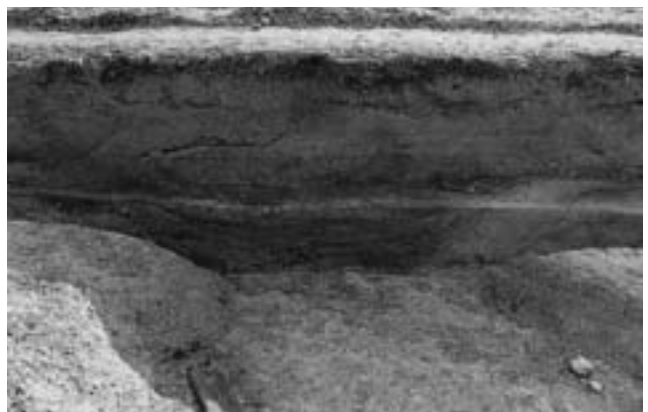
(1) 第4トレンチ全景 (東から)



(2) 第6トレンチ全景 (東から)



(3) 第8トレンチ全景 (東から)



(4) 第8トレンチS R 01 土層断面 (北西から)



(5) 第10トレンチ全景 (西から)



(6) 第10トレンチS R 01 検出状況 (南西から)



(7) 第11トレンチ全景およびS D 02 (西から)



(8) 第12トレンチ全景 (南東から)

馬場南遺跡



(1) 第 13 トレンチ全景 (南東から)



(2) 第 14 トレンチ全景 (北から)



(3) 第 15 トレンチ全景 (東から)



(4) 第 16 トレンチ全景 (北西から)



(5) 第 16 トレンチ S R 01 (右下が北)



(6) 第 16 トレンチ S R 01 (北から)



(7) 第 16 トレンチ S R 01 木簡出土状況 (北西から)



(8) 第 16 トレンチ S R 01 三彩出土状況 (南西から)

馬場南遺跡



(1) 掘立柱建物跡 S B 01 (左上が北)



(2) S B 01 (南西から)



(3) S B 01 柱穴 P 11 柱根検出状況 (南東から)

馬場南遺跡



(1) 井戸 S E 01 井戸内堆積土断面
(南東から)



(2) S E 01 井戸内堆積土中層下面
(南東から)



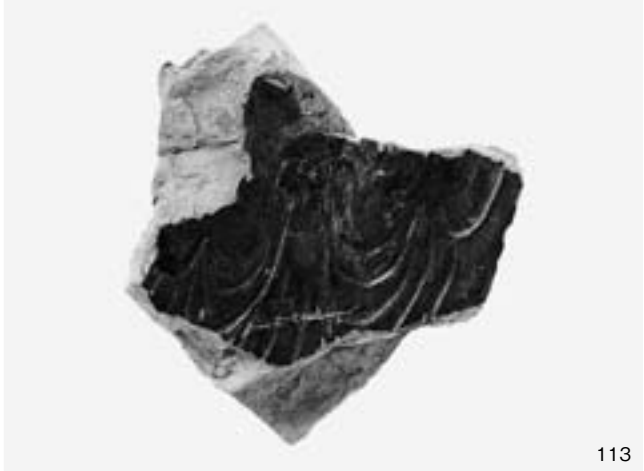
(3) S E 01 井戸内三彩壺頸部
出土状況(北から)



(1) 出土遺物 1 (須恵器・瓦)



(2) 出土遺物 2 (灯明皿)



馬場南遺跡

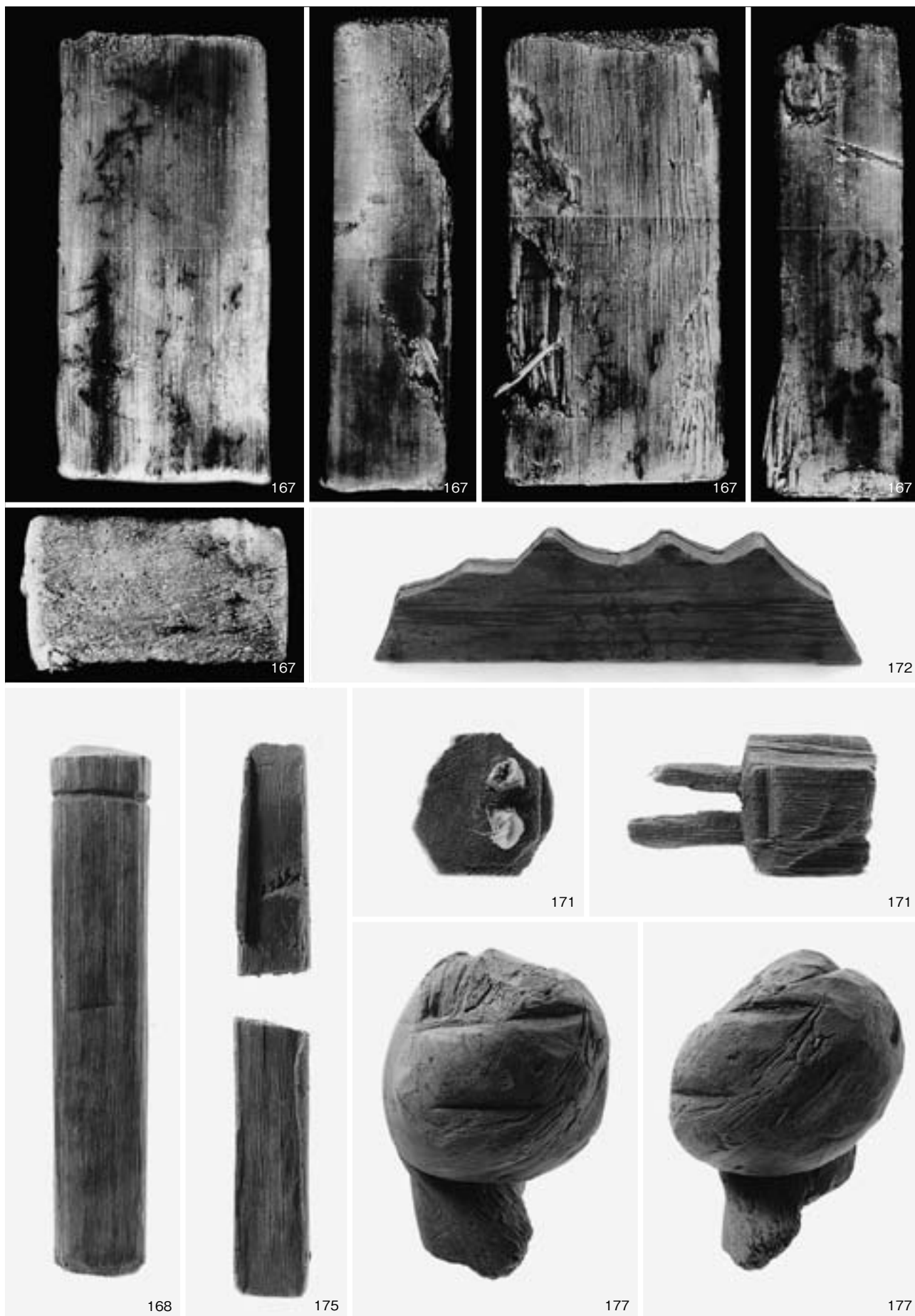


出土遺物 4 (墨書土器)



出土遺物 5 (木簡)

馬場南遺跡



出土遺物 6 (木簡・木製品)

茶臼ヶ岳古墳群の調査では、丘陵尾根上において弥生時代後期の方形台状墓2基、古墳時代前期の方墳3基を検出した。各々から木棺を納めた埋葬施設や壺棺、破碎土器供献とみられる土器溜りなどを確認した。さらに平安時代の経塚1基を検出した。

鹿背山瓦窯では、昨年度に瓦窯跡2基を検出しており、その瓦窯に関連して調査を進めたところ、瓦窯に関連した掘立柱建物跡1棟、粘土取り穴、通路2条を検出した。これらの遺構の検出により、瓦生産工程が明らかとなるとともに、出土瓦の検討から平城宮へ瓦を供給した官営瓦工房であることが明らかとなった。

馬場南遺跡は遺跡の範囲とその性格を確認するための試掘調査であり、この調査の結果、掘立柱建物跡1棟のほか、溝を検出した。溝内からは施釉陶器のほか、「神雄寺」などと墨書された須恵器が出土し、奈良時代の一般集落との異なる性格の遺跡と想定される遺跡である。

第901次調査では、古墳時代初（庄内期）の流路跡を確認し、流路内から良好な状況で土器が出土した。また、包含層中から縄文時代晩期の凸帯文土器も出土した。

第902次調査では、上内田地区において庄内期の竪穴式住居跡の一部を確認した。その他、試掘調査地では、本発掘調査につながる顕著な遺構遺物の検出は無かった。

第926次調査では、上内田、調子地区において古墳時代の土坑や平安時代の溝などの遺構を確認した。

第928次調査では、上内田地区において第902次調査試掘調査で確認していた竪穴式住居跡を面的に広げ、庄内期の多角形住居跡であることが判明した。また、調子地区では、平安時代後期の土坑を確認した。

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査報告集 第131冊

平成21年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141